或極めて少數の人々は眞正の完全なる情緒の記憶を有す。(『情緒の心理』一一章)

Ribot は種々面白き例を蒐集したれば以上第十一章は參考のため一讀の値あり。

さて同氏の研究によれば、上述の如く大概の人には情緒の復起なるもの殆ど皆無なりと云ふ。由來此情緒の復起なきは文學にも緣のなき人々にして、世の中には如斯き人頗る多し。文學など何處に面白味ありやなど稱して澄し居る俗輩は所謂(1)の部に編入さるべき資格を有し、彼等は根本的に濟度し能はざる部族なれば宜しく文學國の境外に追放すべきものとす。(3)に入るべき者は元より數の上に於て極めて少なし。是等の人には其感情の記憶實際元の儘にて復起し來るものなれば、これ亦容易に文學を近づくべからざるなり。戀愛小說を讀みて癪を起し、厭世文學に耽りて翌日華嚴に馳するの輩は皆此部員なりとす。文學者より云へば難有きに過ぎて少しく迷惑の感なき能はず。

然れども以上の(1)(3)は例外にして、眞に文學を樂しみ得る資格を具ふるは(2)に屬するものとす。即ち文學書中にあるFより己のfを部分的に復起する人々にして、此部分的にfを復起することが鳥渡適度に文學を味はひ得る程度なりとす。即ち直接經驗と間接經驗との差異は其fの强弱に存し、而して此間接經驗が其强さに於て直接經驗に劣るの事實は文學をして永く世界に迹をたゝしめざる一原因なるべし。一口に云へば吾人が文學書を讀み面白く感ずる主因は元の情緒が幾分

か稀薄になつて出現し來るにありて、即ち其刺激の堪へられぬ程に强くもなく、さりとて又蠟を嚼み冷水を飲む底の興奮なき腑拔けにあらず、此中間に位する、ぬる過ぎもせず熱過ぎもせぬ、謂はゞ情緒の上々燗を吾人に與ふるが文學書の文學書たる所以なるべし。尤も文學の嗜好深き人人の中にも往々(3)に位する人なきにあらず、夫がため折角の文學も却て思ひ掛けざる怪我の本となることあり。Shelley が始めて Coleridge の *Christabel* の朗讀を聽きたる時、其最も恐ろしき、物凄き一段に至りて突然卒倒して人事不省に陷りしと云ふ話あり、こは部分的fにあらず眞正のfが出現したるが故なり。*Christabel* もかゝる感情的の人物に遇うては一種の危險詩なり。Pope かつて Homer に關してかく朋友に告げしことありと云ふ。「Priam 王が Hector の死を哭し、己が周圍の吾子、奴隷共に其失望の歎きを漏らさんとする邊の一節は到底涙なしに讀み能はざる名文なり。」而して彼は其一節を朗讀したりしが半途にして涙に遮られて讀み終ること能はざりしと云ふ。更に一例を重ぬれば、Richardson の作中、Clarissa が Lovelace の爲百方苦しめられ、遂に恥辱を蒙つて死に至る時、種々の人々此架空的女性の運命を眞心より心配したりと云ふ實話あり。かの有名なる俳優 Cibber も Clarissa の草稿を見て非常に激し、"What a piteous, d—d, disgraceful pickle you have placed her in! For God's sake send me the sequel, or—I don't know what to say!..... My girls are all on fire and fright to know what

can possibly have become of her." なる手紙を著者に送りしが、Clarissa は結局遂に死すべき運命にありとのことを聞き、更にまた激して "God d—n him, if she should!" と書き送れりと云ふ。

又名優 Mrs. Siddons が Lady Macbeth の役を研究して感じたる恐怖の念は、彼女自身之を書き傳へたり。「妾は其日々の家事を全く片附けて後、劇中人物の稽古をなすを習慣とせり。Macbeth 夫人の初役の前夜、妾は平常の如く一室に閉ぢ籠もり此大役の練習に取り掛かりしが、長からぬ役なれば雜作もあるまじく、加之妾は其頃二十歳の妙齡なりしかば、科白さへ呑み込めば其他の方面にはさしたる用意も要るまじと、其人格の發展等に關する微妙の工夫に就きては殆ど豫期するところあらざりき。其夜四隣鎭まり返りし深更に、妾は心を落ちつけ、一場又一場と練習を進めしが、やがてかの刺殺の場に至りし時恐怖の念俄に湧き來り、最早其先一歩もふみ出し難くなりしかば、急ぎ燈を取り、恐ろしさに魂も消えんばかりにわが室を出で、階段を登るにも己が衣の音に、何者か追ひ來るが如く覺え、漸くに寢室に歸りぬ、其室には夫熟睡し居たりしが、燈を消す勇氣もなく、衣服さへ其儘に床にまろび入りぬ。」

固より吾人の情緒の復起の程度は順次變化するものにして、決して Ribot の說きし如く判然三部に區別し得るものにあらず、或者は一部と二部との中間に、或者は二部と三部との境に彷徨す

べし。以上擧げたる諸例の如き皆極端の例外にして、中にも Shelley のそれに至りては誠に其窮極にして到底普通讀者の企て及ぶべからざる例なりとす。十九世紀の始め佛國にて *Othello* を演じたる時、女房殺しの場に差し掛かりて、突然聽衆の中より「斯る美人を黑奴に殺さしむること能はず」と叫びながら短銃もて主人公を目掛けて狙撃したる者ありしと云ふ。(Beers の『十九世紀の浪漫主義』) 其情緒の强さは稍 Shelley のそれに似たり。

先づ例外は取り除き普通文學を賞美する吾々同輩に在りては、直接經驗の場合と間接經驗の際と其間に感情の量的差異の存すること何人も疑ひ能はざる事實なるべく、此差異あるが故に文學が一種適當の刺激を生じ讀者に面白き快感を與ふるものとす。

(II) されども直接、間接經驗の差異は單に上記の如く數量的なるに止まらずして、性質上より見ても著しき現象あるを認むべし。元來吾人が文學を賞翫するとは其作者の表出法に對する同意を意味するものとす。然るに其表出法たるや上述の如く故意に又は無意識に多くの事實的分子を閑却して文を行るものなれば、かくの如く一種の除去法の結果現はれたる文學的作品に對し吾人が生ずる f は、其實物に對して感ずる情緒と質に於て異なること無論の事なるべし。されば吾人が文學を讀んで苟も之を賞翫する限りは、多くは作者に馬鹿にされ、少なくとも書を手にして面白しと感ずる間全く自己を其作者の掌中に委ねつゝあるものなるべし。

今少しく讀者が文學賞翫に際し行ふ除去法につきて論ずべし。

(一)第一に考ふべきは自己關係の抽出なり。即ち自己の利害得失の念一向心に起り來らざるが故に、此自己觀念より起るf(此fは非常に强力なるものなるを忘るべからず)を悉く除去抽出して作中の事物に對し得る場合を云ふ。文藝に沒自己の性ありと云ふは決して新説にあらざれども、こゝに余が特に注意せんとするは此自己觀念の部分的或は全部的抽出により吾人は事實と全く反對のfを生じ得ると云ふ現象にあり。

"Now is the winter of our discontent
Made glorious summer by this sun fo York;
And all the clouds that lour'd upon our house
In the deep bosom of the ocean buried.
....
But I, that am not shaped for sportive tricks,
Nor made to court an amorous looking-glass;
I, that am rudely stamp'd and want love's majesty
To strut before a wanton ambling nymph;

I, that am curtail'd of this fair proportion,
Cheated of feature by dissembling nature,
Deform'd, unfinish'd, sent before my time
Into this breathing world, scarce half made up,
And that so lamely and unfashionable
That dogs bark at me as I halt by them;
Why, I, in this weak piping time of peace,
Have no delight to pass away the time,
Unless to spy my shadow in the sun
And descant on mine own deformity:
And therefore, since I cannot prove a lover,
To entertain these fair well-spoken days,
I am determined to prove a villain
And hate the idle pleasures of these days."

—Shakespeare, *Richard III*, Act I. sc. i. ll. 1–31.

以上は Duke of Gloster の感慨なり。讀者これを讀んで如何の感あるかを思へ。彼は先づ天下太平に四海波靜なる今日自己の腕を振ふの餘地なきことを慨し、又己の容姿矮醜にして婦女子と共に太平の遊戲をなすに適せざるを嘆じ、恰も日中に孤立して形影相憐むの不甲斐なさを悲しみ、遂には路傍の犬に迄吠えらるゝを喞ち、かゝる治平の世が到底自己と調和し難きを悟り、玆に一大騷動を案出して天下を反覆せんと志したるなり。其字句の妙、譬諭の巧、反映照應の明快等は余が今論ぜんとするところにあらず、只余は此感慨、此男子、此怪物の容貌、意志、情緒に對し如何なる感あるかを讀者に問はんと欲するのみ。讀者中或はこは惡漢なり、厭ふべき男なりと感ずる人々もあらん、されども如斯人物を目して、無意味なり、愚なるものなり、毫も吾人の感興を動かすに足らずとなす人は少なかるべし。否一方に於ては油斷のならぬ曲者に對する不快の感あると同時に、かゝる剛情なる毅然たる不屈の眇たる小丈夫の呑天の膽を賞嘆する念湧き出でて、先の不快の感は其爲に弱められ、後景に引き下げらるゝこと疑なし。余は之を一讀して彼を嫌ふ念よりも、寧ろ彼を賞嘆することの數倍なるを自白するものなり。今暫く此感じを共通のものと假定せんに、こゝに更に讀者に向つて問ふべきことあり。吾人若し實際の世の中に立ち相互往來する知友のうちにかゝる出來損ねの醜男子あり、其心根の曲がれるは勿論、如何にしても人を害し世を亂さんとして、しかも凡衆を抜くの才幹を具有すると假定せんに、此人物に對する

吾人の所感は如何あるべき。吾人のうち或は彼を非凡なりと賞する人あるべし、されども此賞嘆の念は一方に於ける畏怖、嫌厭の念により壓逼せられて遂に其一隅に押し込めらるゝに至らざるか。今一歩を進めて若し吾人が如斯き化物とも人間とも見當のつかぬ動物を當の敵として此世に兩立すると假定せよ。吾人に其際氣味惡き感あらざるか、畏怖の極、肌粟を生ずることあらざるべきか。餘人は知らず余の如き臆病者は確かにこの感あるべきを想像す。

さて沙翁が寫し出したる Gloster に對すると實際の Gloster に對するとの間に情緒の差異かくの如く著しきは果して何に基づくべきか、疑ひもなく紙上の Gloster と朋友中の Gloster とに對する情緒の差なり。紙上の奸人は我を敵とする氣遣ひなく、これを敬して遠ざくる必要もなし、卽ち吾人の自己觀念に何等關係を有せざる人物なり、故に吾人の利害問題より打算するの必要を認めず。此の如く實際にありては恐怖の分子に制せられて苦痛なるべき感が、此自己觀念の除去の爲に却て賞嘆的快感を伴なひ來ることは誦讀の際見逃すべからざる事實なりとす。

(二)次に考ふべきは善惡の抽出なりとす。こは讀者が必ず然かすべしと云ふにあらず、たゞ然か成し得と云ふのみ。從つて前の如く實際と誦讀の上に全然反對の結果を生ずとは斷言し難し。例へば藤村操氏が身を躍らして華嚴の淵に沈み、又は昔時の Empedocles が噴火坑より逆しまに飛び入るが如し。是等の事實は此事實を聞き若しくは此事實を讀むの一方に於て頗る壯烈の感を生

ずるに關はらず、若し吾人が華嚴の傍に立ち又は Etna 頂に座を占め、彼等の死せんとするに會するあらば、吾人はわが壯烈美の滿足を得んが爲に拱手して其死を從容裏に傍觀すべきか、或は狂呼身を驅つて之を救ふべきか。之を救ふとせば彼等は德義の情に驅られたるなり。德義の情に驅られたるは壯大、雄俊の情緒を犧牲にして顧みざるなり。卽ち直接經驗にあつては德義心を脫却しがたきも間接經驗に變ずる途端に之を全く抽出し得るが故に此差違を生ずるに過ぎず。去れども今一人の高襟者流が自轉車にまたがりて意氣揚々と進み來る途端に俄然車を覆して轉倒せる場合を想像せよ。吾人は傍觀してこれを笑ふべきか、或は馳せて之を扶起せざるべからざるか。觀る人の半數以上は必ずこれを一笑に附して滑稽化することを憚らざるべし。此場合に於ては直接經驗の際も猶間接經驗の時と同じく德義心を抽出し得るが爲めにかく火山瀑布の時とは反對の結果に到達するに過ぎず。尤も德義心は人に因つて其强弱の度を異にするが故に其抽出も亦人によりて幾分の差等あるを免かれず。かの Nero は到底尋常一樣の心理を以て論ずべからざる程極端に馳せたるの好例なり。彼常に Priam を羨む。其故を問へば Troy 落城の折、壯宏なる宮殿の跡も殘さず烏有に歸したる偉觀に逢ひ得たりと云ふに過ぎず、かくの如くして彼は遂に其都羅馬を一炬に付して宿願を現實にせりと傳ふ。斯樣の大美術家に至りては誠に論外の例とするの外なし。(Renan は其著 *Antichrist* に於てこれを否定し、これを誇大の傳說に過ぎずとせり、尙小

說 *Quo Vadis* を參照せよ。)

文學賞翫の上に於て全然此分子を除去せんとすれば所謂 "Art for art" 派(純藝術派)の說に歸することと必然の勢とす。其派の人々に何故かゝる物を書きしやと問へば、たゞ面白しと感じたるが故のみと答ふ、而して藝術家の本領はこゝにて盡きたりと云ふ。愛讀者も亦これを以て面白しと云ふの外何等の理由を附することなし。こゝに於てか道德家對藝術家の紛擾絕ゆることなし。

上來述べ來りし如く文學の內容は情緒を主とするものにして、これあるが故に文學は成立し得るものなり。而して道德は一種の感情に過ぎず。此故に道德派對藝術派の衝突を追跡して其源に溯るときは文學を解釋するに道德の情緒を以てすべきか、はた其他の情緒を以てすべきかの議論に歸着す。その孰れを以て解釋するの妥當なるかは固より作家の技倆と讀者の傾向に由りて決せらるゝ事論を待たずと雖ども、孰れに從ふも文學的解釋にして又正當なる文學的解釋なるは如上の所說にて明瞭なるべきを信ず。かの道德を以て生れ、道德を以て死し、造次顚沛にも道德を以て終始せざる可からざる道學者は論ずるの限りにあらず。道學者にあらずして、而もあらゆる文藝に道德的分子なかる可からずと主張する論者は文藝鑑賞の際に於て自己の心的狀態を遺失せるものと云はざる可からず。彼等は重大なる道德的分子の混入し來るべき作品に對してさへ暗々裡に此分子を忘却して、しかも恬然たりし過去幾多の經驗を憶起する能はざるの徒なるべし。否彼

等は "Art for art" 派を攻擊するの以前よりして己れ既に其實行者たりし事を失念したる健忘者なるべし。之に反して今更 "Art for art" 說を物珍らし氣に鼓吹するの徒は如何に此現象が上下數百年の文學を貫ぬいて堂々と存在せるかを知る能はざる盲目者流に過ぎず。若し夫れ文藝は道德と沒交涉なるが故に、いかなる作品を爲すも此方面に一顧の注意を拂ふに價せずと主張するものに至つては、如何に道德的分子の文學の一大要素なるかを知らざるものなり。道德の情緒たる事を知らざるものなり。情緒は文學の骨子なり、道德は一種の情緒なり。去れども道德は文學に不用なりと云ふは、當然廣かるべき地面に强ひて不自然の垣をめぐらして、好んで掌大の天地に跼蹐するものと云ふべし。

余は玆に善惡觀念の抽出を以て文學の或る部分の賞翫に缺くべからざる條件なりと斷言す。さて之を二種に分かつ。(1)は非人情と名づくべきもの、卽ち道德拔きの文學にして、此種の文學には道德的分子入り込み來る餘地なきなり。例せば「李白一斗詩百篇、長安市上酒家に眠る」と歌はば如何。成程自墮落なるべし、されど之を以て別に不德とは云ひ能はざるべし。「醉うて眠らんと欲す、君暫く去れ、明朝意あらば、琴を抱いて來れ。」禮を失したるものかは知らねど、不道德にはあらざるべし、卽ち始めより善惡界の外にあるものとす。或はかの詩人 Cowper の *John Gilpin* の如き、たゞ John Gilpin なる男の失策を面白く描出したるに過ぎず、道德とは全く沒交

涉なりとす。或は Burns の *Tam o' Shanter* の如き夜半 Tam が馬にて Kirk の傍を乘り過ぎむとする時、妖怪の後より彼を追ひかけると云ふ滑稽趣味に外ならず、是亦道德とは何等交涉なし。其他 Lover の *Handy Andy* の如き亦此種の筆墨なりとす。人事問題に關する文學にして旣にかくの如きものあり、況や人事と緣遠き人情の混ずることなき自然現象を咏ずる詩歌に於て殊に此種の非人情的、沒道德的趣味多きは怪しむに足らず。由來東洋の文學には此趣味深きが如く、吾が國俳文學にありて殊に然りとす。(2)は道德的分子の當然混じ來るべき問題なるにも關せず、讀者が其道德的方面を忘却して之を味はふ場合を云ふ。暫くこれを不道德文學と名づくべし。人は云はん、非人情、沒道德は其意を了す、されども不道德に至りては同情を寄せ難し、かゝる文學は存在すべくもあらず、若し存在し得たりとすれば、そは澆季の世に於て始めて然るのみと。誠に然り、されども此不道德文學は抑も世界に文學あつてより以來存在し來り、又文學が存在する限り滅亡するものにあらず。換言すれば吾人は實際に於て道德的なれども文學上又は文學を味はふ時のみ不道德なることあり、少なくとも道德的問題に對し其道德的分子を忘れ得るものにして、此性質なき人は遂に完全に文學を理會する能はざる奇怪の地位にあるものとす。今少しく節を分ちて此道德的抽出の場合を說明すべし。

(a)吾人は作家の表出法に眩惑せられて善惡の標準を顚倒し、同情すべからざる人物に同情し、

或は此同情を一方にのみ寄せて全然他の一方を閑却し去る事あり。自己觀念の抽出は必然の結果として公平を伴ひ來るべきは論なけれども、其公平は單に自己觀念を交へずと云ふ點に於てのみ有效なるものにして、篇中の人物に對しては道德的公平を缺くこと甚しき場合多し。一例として Bronte の *Jane Eyre* を採るべし。Rochester と Jane との相思の樣は實に浪漫派一流の戀愛にして普通の圏外に逸出する事遠しと雖ども此點に關しては吾人何等の異議を有せず。否彼等が相愛するの情一歩を進むる每に吾人の同情も亦一歩を進むる程に興味あるを覺ゆべし。かくして吾人の同情は彼等の愛と共に增加し來りて、吾人の神經其極度に緊張せられたる時漸くにして彼等の結婚の準備は成る。故にもし華燭の典にして事なく濟まざれば、啻に當人同士の落膽に止まらず、吾人讀者も亦意に充たぬ心地なるべし。然るに愈〻結婚の間際に至りて圖らずも Rochester は此愛人を迎ふるの資格なきものとなり了る。彼は既婚の人なり。其妻は狂人なれども、歷然として生存す。其妻の生存する以上は重婚の罪を犯すことなくして思ふ人を娶るの權利なし。

最初より作者に釣り込まれたる吾人の同情は果してこゝに至りて、此障害と共に卒然として中絕すべきか、乘り掛かりたる舟の俚諺は單に現實世界に適用せらるゝものにあらず。戲作者が創造したる假設の人物に對しても亦同樣の感なきを得ず。こゝ迄進行したる情事の、斯程の障害のため成立し難きは殘念なり、氣の毒なりとは一般讀者の腦裏に起る自然の情なるべし。自然の情なれば左程不道德のものと斥くるにあらず、されども其情緖の裏面には既に公平を失したる不道德の蟠るものあり。此場合に於る吾人は殆んど馬車馬の如し。先妻は死ぬも可なり、社會は亂るも可なり、たゞ兩人の戀だに成就せばと思ひ煩ふべし。かく思ひ煩ふ折此結婚は遂に行き惱みの末、哀れにも本人等は訣別の止むなきに至る。讀んでこゝに至つて吾人の同情は不道德の方面に向つて更に一歩を進む。思へらく此狂女を殺して相思の情を遂げしめんと。

最後に此狂女が家に火を放つて自ら燒死するの一段に至つて手を拍つて喜ぶものは單に Jane のみにはあらざるべし。これを不道德情緖の頂點なりとす。Jane は其當時を物語りて曰く、

"he ((=Rochester)) went up to the attics when all was burning above and below, and got the servants out of their beds and helped them down himself—and went back to get his mad wife out of her cell. And then they called out to him that she was on the roof; where she was standing, waving her arms above the battlements, and shouting out till they could hear her a mile off. I saw her and heard her with my own eyes. She was a big woman, and had long, black hair; we could see it streaming against the flames as she stood. I witnessed, and several more witnessed, Mr. Rochester ascend through the skylight on to the roof: we heard him call 'Bertha!' We saw him approach

her; and then, ma'am, she yelled, and gave a spring, and the next minute she lay smashed on the pavement."—Chap. xxxvi.

此一節は誠に慘劇の極を寫したるものにして何人もこれに對して悽然の感なき能はざるべし。されども此作を冒頭より迴り來りし讀者の心には却て一種の慰安を與ふべく、其希望に達するの途を妨げたる唯一の障害のこゝに全く除き去られしを喜ぶべし。如斯吾人は作者の筆に迷はされて同情を値するものに同情を傾くる能はず、批難すべきものを批難する能はざることあり。焰火の中に葬られたる妻女は狂人なれども正妻なり、吾人が彼女に對する冷淡の態度は決して當を得たるものと云ひ難かるべし。

吾人は文學を賞翫するにあたり、常に此意味に於ける不道德を犯すものにして、所謂健全の趣味を解する作者も讀者も共に遂に此偏重を免れ能はざるなり。此故、かの健全派の人々がかゝる不道德を平然として實現する一方に於て極力純文藝派を攻擊するは要するに五十步百步の議論たるを免れざるべく、作品を支配する道義的觀念が或程度以下に墮落したる時有害の文學として之を斥け、もし墮落の程度こゝに達せざれば、多少の不道德分子を含むにもかゝはらず健全なりと誤認して毫も咎むるところなきに過ぎず。故に姦通に同情を强ひ、殺人に嘆賞を値せしむる純文藝派も淑德ある *Jane Eyre* の作家も道德的ならざるの點に於て共に異なることなしと云ひ得べし。

只世人が一方を以て許容すべからざるものとなすの傍、他方を目して健全なりと賞する所以は單に此不道德分子の程度如何によつて決せられたる問題ならん。

(b)前節に述べしは讀者の道德標準が當を失して、其同情の分配公平ならざる場合なりき。されど此處に說かんとするところは讀者が或文學的作品に對し其道德的情緒の全部を脫却することにして、評家が普通崇高、滑稽、純美感等と稱するもの卽ち是なり。

(い)先づ崇高につきて云へば、凡そ自己以上の勢力——精神的或は肉體的——に對して生ずる感情は凡て此名稱の下に總括し得べく、此力若し潛伏の狀態にあれば兎に角、一旦事實に出現する時は一面に創造的なると共に其裏面に必ず破壞的勢力を包むものとす。創造的方面の一例を擧ぐれば Milton の *Paradise Lost* に天使 Raphael が Adam の請に任せて天地創造の由來を說く條の如し。尙其潛伏の態にあるものに至りては、古代希臘の彫刻或は Keats の *Hyperion* の如きを擧げ得べし。偖活動的崇高の一面なる破壞力とは、例へば三陸の海嘯、安政の地震若しくは天明の大火等人畜財帑を惜しげもなく掃蕩し去る慘劇を稱するものにして、是等を直接に經驗するときは義捐金の醵集となり焚き出しの請求となるにも關らず一旦間接經驗として自己觀念を除去する瞬間に於て、かゝる道德的 f は消滅して、たゞ莊嚴となり猛烈となるを見る。

英國の文士 De Quincey が遺したる詩人 Coleridge の火事見物の記はよく個中の消息を傳へ

たりと云ふべし。此一節は彼の長篇 *On Murder, Considered as one of the Fine Arts* 中にあるものにて、彼が殺人を一種の美術として視得べしとの主義の說明材料に供せられたるものなり、全章通讀の價値あるを以て茲に之を引用す。

"To begin with S. T. C. One night, many years ago, I was drinking tea with him in Berners Street...... Others were there besides myself; and, amidst some carnal considerations of tea and toast, we were all imbibing a dissertation on Plotinus from the Attic lips of S. T. C. Suddenly a cry arose of, '*Fire—fire!*' upon which all of us, master and disciples, Plato and *οἱ περὶ τον Πλάτωνα*, rushed out, eager for the spectacle. The fire was in Oxford Street, at a pianoforte-maker's; and, as it promised to be a conflagration of merit, I was sorry that my engagements forced me away from Mr. Coleridge's party, before matters had come to a crisis. Some days after, meeting with my Platonic host, I reminded him of the case, and begged to know how that very promising exhibition had terminated. 'Oh, sir,' said he, 'it turned out so ill that we damned it unanimously.'"

火事見物に赴きたるColeridgeが切角の思はく通りに火勢の蔓延せざるを嘆きたるは德義心を

缺ける無頼漢に似たりと雖も、かゝる場合に無頼漢たらざるものは要するに壯烈の趣味を有せざる沒風流兒に過ぎず。De Quincey は彼の爲めに辯じて曰く「Coleridge はかゝる場合に際して、よく德義的に活動し得ざる程に肥り過ぎたる結果なるやも計りがたし。去れども立派なる基督信者に相違なからん。此善良なるColeridgeが放火狂なりとは何人も假定し得ざる所なり。彼が洋琴製造家と洋琴とに對して凶事あれかしと祈るとは又何人も想像しがたからん。否、余は斷言す。もし必要を認むるときは彼は彼の不便宜なる肥體を挺して消火器を運轉せるならん。然れども此場合如何と見よ。德義は必要にあらず。消火器の到着と共に道德は保險會社の上に落つるにあらずや。故に彼は當然の權利として彼の趣味を滿足すべきなり。彼既に茶を棄てゝ半途に立つ。何等の報酬を得る事なくして可ならんや」De Quincey の言肯綮を得たるに似たり。

かゝる問題には火事が最も卑近の例證なりと認めてか、彼は更に其作の附言に同じく火災を引用せり。彼とても其罹災者を氣の毒に思はざるにはあらずと前置きして曰く、"after we have paid our tribute of regret to the affair, considered as a calamity, inevitably, and without restraint, we go on to consider it as a stage spectacle. Exclamations of—How grand! how magnificent! arise in a sort of rapture from the crowd. For instance, when Drury Lane was burned down in the first decennium of this century, the falling in of the roof

was signalised by a mimic suicide of the protecting Apollo that surmounted and crested the centre of this roof. The god was stationary with his lyre, and seemed looking down upon the fiery ruins that were so rapidly approaching him. Suddenly the supporting timbers below him gave way; a convulsive heave of the billowing flames seemed for a moment to raise the statue; and then, as if on some impulse of despair, the presiding deity appeared not to fall, but to throw himself into fiery deluge, for he went down head foremost; and in all respects, the descent had the air of a voluntary act. What followed? From every one of the bridges over the river, and from other open areas which commanded the spectacle, there arose a sustained uproar of admiration and sympathy. Some few years before this event, a prodigious fire occurred at Liverpool; the *Goree*, a vast pile of warehouses close to one of the docks, was burned to the ground. The huge edifice, eight or nine storeys high, and laden with most combustible goods, many thousand bales of cotton, wheat and oats in thousands of quarters, tar, turpentine, rum, gunpowder, etc., continued through many hours of darkness to feed this tremendous fire. To aggravate the calamity, it blew a regular gale of wind; luckily for the shipping,

it blew inland, that is, to the east; and all the way down to Warrington, eighteen miles distant to the eastward, the whole air was illuminated by flakes of cotton, often saturated with rum, and by what seemed absolute worlds of blazing sparks, that lighted up all the upper chambers of the air. All the cattle lying abroad in the fields through a breadth of eighteen miles, were thrown into terror and agitation. Men, of course, read in this hurrying overhead of scintillating and blazing vortices, the annunciation of some gigantic calamity going on in Liverpool; and the lamentation on that account was universal. But that mood of public sympathy did not at all interfere to suppress or even to check the momentary bursts of rapturous admiration, as this arrowy sleet of many-coloured fire rode on the wings of hurricane, alternately through open depths of air, or through dark clouds overhead."

此記を讀むものは吾人が破壞的崇高の前に如何にわが道德fを沒却して假令寸時たりとも其偉觀を樂まずんば已まざる程此種の情緒に支配せらるゝかを知らん。即ち此場合に於ては道德fの當然占むべき位置を審美的fが横領したるものと解釋すべきなり。

(ろ)次に文學の不道德分子は道化趣味と相結ぼれて存する事あり。道化趣味の心理學的定義に至

つては Hobbes 以後種々の説明あるべきも、別にこゝに詳述の要を認めざれど、たゞ此趣味に「道德の除去」常に行はるゝ事を説明せんとす。此趣味のうち落語の如きは全く此除去を行ひ得ることにより始めて價値を有するもの多く、例へば卑猥にして士君子の耳に容れ能はざる廓通ひの小話様のものも、之を表出する方法宜しきを得れば女色其物にfを止むることなく、これを用ゐて其目的とする道化趣味を巧みに生ぜしむることを得るものなり。されば一見甚だ風儀に障害ある如きも其實ありふれたる戀愛小説より遙かに健全なるものとす。名ある文學より其例をとれば、かの *Don Quixote* の主人公が窓口より慕ふ女の許に忍び寄り、遂に麻繩にてわが手を窓に縛せられ、終夜其處に立往生したるが如き、或は *Gil Blas* の浮れ男、思ふ女に通ふ戀路の關守を鶏ならぬ猫の假色にて譯もなく首尾せんものと巧みしが、眞の野良猫と聞き誤られ其ため石にて烈しく打たれたりと云ふが如き皆これに屬す。或は英文學に於ては其昔 Chaucer が其『物語』中に Bath 生れの女房に滔々と五人の夫が代る〲苦しめられし様を語らしむるが如き、或は同じ著中の『商人の物語』の如き其内容は如何にも猥りなること甚だ多けれども、通讀の際は只哄然と大笑するを禁じ能はざるのみ。又かの *Vice Versa* 中の小兒が護符の力をかりて己の父と形を交換して、平生父より苛刻に取扱はれたる鬱憤を一時に晴らさんとするが如き全て此種の好例なり。玆に余は此機會を利用して滑稽化されたる盜賊文學を物語るべし。

沙翁の創造にかゝる幾多の劇人物中、最も滑稽の趣味に富み又一方に大に不德の分子を兼有するものは、*Henry IV* (Part I and II) に彼が八面透徹の靈筆を馳せて生み出だせる沒義悖德漢 Sir John Falstaff なりとす。彼は疑もなく一種の怪物にして、其言語動作は獨特のfを喚起するが如し。彼は貪婪飽くなきの慾性を有し、酒亂にして泥醉晝夜を分かたず、又大法螺吹きにして、信用なるものを眼中に置きしことなく、常に脅喝を事とし、近寄り難き氣燄を以て唯一の武器とするにも關はらず、其實無類の臆病者にていざ鎌倉の間際には未練もなく忽ちに腰を拔かす。彼は普通人類に第二の天性として共通なる面目の觀念を有せず。加之彼は盜賊なり。行人を脅しては財を掠め、財を掠めては酒色の料に供して得意なり。又難題、云ひ懸りに妙を得て、盜まれざるに盜まれたりと云ひ、掠められざるものを掠められたりと主張す。假に吾人が日常相往來する知人のうちに如此き型の人物ありとせば、吾人は果してこれを如何に處置すべきや。苟も人並の道義心を具へたるものならんには到底これを寛恕し能はざるべし。又更に同樣の人物が小說戲曲に現はれたる場合には如何、吾人は依然として其態度を快しとなす能はざるべし。然るに此人物が一たび沙翁の靈筆に上る時、事實は全く反對の結果を生じて讀者は遂に彼を憎む能はず、また彼を斥くる能はざるなり。德義の方面より彼を憎み、彼を斥くる念は滑稽美感の壓迫を受けて遂に頭を擡ぐるの機會を得ず少時も永く彼が舞臺の上に活動して健全なるを希ふの外又他を顧みる

の違なきに似たり。

彼が天下の大道に旅客を脅す語に曰く、"Strike; down with them; cut the villains' throats; ah! whoreson caterpillars! bacon-fed knaves! they hate us youth: down with them." (1 *Henry IV*, Act II. sc. ii.) と此長鯨的氣燄の裡には道ふべからざる一種の面白味あるに非ずや、五十の坂を超えたる老人が自から Youth を以て任ずる所甚だ珍なりと云ふべし。かくして Falstaff は脅迫首尾よく圖にあたりて思の如く旅客を脅かし得たる折しも、酒飲み仲間の皇太子と Poins かねて諜し合せたる事とて、同じく強賊の假裝にて突然横合より現はれ出でて、恐るゝ Falstaff を一も二もなく脅迫して彼が折角盜みたる品物を悉く召し上げて姿を隱す。"Falstaff sweats to death." とは皇太子が後より其時の光景を思ひ出しての言葉なれば此老漢の如何に狼狽せるかを察するに餘りあるべし。

辛うじて其場を落ち延びたる Falstaff は漸くの事、例の "Boar's Head" と云ふ酒鋪迄歸る。彼を脅かしたる皇太子は何食はぬ顏にて、こゝに彼を待ち合せつゝありければ、彼は俄然として以前の態度を一變して皇太子に喰つてかゝる。罵つて云ふ、今日の仕事に加勢せぬ君は臆病なり臆病なりと。(讀者もし沙翁を繙いて、此際 Falstaff の用ゐたる Coward なる語を數へば必ず其多きに驚ろくならん。臆病の標本なる彼は Coward なる言語を皇太子に向つて連發する事實に

十一度の多きに及べり。Act II. sc. iv を見よ。) かくて彼は其曉の爭闘を皇太子に物語るに始めは敵を無慮百餘人と云ひ、問ひ返さるれば否二人なりと答へ、又問はるれば七人と正し、あるは四人となり、さては十一人と變じて遂に要領を得ず。單に相手の數のみにはあらず、黑白もわかぬ眞暗闇と語るあとより、打つてかゝる敵は綠染の服を一着して……抔前後辻褄の合はぬ事を意とせざるに似たり。聽くものゝ咎めざるが故に意とせざるにあらず。咎めらるゝも毫も意とせざるなり。咎められたる時の彼の語に曰く、"Give you a reason on compulsion! if reasons were as plentiful as blackberries, I would give no man a reason upon compulsion, I." (Act II. sc. iv. ll. 263-6.) と、人物もこゝに至つて滑稽の堂に入る。

皇太子も今は是迄と思ひ、此時漸く口を開いて、今朝汝を襲ひしは別人ならず、斯く云ふ我と Poins なれば如何に出放題に胡魔化すとも詮なかるべし。かく得意の廣言を吐く汝の、其時一合の刃も交へずして逃がれたるは如何にと詰る。流水は迂廻して物に逆らはず、しかも必ず一方に活路を開く。Falstaff は如何なる場合にも嘗て窮したる事なし。平然として答ふらく、"By the Lord, I knew ye as well as he that made ye. Why, hear ye, my masters: was it for me to kill the heir-apparent? should I turn upon the true prince? why, thou knowest I am as valiant as Hercules: but beware instinct; the lion will not touch the true prince.

Instinct is a great matter; I was now a coward on instinct. I shall think the better of myself and thee during my life; I for a valiant lion, and thou for a true prince." —ll. 295–304.

吾人が窮地に陷るとき其源因を探れば固より一樣ならず。あるときは智慧の不足に本づき、あるときは意志の薄弱に由る。然れども全體を通じて一瞥すれば過半はわが道心の面目を維持せんと力むるが爲めに外ならず。正直と云ひ、體面と云ひ、品格と云ひ、廉恥と云ひ、禮法と云ふ。是等を棄つる事敝履の如きを得ば吾人の生活の行路に横はる窮愁困苦の大半は既に消散したるに外ならず。而して Falstaff は之を棄つるに於て尤も吝ならざるものなり。否始めより棄つべき良心を具足せざるなり。故に彼は常て窮したる事なし。辭塞がり色變ずるは常人の心理作用に屬す。彼は常人にあらざるが故に此心理作用を知らず。彼は不具者なり。不具者なるが故に方圓の器に從つて毫も遲疑せざること冷水の如く、擅まゝに圓轉滑脱の妙態を演出して憚かる所なし。即ち彼の道德的無神經は彼の重寶なる流動性の源因たらずんばあらず。偸盜を事とする彼が如く、僞辯を弄する事彼が如く、臆病なる事又彼が如くにして同時に呑氣太平なる事彼が如きは蓋し希なり。官金奪掠の件露見して、捕吏の "Boar's Head" に闖入するや、皇太子の庇護によりて壁掛の背後に一髮の危機を免かれたる彼は、捕吏既に去つて呼べども答へず、幕を排して內を窺へば

"Fast asleep behind the arras, and snorting like a horse." とあり。

かゝる男なれば體面抔云ふ考の微塵だにあるべき理由なけれど、そこが Falstaff なり。彼は常に Honour の一語を口にして已まず。

"'T (=death) is not due yet; I would be loath to pay him before his day. What need I be so forward with him that calls not on me? Well, 'tis no matter; honour pricks me on. Yea, but how if honour prick me off when I come on? how then? Can honour set to a leg? no: or an arm? no: or take away the grief of a wound? no. Honour hath no skill in surgery, then? no. What is honour? a word. What is in that word honour? what is that honour? air. A trim reckoning! Who hath it? he that died o' Wednesday. Doth he feel it? no. Doth he hear it? no. 'Tis insensible, then? Yea, to the dead. But will it not live with the living? no. Why? detraction will not suffer it. Therefore I'll none of it. Honour is a mere scutcheon: and so ends my catechism." —Act V. sc. i. ll. 128–44.

こは彼が義理に戰場に出でての述懷なり。其論理の亂調にして無法なるうちに自ら飄逸の姿致ありて、爲めに彼の卑怯を賤しむの念を遠くるに似たり。

最も滑稽なるは戰爭中に於ける彼の擧動なり。彼は蘇國の大將 Douglas と鋒を交へ然も未だ創痍を蒙らざるに斬られたる眞似して斃る。皇太子會〻其處に來合はせて、其屍を見 “Poor Jack, farewell!” との一語を遺して去るや否や、彼は軈て徐ろに起き上がり、傍に Hotspur の死骸あるを見付け、奇貨措くべしと喜ぶもの丶若しやこれも同樣に起き上がりては面倒と、まづ股のあたりに一刀を加へて愈〻眞の死體と見定めて後、これを肩にして陣中に歸り行きぬ。其語に曰く、“'Zounds, I am afraid of this gunpowder Percy, though he be dead: how, if he should counterfeit too and rise? by my faith, I am afraid he would prove the better counterfeit. Therefore I'll make him sure; yea, and I'll swear I killed him. Why may not he rise as well as I?'” (Act V. sc. iv. ll. 123-8.) と、かくて陣屋に歸れば打ち死にの筈なる Falstaff の再來に皇太子を始め一同の驚き大方ならず、其上に敵將の遺骸を背負ひ來り、これこそ吾が手柄なりと述べ立つる事なれば、聞く人皆啞然たり。次第に問ひつめられて、苦しきうちに活路を切り開く妙は何處迄も Falstaff の本領を發揮す。「臥したるは事實なり、殺されしにあらず、餘りの激戰に呼息せまりて堪へ難き程に暫し苦痛を免かれん爲めの方便に過ぎず。相手の Percy とても同樣なり。稍少時經て彼も余も同時に起き上がり “and fought a long hour by Shrewsbury clock.”」と澄ましたものなり。これより後 Shrewsbury の功名は彼が口癖の一となれり。

此奇怪なる人物の性格も以上述べしところにより大略現はれたりと信ず。吾人若し現實の世にかゝる型の人間を目擊することあらば必ず道義の念に制せられて到底これを寬容し得るの餘裕を有せざるべし、假令紙上に於て紹介せらるゝにせよ、其表出法にして宜しきを得ざらんか遂にこれを擯斥するの已を得ざるに至るなきを保せず。されど沙翁の描出せる Falstaff に對する時は、誰人も暫く堅苦しき道德情緖の支配を離れ無邪氣なる滑稽情緖に耽るの尤も自然なるを發見すべし、誠に善惡除去の適例なりと云ふべし。

(は)第三に來るべきは純美感にして今更例を文學に取るを要せず。數年前吾邦にあつて物議の焦點たりし裸體畫問題の如きは其好例なりとす。當時大塚保治氏は一篇の論文を草して秩序的に裸體畫の成分を講說せしと覺ゆ。余は今茲に同樣の考究を試みるにあらず、たゞ裸體畫なるものの全般に關して一言せんと欲す。裸體畫を美術なりと一言に道破し去れば夫迄なれど、此美術は如何なる性質のものぞと考へたる時、吾人は其特徵の著るしきに驚ろかずんばあらず。普通に開化せる道德を有する人にして如斯き種類の美術を賞翫し得るは殆ど想像する事能はざればなり。所謂袒裼はさて措き、婦人の前には脚の先すら示すことを許されざる西洋各國に於て、却て赤裸々たる人物畫の發達して今日に至りたるは種々の源因あるにも關らず要するに矛盾の極と云はざるべからず。試みに思へ如何に裸體畫の美を信ずる人々と雖もわが女兒を赤裸にして舞踏會に伴な

ふことあるべきか、またわが細君の如何に美はしければとてこれが衣服を剝ぎ去つて之を公衆に誇らむとするものあるべきか。現實の世にありては風紀の制裁しかく嚴なるなり。現實の世にありて、かくの如く制裁の嚴なるにも關せず、何れの畫館何れの展覽會を問はず當然に風紀を亂すべき此種の裸體畫は累々として陳列せらるゝを見るは奇異の現象にあらずして何ぞ。ことに所謂上流の紳士淑女なるものは、たゞに恬然と場中に出入するのみならず盛に之を品評して毫も憚る氣色なし。これ明白なる矛盾なり。されど此矛盾は論理より來る矛盾にあらず、同一のFに對して起るfの質的差異より起り來る矛盾なり。吾人現實の社會に在りては裸體を一個の道德的Fとして觀察し、從つてこれを醜なるものとして斥くることを敢てす、反之これを繪畫の上に見る時は單に感覺的Fとして之を遇するを以て、心置きなく藝術的鑑賞の餘地を見出し得るに過ぎず。されば余が用語を適應すれば裸體畫の鑑賞も亦一種の道德分子除去に外ならず。若し道德的分子を除去する事能はずして、開化せる國民が裸體畫の前に公然佇立する事あらば彼等は赧然として一瞥の刻下に愧死すべきなり。泰西の嚴重なる社會に成長したる民衆が一旦畫館に足をふみ入る瞬間に於て全く此道德情緒を除き得るは習慣の結果とは云へ誠に不思議の現象なりと云はざるべからず。而して此不思議なる現象の由つて來る所を問へば道心と美感とを截然と區別して、一の世界より他の世界に移るとき未練なく之を忘失するが爲めにあらずんばあらず。故にもしある

社會ありて、其社會の狀態は此兩者を一刀に劃斷する事能はざれば、此社會に生存する人は裸體畫に對して一種不安の念を禁ずるを得ざるべし。吾邦の現時は多少之に似たり。要するに裸體畫對風教問題は之に對して道心美感を壓するか又は美感道心を壓するかの差違にて其情緒的價値の決せらるべき問題なれば道德除去の好例として玆に之を述ぶるの妥當なるを覺ゆ。

(三)次に說くべきは知的分子の除去なりとす。余は此講義の第一編に於て文學の內容たるべきFを四に分かち知的Fを其第四に置きて、其標本を人世問題に關する種々の概念或は俚諺、格言等なりと說けり。卽ち余が先に知的Fと稱したるものは Arnold が "moral idea" と稱したるものと大差なかりしなり。然るに今こゝに用ゐむとする知的材料は少しく廣き意味に於けるものにして、漫然吾人の知識を滿足せしむる材料と云ふ義なり。卽ちこは事實存在し得べきもの、存在し得べからざるもの、或は論理に合致し得べきもの、合致し得べからざるもの等の判斷力に屬するものにして、之を精細に論ぜむとせば非常の手數を要すべし。先づ吾人は世界の事物を如何に解釋すべきや、吾人は寫實表出法を以て滿足し得るものなりや、或は眞の寫實とは何ぞや、或は文學と科學との態度の差異如何等幾多の論議を經ざればこの問題の決定は望み得べからざるなり。

これらの數點の或ものは後編に說くところあれば此處にはたゞ其一二に涉りて辯じ置くべし。Keats の詩句に "Truth is beauty, beauty is truth" とあり。Keats の所謂眞とは如何な

るものなるかを知らざれど、これを普通の意義に解すれば、美は必ずしも眞ならず、眞は必ずしも美ならざるなり。評家亦頻りに文學に眞の缺くべからざるを說く。其言に曰く、凡そ眞を含まざるものは生命長からずと、而して其道ふところの眞とは何ぞと聞けば頗る曖昧にして、或は時に讀者を誤まる事なしとせず。試みに沙翁の作品を檢するに、彼の造りし人物は皆躍如たり。評家はこれを以て自然に對して眞なるが故なりと說く。余と雖も決してこれに異論あるものにあらず。されど彼が造りし人物の言語を見よ、當時の英國人は決して如此國語を以て其日常の應接を辨ぜしものにはあらざるべし、否英國の歷史を通じて、如此言語を事實に於て用ゐたる時代は決してあらざるべし。此意味に於て沙翁の人物の言語は僞物なり、眞を遠ざかれる者なり。更に一例を擧ぐれば、かの十五六世紀の頃の宗教畫家、例へば Giovanni Bellini 一派の作品を見よ。ある聖者は腦蓋骨に半ば鉈を打ち込まれ、凡人ならば、とくに絕命すべき筈なるに平然と微笑するにあらずや。又他の殉教徒の如きは全身に蝟の如く矢を負うてさへ同じく滿面に笑をたゝへて毫も其痛を感ぜざるが如くなるにあらずや。尤も此等の作品の目的は云ふ迄もなく宗教的安心立命が形體上の苦痛以上に超然として存在するを表現するにあるべきも、思ひを飜して一度これを生理學の見地より批評する時は極めて滑稽の感なき能はず。只よく作者の情熱を體して其信仰の內部に吾人の心をおく時、始めて上述の如き知的物議は全然紅爐上の雪と同じく須臾にして消え

去るに過ぎず。されば吾人がかゝる繪畫に對し僞なりとも愚なりとも種々なる知的分子が浮び來りて四面より鑑賞の妨げとなるは全く吾人の宗教情緒が汪然として起り來らざる證據なりとす。一言にして之を云へば吾人は沙翁を讀むにあたつて、又古代の名畫を觀るに方つて、面白しと感ずる丈其丈冥々裏に知的分子の除去を履行しつゝあるものなり。

かくの如きは其の最も極端の例なり。今少しく眞に近き作品に於ても亦吾人は盛に知的分子の除去を實行しつゝあるを見るべし。批評家動もすれば作品の結構、人物の性格等に關して不自然との批難を呈出して毫も假借する所なきに似たり。去れど文學と名のつくものに彼等の所謂眞以外の分子を含まざるはあらず。否此等評家が視て以て眞なりとする作品に於て却て其の甚しきを見る。會、評家に攻擊の餘地を與ふるは知的分子を除去せしむるに足るべき他の特長を缺くが故なり。もし何物か他に此缺點を補ふものあらば決して眞正の評家より批難せらるゝの虞なきものとす。眞正なる批評は誦讀の際直下に會得したるものを退いて解剖せるに過ぎず。直下に會得せしむる際に知的分子の不用意にも入り込めぬ位に評家の心を他に誘ひ得ば、如何に不條理なりとも不合理なりとも遂に眞正の評家より批難せらるべきにあらず。而して文學は此種の作品にて充滿する事亦一點の疑なきに似たり。

此種の除去が行はるゝ文學の類別に至りては餘白なければ略す。かの俳文學の如きは誠に個中

の消息を傳へて遺憾なきものといふべし。俗人は知的に意味が解し難きが故に面白からずと云ふ。されどある俳句に至つては分らぬが故に文學的價値ありとさへ云ひ得べし。

今外國文學中より一二の例を擧げん。聖書の創世紀第一章の冒頭に曰く

"In the beginning God created the heaven and the earth. And the earth was waste and void; and darkness was upon the face of the deep: and the spirit of God moved upon the face of the waters. And God said, Let there be light: and there was light. And God saw the light, that it was good: and God divided the light from the darkness. And God called the light Day, and the darkness he called Night. And there was evening and there was morning, one day."—*Revised Version.*

此一節を讀む者は信徒と信徒たらざるとに論なく自ら壯大の感に打たれてひとり襟を正すを禁じ得ざるべし。余の如きも不信者の一人なり。哲學的に案出せる神さへ存在するとは肯はず。況んや此不合理の神に於てをや。たゞ吾前にあるは神力の偉大なる敍述のみ。而して吾感ずるは偉大なる情緒のみ。知を離れ識を絕して只此敍述を壯嚴とのみ思ふ。其時宇宙混沌として水天未だ分れず。暗糢糊裏天自ら動き地自から動いて萬有悉く神意の命ずる如くに出現し來る。其威力を想見し、其四圍を髣髴するとき崇高の念自然と吾血を滿身に漲らしむ。然れども一たび情海を去

つて知界に入るとき創世の辯は頭に徹し尾に徹して僞なり。荒誕なり、無稽なり。只此僞を忘れ、此荒誕と無稽とを遺失して只崇高の一念を把住するとき雲山漫々たり海水蕩々たり。遂に理致の何物たるを解せず。後代の文學者にして此法を襲用したるもの固より少なからずと雖も其最も成功したるものは Milton なり。

"On Heavenly ground they stood, and from the shore
They viewed the vast immeasurable Abyss,
Outrageous as a sea, dark, wasteful, wild,
Up from the bottom turned by furious winds
And surging waves, as mountains to assault
Heaven's highth, and with the centre mix the pole.
'Silence, ye troubled waves, and, thou Deep, peace!'
Said then the omnific Word: 'your discord end!'
Nor stayed; but, on the wings of Cherubim
Uplifted, in paternal glory rode
Far into Chaos and the World unborn;

For Chaos heard his voice. Him all his train
Followed in bright procession, to behold
Creation, and the wonders of his might.
Then stayed the fervid wheels, and in his hand
He took the golden compasses, prepared
In God's eternal store, to circumscribe
This Universe, and all created things.
One foot he centred, and the other turned
Round through the vast profundity obscure,
And said, 'Thus far extend, thus far thy bounds;
This be thy just circumference, O World!'"—*Paradise Lost*, Bk. VII. ll. 210–31.

たゞ描かれたるは壯大の景なり。之に對して壯大の感を起せば則ち足る。眞なるか、眞ならざるかは全く別問題に屬す。始めより知の領域に住して此十數行を讀むものすら、讀むうちにわが意識の頂點が崇高なる情緒に占められて知的分子は全く識域以下に斥けらるゝか、或は僅に識末に其命脈を保つに至るを自覺すべし。若し然らずと云はゞこの人は文學的に不具なるか、或はMilton の技倆がその人を動かし得る程巧みならざるかに歸着す。

讀者の享納力はしばらく云はず。要するに此種の筆墨に於て成功するか失敗するかの問題は一に知的分子の微弱なるか優勢なるかに由りて解決せらるべきものとす。筆勢淋漓として一氣に知力の膽を奪つて、永く之を識域以下に屏息せしむる時、讀者の滿腔に漲るは純崇高の感にして、又純崇高の感以外に何物をも交ふるの餘地なきなり。試みに此見地より前例を取つて其吾人に與ふる崇高fの强弱を評せんか。聖書よりの一節は巨大の斧を用ゐて咄嗟に成るが如く自から雄渾にして毫も巧を求めたるの痕迹なし。『失樂園』に至つては瑰麗眼を喜ばしむるに足ると雖も多少の芝居氣あり。敍述明快にして理路整然たると同時に崇高の感を弱むるが如し。從つて其價値(單に崇高的價値を云ふ)聖書に對して遜色なき能はず。

第四章　悲劇に對する場合

讀者のfを論ずるに當りて吾人は先づ第一に其數量的に異なるを檢し、次に其性質上の差異を檢したり、而して今最後に特別の場合として舞臺上苦痛の表出に對する讀者或は觀客のfの特性を說かんとす。卽ちかの悲劇に伴ふfの謂なり。悲劇文學は古來より常に巍然たる勢力を有する

もの、現に我邦に於ては劇と云へば必ず悲劇を意味したるが如し。而して悲劇とは所謂斷末魔の悲酸を中心として成立するものなれば、何故に吾人がかゝる苦痛の表出により快感を求め得るかはやがて悲劇の根本問題の一なる事疑なし。即ち實際の世にありては得る限り回避してひたすらに逃れんと冀ふ活劇を、書物の上、舞臺の上に移して面白しと興ずるは如何と拈定するとき吾人は以上說明したる外に一個の新問題に逢着したるの感あるべし。其理由として提出すべきもののうち直接、間接經驗の差、自己觀念の除去等を數ふべきは勿論なれど、此以外に尙一種特別の根底あつて存在するが如し。而して此根底に觸れざる時余が前章に說明し得たる理論は未だ文學の全體を律する能はざるに似たり。是に於てか特に此章を設けて其缺を補ふ。

これを論ずるに先だち、まづ事實として人間が苦痛を好む場合ありや否やを點檢せんとす。人は活動の動物なり。活動其物はある意味に於て吾人の生命の目的なり。吾人は常にわが稟けたるあらゆる能力を適度に使用せんと欲す。方便として使用せんと欲するにあらず、目的として使用せんと欲す。故に此適度の活動を貪る機會なき時は一種云ふ能はざる不快を感ず。心理學者の所謂 Inhibition（活動禁止）是なり。活動禁止の狀態極度に達すれば吾人は生と云ふ名ありて其實を失ふに至る。凡て人生の根本問題は生其物にあり、而して其生の內容は此活動に存するを以て、若し此活動四圍の事情により壓遏せらるゝか或は全く消滅する事ありとせば、此時吾人は生なる

ものの保證を奪はるゝが如き心地ならざる可からず。されば囚人の最も怖るゝは苦役にあらず勞働にあらず、また看守の鞭撻にあらず、たゞ暗室禁錮にあるのみ。彼は暗室に端坐して悠々無事なるべきに、これを以て凡ての苦楚以上の苦楚と感ずるは、全く此生命の內容たる活動の意識を絕對に禁止せらるゝが爲なり。Byron は *Prisoner of Chillon* の內に明らかに此心理を說明したり。

"What next befell me then and there
  I know not well—I never knew:—
First came the loss of light, and air,
  And then of darkness too.
I had no thought, no feeling—none
Among the stones I stood a stone,
And was, scarce conscious what I wist,
As shrubless crags within the mist;
For all was blank, and bleak, and grey,
It was not night—it was not day;

It was not even the dungeon-light,
So hateful to my heavy sight,
But vacancy absorbing space,
And fixedness — without a place:
There were no stars, — no earth, — no time,
No check, — no change, — no good, — no crime,
But silence, and a stirless breath
Which neither was of life nor death;
A sea of stagnant idleness,
Blind, boundless, mute, and motionless!" — St. ix.

假に吾等をして此囚人と同樣の地位に立たしめば如何。吾等は先づ吾等が生死を知らんと欲して、何より先に自己の意識の内容に何物か潛むを點檢し來るべし。これを尋ねて何物をも得る能はざる時は茫然として自失すべし。茫然として自失したる後再び何物をか明かに意識せんと願ふべし。之を願ふて切なる時は遂に意識し得るならば苦痛なりとも辭せずと思ふに至るべし。苦痛は固より苦痛なり。只此苦痛が自己の意識に判然登場し來るは一面に於て自己の死物ならざるを

證明するものなり。かるが故にかの日もなく夜もなく、時もなく空間もなく、只石の如き一塊たらんよりは寧ろ苦痛を自覺して判然たる生命の確證を得んと欲するは人情なり。

生死の判然せざる時はわが生活の券符を握らんが爲めには純粹の苦痛を甞むる事さへ辭せず。若し夫れ普通の狀態にあるものに至つては明かにわが生存を自覺するが故に此刺激を要せざるに似たり。事なきに刃を加へて自ら傷つき、鞭を揮つて己を打つは固より病的なるに相違なしと雖ども、常人にして猶且つ此種の刺激を欲する事あるは意想外なりとす。無事太平にして生存の自覺一定の水準以下に降るときは何等かの活動を求めて已まざるは勿論、不思議なるは其選擇時に苦痛多き活動に出づる事あり。余の考によれば苦痛は吾人の尤も忌む所なるが故に尤も存在の自覺を強ふすと云ふパラドツクスより來るに似たり。獨の Lessing 甞て Mendelssohn に寄せたる書中に云へる事あり。曰く、「凡そ熱情とは熾なる願望にあらざれば熾なる嫌惡なり。而して此熾なる願望嫌惡より吾人は自己實在の意識を高むるものなれば此意識は必ず快感に伴ふものなる事疑なし。去れば熱情は如何程苦しきものにても其熱情たる故を以て快きものなりとす」と。說く所わが云ふ所と異なりと雖ども吾說を確むるに於て有力ならずとせず。

演劇は人生の再現にして、しかも人生よりも強き再現なり。人生を縮寫して、注意を狹き舞臺に集注するが故に如何なる演劇も吾人——傍觀する丈の働きよりなき吾人——に普通以上の程度

に於て人生の實在を明瞭に意識せしむ。而して悲劇に在つては其功尤も顯著なりとす。悲劇の關する所は死生の大問題なり。死生の大問題は吾人の實在を尤も強烈なる程度に於て、吾人の腦裏に反射し來る。而して死生の大問題は皆苦痛ならざるはなし。只其苦痛は假の苦痛なり。わが內部に實驗する苦痛にあらず。わが隣人の親しく甞むる苦痛にもあらず。たゞ役者の假裝せる苦痛なり。假裝なるが故に一大安心あり。假裝にして眞を欺くの技あるが故に吾人の存在の意識を熾ならしむ。是吾人が好んで悲劇に赴くの第一理由ならざるか。

次に、人は冒險性の動物なり。かの沙翁の語に云ふ "The blood more stirs to rouse a lion than to start a hare." と。獅子を呼び起すは危險なり、誤てば生命を失ふの虞れあり、兎を驚かすは易々たるのみ。人生の目的は生命にあるを思へば、生に害なきを棄てゝ、好んで危きに趨くは一見して矛盾なるが如し。矛盾と矛盾ならざるとに論なく事實を云へば危險を控へたる事業が又これに相當する快感を控へたるは吾人が日常の經驗に於て屢目擊する所なり。雪中に Alps を越ゆると、三伏に箱根を登るとは難易固より一ならず。十年の經營を待つて成就したる企業と一日の勞力にて築き上げたる仕事とは苦樂の度に於て霄壤の差あり。然れども吾人の志望を云へば(單に志願に過ぎずとするも)後者にあらずして却つて前者にあらん。而して其前者を擇ぶは單に困難なるが爲めなり、苦痛なるが爲めなり。略言すれば危險の量多きが爲めなり。只退いて考ふる時此矛盾は皮相の矛盾にして其根底には一理の橫貫するを見る。思ふに、吾人は危險其物を好むにあらず。危險其物を目的として活動するものにあらず。此危險に打ち勝ちたる時、此困難を凌ぎ得たる時、自己の力を自覺して、これに伴ない生ずる快感を大ならしめんと冀ふなるべし。

若し余が云ふ言にして誤りなからしめば、吾人は苦痛の爲に苦痛を求むるものにあらず。此苦痛を打ち伏せたる時の快感を大ならしめんが爲に、難に就き危を冒して豫じめこれを迎ふるに過ぎず。如此き苦痛と如此快樂とは勢正比例するを以て、吾人は最大快樂の必要條件として出來得る限り苦痛の多きを求むるは心理上必然の結果なりとす。

苦痛は既に目的にあらず、苦痛後に來る快樂が目的なり。故に自から好んで踏み込みたる苦痛は成る可く早く切り拔けざる可からず。是に於て彼等の精神狀態は一變して全身悉く緊張す。而して苦痛の尤も甚しきは生死の源頭に逢着するの時にあり。從つて生死問題の苦痛に身を投じたる時彼等は尤も強烈なる神經の緊張を自覺す。此際に於る彼等は滿身皆眼なり。もし半途にして自滅すれば格別然らずんば非常に猛烈なる勢を以て此苦痛の難關を透過せんとす。この故に此場合に於る彼等の精神狀態は軌道を走る汽車の如く磁石に吸ひ付けらるゝ鐵屑の如く、寸時の油斷なく、瞬間の餘裕なく驀地に猛進するに至る。

自から苦痛の圈を畫がいて好んで其中に飛び入るは、こゝに永住せんが爲めにあらず、反つて

之を脱出せんが爲めなれば此種の人はみづから己れを縛して更に之を解くの喜びを得んとするに異ならず。しかも縛せる繩の强き程彼等の喜びは大ならざるを得ず。Stevenson は其著 *New Arabian Nights* 中に自殺組と題する一篇を收めて巧みに此心理を說明したり。

"Listen, this is the age of conveniences, and I have to tell you of the last perfection of the sort. We have affairs in different places; and hence railways were invented. Railways separated us infallibly from our friends; and so telegraphs were made that we might communicate speedily at great distances. Even in hotels we have lifts to spare us a climb of some hundred steps. Now, we know that life is only a stage to play the fool upon as long as the part amuses us. There was one more convenience lacking to modern comfort; a decent, easy way to quit that stage; the back stairs to liberty; or, as I said this moment, Death's private door......"

百般の便利完備しをる今日に獨り生を脫して自由に入るの途なきは誠に遺憾の至なるを以て、こゝに便宜の產物として所謂自殺黨は現出したり。自殺の方法は下の如し。——黨員は每夜倶樂部に集まりて骨牌を弄す。其時會長は各黨員に札一枚づゝを順次に分配す。もし黨員にして 'Spade' の一を分付されたる時は當夜の死鬮に中る。'Club' の一を受けたるときは彼を殺すの

義務を有す。さて此黨員の一人に Malthus と呼ぶ老人あり、此男別に死にたき望もなきに不思議にもかゝる恐ろしき場所に出入す。其所以を探ればたゞ死鬮の危險を逃れてほつと安心する瞬間の快感を目的とするに過ぎず。彼は單に此快感を貪らんが爲めに生命なる貴重品を惜氣もなく犧牲に供するに至りしなり。彼が Geraldine に告げし語に "Why, my dear sir, this club is the temple of intoxication. If my enfeebled health could support the excitement more often, you may depend upon it I should be more often here. It requires all the sense of duty engendered by a long habit of ill-health and careful regimen to keep me from excess in this, which is, I may say, my last dissipation. I have tried them all without exception, and I declare to you, upon my honour, there is not one of them that has not been grossly and untruthfully overrated. People trifle with love. Now, I deny that love is a strong passion. Fear is the strong passion; it is with fear that you must trifle, if you wish to taste the intensest joys of living. Envy me—envy me, sir, I am a coward!" とあり。

彼の言は赤裸々なる吾人の心理を遠慮なく露出せるものなり。彼も亦吾人と同じく死を恐るゝなり。されど彼は常に生死の界に出入して恐怖の刺激より生ずる快感を渴望す。恐れを弄び得て

始めて人生の快事を味はひ得べしとは彼の名言なり。然れども此恐れより生じ來る苦痛の裏に何等の遁路なきことを自覺する時吾人の心理狀態は俄然一變するものにして、先に名言を吐きて得意たりしMalthusも遂に此心機一轉の不得止に遇へり。彼は自白せる如く怯者なり、怯なるが故に恐れを弄ぶを喜ぶものとす。「余は怯なり、これを羨め」とは彼がGeraldineに告げしところなり。彼の如き怯者の愉快とは、その最も怖るゝ死地に入りて、やがて生路に再出するの快を豫期するにあり。即ち其生死の際判然たらざる苦痛煩悶を想起し得んが爲なり。されば或宵會長より渡されたる札を眺めたる刹那を敍して Stevenson はかく云へり。"a horrible noise, like that of something breaking, issued from his mouth; and he rose from his seat and sat down again, with no sign of his paralysis. It was the ace of spades. The honorary member had trifled once too often with his terrors." 此一節よく此石火の變を寫して肯綮に中るを覺ゆ。

是に由つて之を觀れば吾人は苦痛を逃がれんが爲めに苦痛を愛するものなり。去れども逃がれんが爲めに一たび苦痛の渦中に投ずる時は、逃がるゝと否とに關せず、苦痛其物より回避して退却するを得ず。一反苦痛の因果を以て己れを縛したる以上は知らぬ間に苦痛に釘付けにせらるゝに至る。

悲劇は一種の意味に於て苦痛の發展なり。此發展を目擊する吾人は主人公の如何に之を解決するやを氣遣ふのみならず、其苦痛のわれに快なると不快なるとを疑ふの餘裕さへなく、只眼前の苦痛に釘付けにせられて遂に目を轉ずるを得ざるに至る。悲劇は此强烈なる注意力を看客の上に喚起するが故に戲曲中に於て優勢なる權力を占むるにあらざるか。

上述の外尙一種の人間ありて苦痛を好み困難を愛す、されど別に病的と名づくる能はざれば余は暫くこれを苦痛の道樂者又は數寄者と名づくべし。是等の道樂者が求むる苦痛は決して深酷なるものにあらず、一定の度を越ゆれば忽ちにしてこれを避けんとす。遁路あるにかゝはらず、自ら進みて難に陷いり、好んで自己を憂鬱界に封じて得意然たる者は皆此種の道樂者にして、所謂"pleasure of melancholy" "luxury of grief" 又は慷慨淋漓 "pensive" "sad" 等の文字を喜ぶものなり。こゝに注目すべきは是等の道樂者の大部分が必ず社會の中層以上に屬するの事實にして、所謂匹夫匹婦の間には此種の道樂を發見すること能はず。其所以を尋ねて余は下の如くに解釋す。凡そ中流以上の人士は其一般の修養に於て下層民衆に勝ること大なるべく、少なくとも勝れりとの自覺確かならん。又此自覺に伴なうて一方には歷史的觀念、換言すれば英雄或は古人崇拜の分子が幾分か混じ來ること多かるべし。即ち某は高德の士なりき、されど其一生を困苦の裡に終れり、又某は一世の碩學なりき、されどつぶさに窮愁を嘗めたりなど云ふ歷史的Fは

敬慕崇拜のｆと聯結して彼等の胸中に往來する事あらん。從つて他の一面に於ける自己卓越の自覺は彼等を誘うて進んで古人の半面たる苦惱を求めしむるに至るが如し。されば此等の苦惱は必然のものにあらず、たゞ彼等が任意に選びたるに過ぎず。此苦痛の分子ありて、古人と彼等との連鎖は始めて成立し得るが故に、卓越の自覺著しく增進するが故に彼等は決して之を脫する事を好まず。單に脫する事を好まざるのみならず、益〻悲觀に耽り、凄思に沈み、"Nothing 's so dainty sweet as lovely melancholy" さては "to be sad as night only for wantonness" と歌ひて興がるに至る。全く根もなき苦痛を弄ぶの贅澤屋と云ふべきなり。

而してかの悲劇に對して濺ぐ涙の所有主の如き亦此部類に編入すべき資格ありとす。如何となれば彼等の濺ぐ涙は贅澤の涙にして卓越の意を飽和したるものとす。これを裏面より云へば其善を愛し惡を憎み、不幸を憐み、逆境に同情する念の切なる事其雙頰に傳はる涙にて明らかなりとの吹聽とも解し得べし。世間には此種の贅澤家決して少なしとせず、一般の人民すら劇場に入つて舞臺に對する間は是亦時間を限りて此贅澤家の仲間入りをなすと知るべし。

這般の贅澤家に二種あり、一を知的とし二を道德的とす。一の好例はかの有名なる Schopenhauer に於て之を見るべし。彼の厭世主義は其實、眞個眞面目のものにあらず、評家 Kuno Fischer はこれを全くの贅澤厭世觀なりと斷言せり。「Schopenhauer が此世に闘し眞面目なる

悲觀を抱きしは事實なれども其悲觀は畢竟一種の光景、繪畫たるに過ぎず。浮世と題せる悲劇を舞臺に上すとせば、彼は細心に度を合はせたる眼鏡を以て、居心地よき褥椅に座を占めたる其觀客の一人なり。如斯き時、普通觀客は其亂脈騷ぎに打ち紛れ、却て其本筋たる此世の悲劇を看過する傾きあれど、彼に至りては凡ての注意をこゝに集め其一擧一動を漏らすことなし。かくて彼は深く感動し同時に其胸中に滿足を得て家に歸り、看たるところを書き附くるものなり。」

道德的贅澤家に至りては其類殆ど枚擧に遑あらず。大方の詩人、小說家、美術家は皆道德的芝居を興行して隨喜の涙にむせぶものとす。由來文學の評家輙もすれば作品に誠實 (Sincerity) の必要を說けど、吾人試みに Tennyson の *In Memoriam* を通誦する時は、彼の悲しみ、恨み、慰藉の裏面には亡友 Hallam 以外の或物を包含するを認むべし。吾人はこれを以て詩人が悼亡を藉り來つて、氣儘に悲哀、愁傷を芝居化したるものと信ずるの不得止に至る。又かの *Sentimental Journey* 中に Sterne が死せる驢馬の飼主の悲しみを描きし節あり。彼は實際に於て其母に對し甚だ不實なりしとの傳說を眞とせば、其平生に果して如此柔らかき感情を抱き得たりしや否や頗る疑はし。此一節は恐らくは芝居的なりしならん、芝居なればこそ彼は一躍して禽獸に迄同情を寄せ得るの君子となり濟まし得たるならん。

詩人又歌うて曰く、

"There's naught in this life sweet,
If man were wise to see 't,
　But only melancholy;
O sweetest Melancholy!"—Fletcher, *The Nice Valour*, Act III. sc. iii.

"Go! you may call it madness, folly;
　You shall not chase my gloom away.
There's such a charm in melancholy,
　I would not, if I could, be gay.

Oh, if you knew the pensive pleasure
　That fills my bosom when I sigh,
You would not rob me of a treasure
　Monarchs are too poor to buy."—Rogers, *To*.........

是等は凡て皆贅澤家の悲哀にして眞に斷腸の思あるものにあらず。其恐悅の體は夏瘦の頰を撫

でゝ得意がると大差なきものとす。敢て虛と云はず確かに事實なるべし。たゞ其事實を解剖するとき快樂的分子著しく混入し居るを云ふのみ。かの Byron の如きに至りては放蕩、高慢、苦肉、犯罪を以て自家の贅澤的材料とし、普通の道德平面以外に逸出して、世界を白眼に睥睨し、吾意に滿たぬ者を以て悉くわが敵なりとなす。一見甚だ猛なるが如くなれども、更に之を考ふれば、此際の憤怒的fは眞個苦痛と大なる交涉なき全く贅澤部に編入すべきものなり。例へば壯士が劍を拔きて事もなきに床柱に切りつくるに類す。凡そかゝる慷慨の裏面には必ず豪傑流の己惚心あり。文學に於ても亦然り、Byron の如きは全く此種の壯士詩人なるべし。而して文學者或は詩人の大半は皆此意味に於てある種の不誠實なる分子を有す。

一方には誠實を以て文學の本質の最たるものとする評家ある傍に余は他方に於て此の如き異說を成立せしめたり。其理如何。答へて曰く吾人の感情は激する時自然の勢として漏出の途を求む、或は足を踏み或は手を舞はし或は言語となりて舌頭に迸しる。言語は此時用辨の具にあらずして單に排悶を目的とす。排悶の言語は用辨を離れたるの點に於て既に詩的なり。去れども技巧を缺く。性質に於て詩的なるも技巧を缺くが故に詩の體を具へず。"O World! O Life! O Time!"の如き漏出語は詩的なること勿論なれども、それのみにては詩と許しがたし。詩としての價值は如此感情語に一種の技巧を加へてこれを推敲したる後始めて生じ來るものなりとす。故に、詩人

の感情には按排工夫をこらす餘地なかるべからず。換言すれば其取捨を分別商量するの餘裕なかるべからず。從つて詩人が歌ふ實際の感情は其詩に現はれたるものに比して意外に微弱なるは爭ふ能はざる事實なり。若し吾人强烈なる感情に支配せられて意識の頂點に此感情以外の片影を認めざる時は嗚呼と呼び吁と叫ぶの外何等の詩人的資格を具する事なし。從つて詩人の資格を具しながら遂に詩人として自己を發揮する能はず又他人に認めらるゝの期なし。詩人の資格を有するものが眞個の詩人として世に立ち得んが爲めには鋭利なる情緒的經驗を一たび過去に押し遣りたる後、比較的冷靜なる態度に復して、記憶の助けにより、此過去の經驗を技巧的に洗錬し商量せざる可からず。假令過去と云ふ文字を適當に使用し得ざる刻下の感情にても理論は一樣に應用せらるゝものなり。刻下の感情を詩化せんが爲めには、詩化し得る立場を求めて、此立場より此感情を客觀的に視察するの必要あり。感情に充たされたる意識の焦點が此感情を詩化せんとするの刹那に、忽然と推移して工夫的焦點と變化するものとす。此工夫的焦點を作る餘地なき程に感情優勢なるときは此感情は遂に詩化しがたきものなり。此意味に於て詩人の歌ふところは誠實にあらず、幾分の虛僞を含むものとす。然れども詩人は他の方面に誠實ならざるべからず、即ち其技巧的文藝的工夫に關して誠實なるを要す。Tennyson は此意義に於て誠にして、Byron も亦實なりしなり。如此く解說し來れば、余が所謂不誠實なる語は決して、古來の評家が套襲したる誠實

主義と相矛盾するものにあらざるをみるべし。

此外尙苦痛其物を病的に愛する人なきにあらざれど、そは病理研究の領分に屬すべきものなればこゝに述べず。而して如上の贅澤家が其贅澤的苦痛を滿足せしめんが爲め悲劇に赴くは既に項中に插說したるを以て別に之を說かず。

余は是にて人間が苦痛に對し如何なる關係を有するか、又更に苦痛文藝たる悲劇を如何に觀るかの問題につき槪說し得たりと信ず。

吾人は如何なる場合にありても奮興の刺激を欲するものなるが故に、此方面よりして第一の場合は吾人の悲劇賞翫の重要なる條件とす。吾人は又危險に臨んで催眠的魔力を受くるが故に第二の場合も亦悲劇賞鑑の一大要件なり。吾人の多くは贅澤的苦痛に耽るの傾向を有するが故に第三の場合も亦尠なからず吾人の興味を悲劇に向はしむ。

第三編　文學的內容の特質

余は此講義の冒頭に於て意識の意義を說き、一個人一瞬間の意識を檢して其波動的性質を發見し、又一刻の意識には最も鋭敏なる頂點あるを示し、其鋭敏なる頂點を降れば其明暗强弱の度を減じて所謂識末なるものとなり、遂に微細なる識域以下の意識に移るものなるを論じたり。而して吾人の一世は此一刻々々の聯續に異ならざれば、其內容も亦不限刻の聯續中に含まるゝ意識頂點の集合なるべきを信ず。

以上はもと自家一人の意識に就きて云ふことなれども、個人に就いて云ひ得ることは、其個人と同様の他の者に就いても云ひ得るが故に、(少なくとも、しか假定し得るが故に) 又其個人と時を同じくする人類は其數幾億に上るべきが故に、吾人一代の內容たる焦點的意識の集合は一世の集合意識の一部分と云ひ得べし。而して此一部分たる個人意識のうち、大半はたゞ漫然たる自覺に止まるか、又は新陳交謝の際主人公たる當人にすら看過されて其儘に消え去ること多きが故に、

言語に化し相互の意志を通ずる具に供せらるゝ焦點的意識の量は比較的僅少なるものなり。(如何に多辯の人なりと雖も。) 況や筆紙の上に其影を殘すものに於てをや。如此く文章の上に於て示されたる意識は極めて省略的のものなるを以て、假令短時間の心的狀態と雖も其一々の推移を遺憾なく文字を以て聯續的に描し出ださんことは到底人力の企て及ぶところにあらざるべく、かの所謂寫實主義なるものも嚴正なる意義に於ては全然無意味なるを知るべし。素人の考を以てすれば吾人の心に浮かぶ意識を其儘有體に紙上に寫すことは左程困難ならざる樣思はるべけれど、試みに靜坐して吾が腦裏に出現し來る所のものを追究する時は其意外に煩雜なるに驚くべし。かの宗教家が無念と云ひ無想と唱ふるは皆此妄想雜念の世の中を知り盡して始めて口にし得べき言語なり。走馬燈の如くに廻轉推移して、非常の速度中に吾人意識の連鎖を構成する成分を一々遺漏なく書き出ださんことは決して人間業にあらず。假令數分間たりとも汝が意識の內容に漠然と起り來るものを悉く記載せんと試みよ。汝は遂に筆を抛つに至るべし。

此故に言語の能力(狹く云へば文章の力)は此無限の意識連鎖のうちを此所彼所と意識的に、或は無意識的に辿り步きて吾人思想の傳導器となるにあり。卽ち吾人の心の曲線の絕えざる流波をこれに相當する記號にて書き改むるにあらずして、此長き波の一部分を斷片的に縫ひ拾ふものと云ふが適當なるべし。

偖また吾人の意識內容には必ず或種類のF（單數或は複數の）覇を稱するものにして、即ち或人にはAなるF他のFよりも優勢にして、常に其意識の頂點に位し、又或人にありてはBなるF凡て他のFを凌いで高く其上に位す。其原因に至りては固より種々雜多にして約言し難しと雖も、要するに個人の遺傳的傾向即ち組織狀態、或は個人一體の性質、或は教育、習慣、職業及び其生活の境遇等其主要のものなるべし。此の如く個人にあつては特別のFが他を壓して主權を握るものにして、此Fは他のFの如くに冥々の裡に葬り去り得るものにあらず、從つて是等のFは他のFよりも言語、文章にあらはるゝこと多し。

次に同一の現象も異れる國民の間には著しき相違を以て現はるゝことあり。而して其原因は前に述べたる組織狀態、習慣等の差違に求むべきこと勿論なり。かの同一の言語が時に同一のFを代表せざることあるも此種の差違の一例たるのみ。余は之を名づけて「解釋の差違」とす。凡そ吾人の周圍を廻轉する森羅萬象は風の落葉を捲くが如く旋行推移するものにして、其間に變化多く且其變化は不斷にして常に流動の狀態にあり。而して吾人が筆紙に上すべきは此無數の變化の一現象をとらへ之を腦裏に印するものなれば、甲が一物につき捕へたる一現象は乙が同一の現象につき捕へたる點と大に趣を異にするは、尙aとoとの母音の間には無限の中間母音介在して、甲乙の二人任意に其中間の音を選む時、此兩者が一致すること極めて稀なるに似たり。こゝに於

て甲の所謂國家は乙の所謂國家と其內容、範圍に於て異なることあるべく、aの「人間」に對する解釋はbのそれと大に趣を異にすることあるべし。我は吾が過去の因果により一物を解釋し、彼は彼の業障により他の解釋を試むるならん。Dr. Murray が歷史的着眼點より一大英語字典を作りつゝあるは人の知るところなるが、かゝる著作が文界の一事業として存在し得る所以は言語の歷史的推移の只ならざるを證し得て餘りありと云ふべし。單に古今の差、即ち歷史上同一の開化潮流の配下にありし國民に於てすら如此き多樣の變化あるを知らば、東西文化全く其趣を異にする日本と西洋との間に一方ならざる解釋の差違あるべきは無論のことなりとす。更に嚴格の意味に於ては個人の間にも亦同樣の差違存在すること自明の理にして、婦人の所謂「立派なる人」は男子の所謂「立派なる人」と一致符合せざること多かるべく、青年の所謂「女」は老人の所謂「女」とは大に其趣を異にすべし。而して此等の差違は言語の抽象の度合に伴なうて進むものにして、かの抽象の極なる哲學の如きものにありては、たゞ一つの言葉の意義に關してさへ浩瀚なる大著ある事不思議ならず。

以上を約言すれば、凡そ吾人の意識內容たるFは人により時により、性質に於て數量に於て異なるものにして、其原因は遺傳、性格、社會、習慣等に基づくこと勿論なれば、吾人は左の如く斷言することを得べし。即ち同一の境遇、歷史、職業に從事するものには同種のFが主宰するこ

と最も普通の現象なりとすと。

從つて所謂文學者なる者にも亦一定のFが主宰しつゝあるは勿論なるべし。然らば文學者のFとは如何なるものかを檢するは此種の講義に於て缺くべからざる要件と信ず。されども文學者のFは文學其物のFとなつてあらはるゝを以て、旣に文學其物の內容を論じたる以上は今更文學者のFを云々すること重複に似たれども、多少其着目點を異にするものなれば一應の說明を試むべし。

さて文學者若しくは文學的傾向を有する人は社會の一階級を形成するものなれば、其等の人々の心行き若しくは觀察法を論ずるに當りては勢ひ此階級と他の階級とを比較して其類似差違を見ること最も便宜なるべし。而して普通は文學に對するに科學を以てすれば、暫く文學者對科學者(哲學者をも含む)につき論ずるところあるべし。

第一章　文學的Fと科學的Fとの比較一汎

凡そ科學の目的とするところは敍述にして說明にあらずとは科學者の自白により明らかなり。語を換へて云へば科學は"How"の疑問を解けども"Why"に應ずる能はず、否これに應ずる

權利なしと自認するものなり。卽ち一つの與へられたる現象は如何にして生じたるものなるかを說き得れば科學者の權能こゝに一段落を告ぐるものなり。さて此"How"なる質問に應ぜんとすれば、必ず此與へられたる現象の據つて生じたる徑路を辿らざるべからず。故に科學者の研究には勢ひ「時」なる觀念を脫却すること能はず。

文學も亦此"How"の分子なきにはあらず。只其科學と異なるところは文學にありては其のあらゆる方面に"How"なる問題を提起するの必要あらざることなり。前述の如く"How"なる文字は時間を離るゝ能はず。而して文學の一部は確かに時を離れ能はざること勿論なり。文學の此一部は其"How"に答ふる點に於て科學と毫も異なるところなし。すべての小說、稗史、敍事詩、戲曲等は皆時間を含有するものにして、一つの事件が他の事件を生み、波瀾又波瀾を生じ、或は主人公の運命が幾多の境遇によりて種々の性格に發展し來るが如き、凡てこれ"How"の問題に歸着するものとす。然れども文學にありては科學に於けるが如く此"How"を絕えず其念頭に置くの必要なし。世に存する物象の相は動にして靜止するものあることなし。繪具箱を携へて郊外に出づるものは同じ木、同じ野、同じ空が如何に日光の作用により千變萬化するかを知るべし。此の如く常に變化し動搖するものを"How"の眼のみにて觀察するは、無限の絲を卷く如く終に盡くる時あらざるべし。さりながら文藝家は此終局なき連鎖を隨意に切りとり、之を永

久的なるかの如くに表出する權利を有するものなり。卽ち無限無窮の發展に支配せらるゝ人事自然の局部を隨意に切り放ちて「時」に關係なき斷面を描き出だすの特許を有す。かの畫家、彫刻家の捕ふる問題の如きは常に此「時」なき斷面にして、これより以外に出づること能はざること明らかなり。而して文學は「時」を含有し得るの點に於て畫、彫刻よりも範圍廣きものなれども、一方に於て「時」を閑却する一時的敍述、或は卽座の抒情詩的發動等に於て畫、彫刻と類を同じくすることあれば、文學者のFは科學者のFの如く、常に "How" なる好奇心のため附き纏はるるものにあらず。例へば、Burns の

"Tho' cruel Fate should bid us part,
As far 's the Pole and Line;
Her dear idea round my heart
Should tenderly entwine.
Tho' mountains frown and deserts howl,
And oceans roar between;
Yet, dearer than my deathless soul,

I still would love my Jean." —*Tho' Cruel Fate.*

の如き全く一時の感情の流露せるものなるが故に首尾あり時間ある事件の斷面と見るの外なし。

又 Herrick の

Upon Julia's Haire Fill'd with Dew.

"Dew sate on *Julia's* haire,
And spangled too,
Like Leaves that laden are
With trembling Dew:
Or glitter'd to my sight,
As when the Beames
Have their reflected light,
Daunc't by the Streames."

の如きまことに單簡にして眞率なる詩なり。只 Julia の頭に露の宿りしを詠ぜし迄のことにて、此露は何處より來りしものか、Julia は何處にありや、又自己との關係如何等につきては一向に云ふところなし。卽ち前の Burns のが主觀的なるが如く此詩は客觀的斷面なり。

或人曰はん。文學に時間を含まざる種類あることは勿論のことなるべきも、凡そ文學の最高傑作とも稱すべきものは、皆此“How”の問題に觸れざるものなきにあらずや。敍事詩を見よ、戲曲を見よ、或は小說を見よ、何れも皆此“How”を繞りて其作に對する興味の大部分を構成するにあらずやと。一面の理はあれども、元來、含まれたる時間の長きは決して其作品の價値を定むるものにあらざること明らかにして、要は賞翫者の態度如何によるのみ。一時的の消えやすき現象を捉へて快味を感ずる人は文學者にありても彫刻家、畫家に近きものなり。吾邦の和歌、俳句若しくは漢詩の大部分の如きは皆此斷面的文學に外ならず。故に其簡單にして、實質少なき故を以て其文學的價値を云々するは早計なりと云ふべし。

次に來るべき文學者科學者間の差違は其態度にあり。科學者が事物に對する態度は解剖的なり。卽ち人は人にして、馬は馬なりと思ふ。然るに科學者は決して此人或は馬の全形を見て其儘に滿足するものにあらず、必ずや其成分を分解し、其各性質を究めざれば已まず。卽ち一物に對する科學者の態度は破壞的にして、自然界に於て完全形に存在する者を、細かに切り離ちて其極致に至らざれば止まず。單に肉眼の分解を以て滿足せずして百倍乃至千倍の鏡を用ゐて其目的を達せんとす。複合體に甘んずることなく、之を原素に還し、之を原子に分かつ。さて如此き分解の結果

は遂に其主成分より成立せる全形を等閑視すること屢にして、又之を顧るの必要なきことも或場合に於ては事實なりと云ひ得べし。例へば、彼等は水を分解して H_2O となすとき、彼等の要するところの物はHとOにして H_2O より成立する水其物にあらざるなり。しからば文學者の用ゐる解剖は如何。小說家は性格を解剖し、物象を描くものは其特長を列擧す。若し文學者に此態度なければ、物の選擇取捨を要するにあたり、文學的に必要なる部分を引き立たしめ、必要ならざる部分を後景に引き込ましむること能はざるべし。されども文學者の解剖と科學者のそれと異なるところは、前者の態度は常に肉眼的にして顯微鏡的ならざるにあり、又觀察に據りて實驗を用ゐざるにあり。例へばかの物理學者の所謂“Conceptual Discontinuity of Bodies”(物體の概念的中斷性)の議論を見よ。其理由に曰く、凡ての物體には彈力あり、空氣の如きも、これを圓壔に入れて壓搾することを得べし、これ凡て物體の質は精密の意味に於て不斷的にあらざるを證するものなりと假定し得る所以なりと。此の如きは文學者の與り知らざる所とす。或は Fechner の“Golden Cut”(黃金律)と稱する一種の審美的切斷法の價値を實驗の結果として發見せるが如き、亦科學者の業として文學者は敢て顧みざるを常とす。一物を組織する直線、圓形の甄別は固より文學者の本領にあらずと云はず。されども更に一段を溯りて自然界の線が幾何學上有效なりや否やは決して其問ふところにあら

ず。彼等はたゞ感覺印象より眞僞を決するが故に、これ以上に分け入れる科學的眞は却て僞となることあり。彼等にとりては日は東より出で西に沒するなり。地球が太陽の周圍を廻轉するに非ざるなり。珊瑚は赤色と堅緻の質とを備へたる美しき枝にして Polypus より成立せる蟲巢にあらざるなり。詩人 Rossetti は甞て云ふ、太陽が地球を廻るも、地球が太陽を廻るも吾が關するところにあらずと。Keats 又云ふ。

"Do not all charms fly
At the mere touch of cold philosophy?
There was an awful rainbow once in heaven:
We know her woof, her texture; she is given
In the dull catalogue of common things.
Philosophy will clip an Angel's wings,
Conquer all mysteries by rule and line,
Empty the haunted air, and gnomed mine—
Unweave a rainbow, as it erewhile made
The tender-person'd Lamia melt into a shade."—*Lamia*, Pt. II. ll. 229-38.

Tennyson も亦 *Maud* 中にかく云へり。

I.

"See what a lovely shell,
Small and pure as a pearl,
Lying close to my foot,
Frail, but a work divine,
Made so fairily well
With delicate spire and whorl,
How exquisitely minute,
A miracle of design!

II.

What is it? a learned man
Could give it a clumsy name.
Let him name it who can,
The beauty would be the same."—Pt. II. ii.

如此く文學者の行ふ解剖は常に全局の活動を目的とするものにして、各部として各部を吟味するが如きは、全く此目的を助長するの效果あつて始めて存在を許すべきのみ。Ibsen の劇を通讀する際吾人は彼が非凡なる技術を以て作中の人物を一々に書き分けたる明晰なる解剖力に一驚を喫すべきも、これとても要するに彼の穿ち得たる各部的知識を以て各性格を完全に組み立てんとする方便に外ならず。如何に精巧なる解剖なりとも、その全局の印象に交渉なきか又は之を妨害する傾向を有するものは到底文學上勞力に相應する效果を收め能はざるべし。George Eliot は泰西の小說家中一流に位すべきものにして、特に其知的方面に於ては殆ど無比と云うて可なるが如し。されば其作品中性格の解剖には Dickens の通弊たる不都合なく、また Scott の如き散漫の箇所なけれど、如何にせん、時に其論理餘りに徹に過ぎ、小說は作者の單純なる道具にして、其中の人物は宛然傀儡たるの觀あることあり、卽ち其一擧一動悉く作者の理論に伴なふものにして活如たる自由の氣を缺くこと屢なりとす。是他なし精刻なる解剖を極度迄進むるにも拘はらず、解剖せられたる諸要素が解剖せられたる迄にて、組織的に吾人の注意に訴へざるが爲のみ。

性格の描寫の如き複雜なる問題はしばらく措いて論ぜずとするも一事一物を敍して之をわが腦裏に躍然たらしむるが如き小問題に際してさへ理論は依然として一樣なるを見るべし。餘りに委細に過ぎたるものは其效却て簡潔なる勁句に及ばざること多きは爭ふ能はざる事實にして、かの

小說中の女性の容貌の如き鼻は何、眼は何と一々精細に敍述し來る時、其結果はたゞ朦朧たる影が腦裡に宿るに過ぎざること多し、これ卽ち各部の成功を計りて全局の印象を後にしたる弊なりとす。試みに左の一節を見よ。

"She was indeed sweetly fair, and would have been held fair among rival damsels. On a magic shore, and to a youth educated by a System, strung like an arrow drawn to the head, he, it might be guessed, could fly fast and far with her. The soft rose in her cheeks, the clearness of her eyes, bore witness to the body's virtue; and health and happy blood were in her bearing. Had she stood before Sir Austin among rival damsels, that Scientific Humanist, for the consummation of his System, would have thrown her the handkerchief for his son. The wide summer-hat, nodding over her forehead to her brows, seemed to flow with the flowing heavy curls, and those fire-threaded mellow curls, only half-curls, waves of hair call them, rippling at the ends, went like a sunny red-veined torrent down her back almost to her waist: a glorious vision to the youth, who embraced it as a flower of beauty, and read not a feature. There were curious features of colour in her face for him to have read. Her brows,

thick and brownish against a soft skin showing the action of the blood, met in the bend of a bow, extending to the temples long and level: you saw that she was fashioned to peruse the sights of earth, and by the pliability of her brows that the wonderful creature used her faculty, and was not going to be a statue to the gazer. Under the dark thick brows an arch of lashes shot out, giving a wealth of darkness to the full frank blue eyes, a mystery of meaning—more than brain was ever meant to fathom: richer, henceforth, than all mortal wisdom to Prince Ferdinand. For when nature turns artist, and produces contrasts of colour on a fair face, where is the Sage, or what the Oracle, shall match the depth of its lightest look?"

こは Meredith の作 *The Ordeal of Richard Feverel* (Chap. xv.) 中の Lucy の描寫にして固より其うちに同氏獨特の妙味なきにあらざれど、これを一讀して其女性の顔の造作が一時に電光の如く明らかに腦裏に映ぜざるは誰人と雖も否定し能はざるところなるべし。

沙翁作 *Tempest* の Miranda は Ferdinand を一目見て父に問うて曰く、

> "What is 't? a spirit?
> Lord, how it looks about! Believe me, sir,

> It carries a brave form. But 'tis a spirit."—Act I. sc. ii. ll. 409-11.

父これに答へ、そは船を失ひ友と離れて彷徨ふ人にして靈物にあらずと告ぐるや、Miranda はたゞかく云へるのみ。

> "I might call him
> A thing divine, for nothing natural
> I ever saw so noble."—ll. 417-9.

こは極めて單簡なり。あまりに單簡にして遂に Ferdinand の面影を髣髴せしむる事能はず。全體の形容を一語のうちに盡くしたる手際はあれども其一語の漠然として何等の具象をも捕捉しがたき點に於て却つて Meredith の詳敍に一籌を輸するの觀あり。然れども結果の優劣は單に作家の手腕に歸着す。其方法の善惡より云へば沙翁の一語に總體の風姿を描かんと力めたるが却つて正當と云ふを得べきか。只此正當の方法によつて思ふ程の全局的效果を奏し得ざる時、又部分的解剖によりて綜合せる印象を讀者に與へがたき時、作家は手近なる比喩に託して全景を一幅のうちに活動せしめんとす。宴會に Juliet を見染めたる Romeo の語是なり。

> "O, she doth teach the torches to burn bright!
> It seems she hangs upon the cheek of night

Like a rich jewel in an Ethiope's ear;
Beauty too rich for use, for earth too dear!
So shows a snowy dove trooping with crows,
As yonder lady o'er her fellows shows."

—*Romeo and Juliet*, Act I. sc. v. ll. 46–51.

精緻の敍述中最も有名にして、しかも最も失敗に終りたるは Ariosto の *Orlando Furioso* (Canto VII. st. xi–xv) の Alcina の美を寫す一節なりとす。Lessing は其著 *Laokoon* 中に此節を失敗の一例として擧げたるは人の知る所なれども、參考の爲め更に讀者の一讀を煩はさんとす。

"Her shape is of such perfect symmetry,
As best to feign the industrious painter knows,
With long and knotted tresses; to the eye
Not yellow gold with brighter lustre glows.
Upon her tender cheek the mingled dye
Is scattered, of the lily and the rose.

Like ivory smooth, the forehead gay and round
Fills up the space, and forms a fitting bound.

Two black and slender arches rise above
Two clear black eyes, say suns of radiant light;
Which ever softly beam and slowly move;
Round these appears to sport in frolic flight,
Hence scattering all his shafts, the little Love,
And seems to plunder hearts in open sight.
Thence, through mid visage, does the rose descend,
Where Envy finds not blemish to amend.

As if between two vales, which softly curl,
The mouth with vermeil tint is seen to glow:
Within are strung two rows of orient pearl,

Which her delicious lips shut up or show.
Of force to melt the heart of any churl,
However rude, hence courteous accents flow;
And here that gentle smile receives its birth,
Which opes at will a paradise on earth.

Like milk the bosom, and the neck of snow;
Round is the neck, and full and large the breast;
Where, fresh and firm, two ivory apples grow,
Which rise and fall, as, to the margin pressed
By pleasant breeze, the billows come and go.
Not prying Argus could discern the rest.
Yet might the observing eye of things concealed
Conjecture safely, from the charms revealed.

To all her arms a just proportion bear,
And a white hand is oftentimes descried,
Which narrow is, and somedeal long; and where
No knot appears, nor vein is signified.
For finish of that stately shape and rare,
A foot, neat, short and round, beneath is spied.
Angelic visions, creatures of the sky,
Concealed beneath no covering veil can lie."

かくの如く頭の頂より足の爪先迄残る隈なく寫し出せる手際は整然として一絲亂れずとも賞すべきなれども、如何にせん、其目的たる美人全部の印象は頗る曖昧たるを免れず、反之 Homer が用ゐし簡潔なる描寫法、例へば "Nereus was beautiful; Achilles still more so; Helen possessed godlike beauty." の如きは右の如き微細の描寫が引き出さんとして失敗に終りたる印象を却つて或る程度迄に喚起し得るものなり。なほ吾邦の俳句が僅かに十七文字の制限のうちに生存しながらも能く描寫の方面に文學的效果を奏し得るは、其の用ゐる手段が常に「美しき人」「艶なる人」などと單純に云ひ放つのみにて決して細々しき科學的分解を含まざるに原因するこ

と疑なし。

此故に文學者の解剖は解剖を方便として綜合を目的とす。綜合の目的を達せざる時は細巧なる解剖も殆んど無效に歸す。從つて、ある一部の人々をして單純なる記述の有力なるを唱道せしむるに至る。有力は或は之れ有らん。複雜なる觀察の發達せる今日に於て一圖に單純なる記述を重んずるは時機に通ぜざるの甚しきものと云はざるべからず。Ballads は眞率にして單純なり、從つて人を動かす事多し。この故に凡百の記述は悉く Ballads に習はざる可からずと云ふは豆腐は淡泊にして味あるが故に他の食物は皆捨てざる可からずと主張するが如し。思ふに上代の著作は槪して單純にして解剖を經ざる記述より成るが如し。Ballads は云ふを待たず。Chaucer 然り。Arthur 物語然り。左傳然り。西鶴も亦然り。有名なる前代の作家が斯の如くにして成功せるは彼等の方法の正鵠を誤らざりしを證明するの外に、其他の方法の必ず失敗に終るべきを斷定し得るの理なし。彼等は物を寫すに二三語にして全局を掩ふ。但し此二三語は彼等の粗大なる觀察に應ずる粗大なる働きをなすにとゞまつて、その以上の功力を有せず。全部を描出するの點に於て其當を得たるが如しと雖ども精細なる觀察よりなる一物の全部をつくすには無論不充分なりと云はざる可からず。人は云ふ西鶴は文章家なりと、一筆にして情景を活躍せしむと。成程貴意の如くなるべし。然れども西鶴は一筆にて全部を描く以上に緻密なる觀察力なかりし男なるを忘るべ

からず。是固より時勢の科にして西鶴の罪にあらず。西鶴をして今の世にあらしめば、今の世相應の解剖的筆致を弄して同じく一物をより多く活動せしめたるやも知るべからず。獨り西鶴に於て然るのみならず Chaucer と雖ども Malory と雖ども異なる所なからん。彼等は解剖的觀察力を缺きしが故に解剖せざる點に於て成功せり。吾人は解剖的觀察力を有するが故に解剖せる點に於て成功せざる可からず。出來得る限り全部を引きほごしたる上、ほごされたる各部を綜合して讀者の網膜に映ぜしめざる可からず。之を古今時勢の差と云ひ、又古今作家の差と云ふ。吾人はある特殊の場合に於てのみ吾人の祖先が撰ぶべく餘義なくせられたる態度を取るに躊躇せず。同時に吾人の生存上又鑑賞上に必要條件として養成し來りたる細緻なる觀察力に乖離せざる程度の記述を草し得て始めて吾人の本領をあらはすを得べし。Henry James は Charlotte Stant の一瞬を寫すに殆んど千餘字を費やしたり。(*The Golden Bowl*, chap. iii を見よ) George Meredith はある人が倫敦橋の傍で滑つて顚倒せる一瑣末の心理狀態を解剖して殆んど一篇にわたれり。(*One of our Conquerors*, chap. i を見よ) Pater が *La Gioconda* を評したる語に曰く

"The presence that thus rose so strangely beside the waters, is expressive of what in the ways of a thousand years men had come to desire. Here is the head upon which all "the ends of the world are come," and the eyelids are a little weary. It is a beauty

wrought out from within upon the flesh, the deposit, little cell by cell, of strange thoughts and fantastic reveries and exquisite passions. Set it for a moment beside one of those white Greek goddesses or beautiful women of antiquity, and how would they be troubled by this beauty, into which the soul with all its maladies has passed! All the thoughts and experience of the world have etched and moulded there, in that which they have of power to refine and make expressive the outward form, the animalism of Greece, the lust of Rome, the reverie of the middle age with its spiritual ambition and imaginative loves, the return of the Pagan world, the sins of the Borgias. She is older than the rocks among which she sits; like the vampire, she has been dead many times, and learned the secrets of the grave; and has been a diver in deep seas, and keeps their fallen day about her; and trafficked for strange webs with Eastern merchants: and, as Leda, was the mother of Helen of Troy, and, as Saint Anne, the mother of Mary; and all this has been to her but as the sound of lyres and flutes, and lives only in the delicacy with which it has moulded the changing lineaments, and tinged the eyelids and the hands. The fancy of a perpetual life, sweeping together

ten thousand experiences, is an old one; and modern thought has conceived the idea of humanity as wrought upon by, and summing up in itself, all modes of thought and life. Certainly Lady Lisa might stand as the embodiment of the old fancy, the symbol of the modern idea."—*The Renaissance.*

斯の如く解剖的なる記述は複雜なる今日に於ても容易に見るべからず。斯の如く綜合的に一種まとまりたる情緒を吾人に與ふる記述も亦儔すくなかるべし。最後に斯の如く精巧なる記述に至つては百の Malory あり千の西鶴ありと雖ども遂に擬し難きを知らざる可からず。しかも現代の觀察力と其觀察力を表現するの術とは遂に吾人を驅つて、この種の言語を駢列するの已を得ざるに至らしむるものとす。故に云ふ文學者は解剖を必要とす。但し單なる解剖にとゞまる可からず。解剖せる諸項の下に掌を指すの徵を示して、其徵なるものが更に合して一團の全精神となつて腦裏に闖入せざる可からずと。

解剖につき科學者と文學者と其態度の差異は大略如此なれど、こゝに一言すべきは科學者とても時に物の全局を描かんと力むることなきにあらず。例へば說明科學がある物體の定義を立てて之を正確に述べんとするが如きこれなり。然らば此場合の科學者の態度は文學者の普通とるべきところのものと同一なりや否や、左に少しく其間の消息を述ぶべし。

同じく物の全局を寫さんとする場合に於ても、科學者は概念を傳へんとし、文學者は畫を描かんとす。換言すれば前者は物の形と機械的組立を捉へ、後者は物の生命と心持ちを本領とす。尙科學者の定義は分類の具に供せらるれど、文學者の敍述は物を活かさんが爲の用に過ぎず。科學者は類似をたどりて系統を立てんと欲し、個々の物體に左したる興味を有するにあらず、文學者に至りては其目指すところ物の秩序的配置にあらずして其本質にあり。されば物の本性が遺憾なく發揮せられて一種の情緒を含むに至る時は、即ち文學者の成功せる時なりとす。從つて文學者があらはさんと力むる所は物の幻惑にして、躍如として生あるが如く之を寫し出すを以て手腕とす。科學者の産出は特性の目錄にして、此目錄より成立せる物體の活動の實況にあらず。今試みに菫草につきて言へば、字典に曰く、

"*Viola.* A large genus of usually small plants of the violet family, having alternate leaves and axillary peduncles bearing 1 or 2 irregular flowers, the lower petal being prolonged into a spur or sac."

これ明らかに活動を缺損せる文字なり。轉じて Wordsworth の詩句を見るに、

"A violet by a mossy stone
Half-hidden from the eye!

— Fair as a star, when only one
Is shining in the sky."—*She dwelt among the untrodden ways.*

とあり、菫の風丰の躍如として活動するを見るべし。又同じ詩人の *To the Daisy* を見るに、

"Thee Winter in the garland wears
That thinly decks his few grey hairs;
Spring parts the clouds with softest airs,
That she may sun thee;
Whole Summer-fields are thine by right;
And Autumn, melancholy Wight!
Doth in thy crimson head delight
When rains are on thee.
In shoals and bands, a morrice train,
Thou greet'st the traveller in the lane;
Pleased at his greeting thee again,
Yet nothing daunted,

Nor grieved if thou be set at nought:
And oft alone, in nooks remote,
We meet thee, like a pleasant thought,
When such are wanted."

とあり。詩人の歌はんとするは、雛菊が自然界に對する情的態度にして、描かんとするは其生命にあり。Herrick の薔薇を歌へる詩に曰く、

"Under a Lawne, then skyes more cleare,
Some ruffled Roses nestling were:
And snugging there, they seem'd to lye
As in a flowrie Nunnery:
They blush'd, and look'd more fresh then flowers
Quickned of late by Pearly showers;
And all, because they were possest
But of the heat of *Julia's* breast:
Which as a warme, and moistned spring,

Gave them their ever flourishing."

"ruffled" と云ひ "nestling" と云ひ凡て皆直接に情緒を引き起す言語なるが故に其手段を藉りて表出せられたる薔薇は決して死せる薔薇にあらず、靈を具ふる薔薇なり。一旦かくの如き幻惑を受け終れば、花瓣の大小幹の長短は毫も意に介するに足らず。

以上文學的及び科學的敍述の區別に關しては Winchester の *Principles of Literary Criticism* (五二頁以下)に類似の辯論あれば就いて看るべし。

更にまた科學者の欲するところは概括にあり、個々別々の場合を綜合して之を統ぶる主義、法則の發見に存す。此故に色彩なく音響なく感情あることなし。反之文學者は此等の冷やかなる主義法則を以て滿足すること能はず、これに肉を附け血を通はしめて、廣くこれを世に示さんと欲す。されば科學者と文學者は此點に於て理學者對工學者の關係に似たり。「女の一念」とは世俗の概括的文句にして、其うちに科學的價値なきは勿論なれど、これを

"And o'er the hills, and far away
Beyond their utmost purple rim,
Beyond the night, across the day,
Thro' all the world she follow'd him."—Tennyson, *The Day-Dream.*

と云はば如何に感じ強きかを思へ。況や科學的の抽象概念を詩化するに於てをや。

次に注目すべきは科學者殊に物理學者が物質界の現象を時間、空間の關係に引き直さんとすることにして、其方便として彼等は自家特有の言語を使用す、其言語の重なるは所謂數字と稱する記號なり。彼等は吾人が眼に映ずる色彩、耳に聽く聲音を此種の言語に改めて曰く、これエーテル或は空氣の振動なりと、彼等の寒暖を敍するとき又此種の言語を用ゐて曰く列氏の幾度なり、華氏の幾度なりと。文學者も亦類似の語法を時に用ゐる事あり。されど文學者が用ゐる數字は科學者のそれの如く有臭有味のものを化して無味無臭となすが爲にあらず、熱あり光あるものを冷靜にして空洞ならしむるが爲にもあらず、無を有とし、暗を明に化する手段に外ならず。文學者は常に此手段に由りて觸れ難き或物を明所に摩挲せしめんとす。かの畫家 Watts の傑作『希望』を觀るに、形なく影なき茫漠たる抽象的の「希望」なるものを捉へ來つて巧みに之を具體化せるを見る。而して畫家が如何なる方法を用ゐたるかを考ふれば單に此記號的形狀を附加せるに過ぎざりき。文學に在つてもこれと同樣にして或は捕へ難き「戀」を表出するに Myrtle を用ゐ、又は見るべからざる「望」に Hawthorn を用ふ。すべて皆これ象徴手段に外ならず、科學者が數字を用ゐると性質に於て異なるところなし。左に文學者が物を活かさんが爲めに用ゐる象徴法につき述ぶるところあるべし。

余自身の嗜好を明らさまに述ぶれば余は象徴なることを好むものにあらず。されど世の文學に此主義が一種の勢力として存在しうるの有理なるを認む。

凡そ象徴法に於ける記號は多くの場合に於て思索の關門を通じて始めて捉へ得るを例とす。換言すれば記號は其の代表するところのものを直下に喚起して、水を掬んで冷暖自知するが如くに興を誘ひ來る事すくなきが故、恰も洒落を聽きて感じ得ず、其說明を待つて始めて其意を悟ると異なるところなきに似たる點あり。神祕の風致を具へたる詩人 Blake は象徴に特殊の興味を有したるが如く、遂に Swinburne をして其作 *Cabinet* を評して左の言辭を用ゐしむるに至れり。

「篋笥 (Cabinet) とは情熱熾なるか、もしくは詩趣饒かなる、幻夢の謂なり。形而上の寶なり。やゝともすれば變じて形而上の束縛たらんとするものなり。人は此中に在つて幽せらる。金鍵ありと雖ども遂に楚囚たるを免かれず。此牢獄を造るものは愛情に外ならず、又藝術に外ならず。此中に坐して遠く望めば美妙の景、和怡の樂、月の光、露の色、凡て清新なる天地ありて以て吾身を安んずるに足り、吾目を悅ばしむるに足る。然れども遂に縹緲として捕捉すべからず、影の如くにして追ふ可からず。一たび此中に入れば吾人現世の悅樂と威力は忽ちにして倍又倍となる。只人求むる事多きに過ぎ形而上のものを形而下に變ぜんとするとき、五指の把持に堪へざる深邃なる一物を餤の手に捕へんとするとき、永劫無窮を有爲轉變に譯せんとするとき、本元底を假存

底に譯せんとするとき、實在的を附在的に譯せんとするとき、吾人の生命と共に長かるべき結構は忽然と破滅して氣餒え目眩して號泣已まざる赤子の如くに吾人を放下し去る。此故に最初冥漠の境に欣躍して輕快なる自然の悅樂に充ち、赤子の如く動物の如くなりし吾人は一朝にして不幸憂鬱の小兒となり了る。否呱々たる嬰兒の昔日に歸らざるを得ず。焦慮苦悶の度を超えたるが爲め大なる幻夢を有しながら遂に之を捉ふる事能はず、舊歡既に去つて新愉未だ至らず。而して吾人靈性の聖母たる愛情も藝術も悄然たる吾人と共に空しく暗涙を飲んで衰へんとす。めぐり吹くは幻夢の赫奕たる精神と氣魄を失へる荒涼たる悲風のみ。」(Swinburne, *William Blake, a Critical Essay.* 一七六頁—一七七頁)

The Crystal Cabinet.

"The maiden caught me in the wild,
　Where I was dancing merrily;
She put me into her cabinet,
　And locked me up with a golden key.

This cabinet is formed of gold,

　And pearl and crystal shining bright,
And within it opens into a world
　And a little lovely moony night.

Another England there I saw,
　Another London with its Tower,
Another Thames and other hills,
　And another pleasant Surrey bower.

Another maiden like herself,
　Translucent, lovely, shining clear,
Threefold, each in the other closed,—
　Oh what a pleasant trembling fear!

Oh what a smile! A threefold smile

Filled me that like a flame I burned;
I bent to kiss the lovely maid,
And found a threefold kiss returned.

I strove to seize the inmost form
With ardour fierce and hands of flame,
But burst the crystal cabinet,
And like a weeping babe became:

A weeping babe upon the wild,
And weeping woman pale reclined,
And in the outward air again
I filled with woes the passing wind."

讀者もし此詩を唱して Swinburne の云へるが如き寓意を一瞬時に體し得るとせば象徵詩の功も亦偉大なりと云ふべし。去れども事實は却つて之に反す。象徵の言語を通じて其奧に潜むもの

を剔抉せんとするは人の耳目を通じて精神を捉へんとするが如し。一喜一憂無形の靈を髣髴せしむるに足るものなきにあらずと云へども、一擧一動を以て人の意志を揣摩して誤まる事多きは實例に於て屢見る所なりとす。況んや眼鼻の狀態を案じて腦裏の生活を思索の力によりて推斷せんとするをや。中ると云へども既に文學の鑑賞を離る。又況んや朦朧として捕へ難き象徵を拈じて强ひて裏面の消息を掌上に觀ん事を力むるをや。*Cabinet* を讀んで得たる余の感じは列仙傳を讀んで得たる感じと一般なり。余の感じは其以外に出づる事を求めず。又遂に出づる能はざるなり。

飜つて東洋の詩歌を檢するに亦此種の象徵法を謳歌するものゝ如し。特に注目すべきは其解釋に於て彼等が甚しき弊風を釀して得意なるにあり。例へば芭蕉の「古池や」に禪理ありと說き、「物云へば唇寒し秋の風」に人事道德の意義を附着するの類比々皆然り。寒山は枯淡の禪徒なり。後人其詩を集錄して寒山詩と稱し、白隱これが註解を試み『闡提記聞』と名づけたるは人の知る所なり。其一聯に曰く「泣露千般草吟風一樣松」と、白隱の解に曰く、此一聯は寒山一區の佳境にして寒山九虎の嶮關なり、これ趙州の所謂見易くして透り難きものなり、若也透得過せば大に見難からむ、往々風光の看を作り了し、實相の會を作り了り、崑崙の會を作り了り、陀羅尼の判を作り了る、特に知らず天涯を隔つることを云々。余は芭蕉若しくは寒山が果して解釋者の如き意味を以て俳句を作り、詩句を聯ねたりや否やを知らず、余はたゞ下の如く云へば足れり。彼等

若しかゝる意味に於て詩を作りたりとせば、そは眞の詩人ならざる證なり、凡そ文學に於ける象徵法は其記號が代表する意義を思索の結果讀者に案じ出ださしむるにあらずして、之を苦勞もなく自然と誘ひ出だすにあり、理窟詰めに之を推論せしむるにあらずして、感情的に聯想せしむるにあり。世に沒趣味の輩あり、此種の文學を味はふに當り、何等かの講釋を附せざれば到底理會し難き記號を濫用し、評家亦富籤的了見を以て、これに理窟を求め、其眞意こゝにあり抔と吹聽するは笑ふべし。凡そ文學にありて高遠と云ひ、幽微と云ふは單に感興の津々と湧き來るうちに含まるゝ高遠もしくは幽微の意に外ならず。感興の比較的乘り難き哲理學說を其裏面に伏在せしめて、文學の深遠なる處こゝにありとなすは文學の本領を棄てゝ理知の奴隷たるを冀ふものゝ言のみ。文學者は哲學を詩化するを妨げず。詩を哲學化するに至つては戈を逆まにしてわが主を擊つが如し。

前段にもどりてわが所論を約言すれば下の如し。文學者は香なき者に香を添へ、形なき者に形を賦す。之に反して、科學者は形ある者の形を奪ひ、味あるものの味を除く。此點に於て文藝家と科學者とは全く反對の方向に事物を飜譯するものにして、右と左に分かれて各其分擔の義務を果たすと云ふも不可なきが如し。從つて文學者は感覺或は情緒をあらはさんが爲めに象徵法を用ゐ、科學者は感覺又は情緒と全く無緣なる其獨得の記號により事物を記述せんとす。是故に吾人

は假令これら科學者の記號言語に通ずればとて、其記號により表出せられたる物それ自身に立ち戻る爲めには一通りもしくは二通りの手續きを要す。而して此道筋は常に直接ならずして間接なり。Cの100°Fの212°と云へば單簡にして要領を得たるが如きも有力なる印象を吾人に與ふるに至つては左の文學的記述に及ばざる事遠し。

"Thirty years ago, Marseilles lay burning in the sun one day.

A blazing sun upon a fierce August day was no greater rarity in southern France then, than at any other time, before or since. Everything in Marseilles, and about Marseilles, had stared at the fervid sky, and been stared at in return, until a staring habit had become universal there……

Blinds, shutters, curtains, awnings, were all closed and drawn to keep out the stare. Grant it but a chink or keyhole, and it shot in like a white-hot arrow. The churches were the freest from it. To come out of the twilight of pillars and arches—dreamily dotted with winking lamps, dreamily peopled with ugly old shadows piously dozing, spitting, and begging—was to plunge into a fiery river, and swim for life to the nearest strip of shade. So, with people lounging and lying wherever shade was, with

but little hum of tongues or barking of dogs, with occassional jangling of discordant church bells, and rattling of vicious drums, Marseilles, a fact to be strongly smelt and tasted, lay broiling in the sun one day."—Dickens, *Little Dorrit*, chap. i.

こゝに附言すべきは文學者も亦數字を使ふことある事實なりとす、單にありと云はんよりは寧ろ缺くべからざる有勢なる便宜手段として彼等は數字を使用することあり。其數字は勿論科學者の數字と數字たる點に於て異なることなきは勿論なれど、其使用の目的には著しき差違ある事を忘るべからず。文學者の用ゐる數字は決して飜譯的のものにあらず、全く科學者の期するところと反對の用をなすものなり。物に附帶して之を顯著ならしむるものなり、恰も味を添ふる藥味の如し。或人南洲の詩を評して數學的詩と呼べり、七寸の鞋、三尺の劍、千絲の髮等數字が夥しく用ゐられたるが故ならん。されどもかゝる場合に於ける數字は此等の諸物の性質を更に明瞭ならしめんが爲に使用せられたる道具なるを以て、これを數學的となすは誤れり。古の漢士の詩人が好みて用ゐし一劍、半夜、千里或は四海など皆此類に屬す。左に西洋の例を擧ぐべし。

"And the Lord said unto him, Therefore whosoever slayeth Cain, vengeance shall be taken on him sevenfold."—*Genesis*, iv. 15.

"The tithe of a hair was never lost in my house before."

—Shakespeare, 1 *Henry IV*, Act III. sc. iii. 1. 66.

"She took me to her elfin grot,
And there she wept, and sigh'd full sore,
And there I shut her wild wild eyes
With kisses four."—Keats, *La Belle Dame sans Merci*.

"Cairbar thrice threw his spear on earth. Thrice he stroked his beard."

—Ossian, *Temora*, Bk. I.

"Seven of my sweet loves thy knife
Hath bereavèd of their life:
Their marble tombs I built with tears
And with cold and shadowy fears.

Seven more loves weep night and day
Round the tombs where my loves lay,
And seven more loves attend at night
Around my couch with torches bright.

And seven more loves in my bed
Crown with vine my mournful head;
Pitying and forgiving all
Thy transgressions, great and small." —Blake, *Broken Love.*

かくの如くBlakeは此詩に於て無暗と「七」なる數字を繰り返せど、此數字は知識を傳ふる方面より見て全く價値なきものなること明らかなり。唯これによりて此神祕不可思議の一篇に何處ともなく精確の心地を添ふる役を果たすのみ。

"O, that the slave had forty thousand lives!
One is too poor, too weak for my revenge." —*Othello*, Act III. sc. iii. ll. 442–3.

"Nine-and-twenty knights of fame
Hung their shields in Branksome Hall;
Nine-and-twenty squires of name
Brought them their steeds to bower from stall;
Nine-and-twenty yeomen tall
Waited, duteous, on them all."

—Scott, *The Lay of the Last Minstrel*, Can. I. ll. 16–21.

以上擧げ來りし作例より轉じて試みに左の一例を檢せよ。

"Prim Doctor of Philosophy
From academic Heidelberg!
Your sum of vital energy
Is not the millionth of an erg.
Your liveliest motion might be reckoned
At one-tenth metre in a second."

これは近世物理學の泰斗 James Clerk Maxwell の戯作なるが、此詩作中の數字は純然たる科學的記號として用ゐられたるものなり。說者云ふ erg とは "the energy communicated by a dyne, acting through a centimetre" にして、tenth-metre とは 1 metre×10^{-10} なりと。從つて普通の讀者には諷誦の際何等の感興を催ふす事なし。それにも拘はらず科學的に此數字の意義を了知する以上は依然として其文學的效果を收めつゝあるを悟るべし。

科學者に取つて數字は殆んど唯一の言語なり。文學者より云へば唯一と云ふ程の大切なる道具にあらず。去れども以上の作例の示す如く古來の詩人は或場所に或る意味に此數字を使用して一種の感興を添ふるを力めたるが如し。方向の異なる兩者の間に同一の數字が利用せらるゝは猶同じ頭巾が耄碌おやぢにも二八の美人にも相應の役に立つが如し。たゞ寒さを防ぐ爲めに被ると、人目をつゝむ爲めに用ゐると目的の上に差違あるを知れば足れりとす。文學者は三と云ふ。三本の櫻に即し、三人の男に即し、三度の食に即して三の意義を明瞭にせんと欲するに過ぎず。もし櫻を離れ、男を離れ、食を離れて眞に抽象的の三が三として必要なるの時に於て文學的三は變じて科學的三となる。數字は一の記號に過ぎず、しかも其用方如何の說明によりて文學者と科學者の態度を區別するの好例たるを失はず。

第二章　文藝上の眞と科學上の眞

凡そ文學者の重んずべきは文藝上の眞にして科學上の眞にあらず、かるが故に必要の場合に臨みて文學者が科學上の眞に背馳するは毫も怪しむに足らざるなり。而して文藝上の眞とは描寫せられたる事物の感が眞ならざるを得ざるが如く直接に喚起さるゝ場合を云ふに過ぎず。一代の天才 Millet の作品中に農夫が草を刈るの圖あり。ある農夫之を見て此腰付にては草を刈る事覺束なしと評せりと聞く。成程事實より云へば無理なる骨格なるやも知れず。去れども無理なる骨格を描きながら、毫も不自然の痕迹なく草を刈りつゝあるとより外に感じ得ぬ時に畫家の技は藝術的眞を描き得たりと云ふべし。藝術的眞を描き得たりとせば科學上の眞を發揮し得たりや否やの問題は遂に觀者を煩はすに足らざるべし。今世の畫家頻りに人體の組織を研究して日も亦及ばざるが如し。彼等の作物をして一寸たりとも科學上の眞に近づかしめんとするの點に於て誠に嘉すべき志を抱けるを疑はず。しかも一意に此方面に馳せて遂に藝術上の眞を學ぶことなくば、其作品は終に失敗たるを免れ能はざるべし。文藝上の眞と科學上の眞と其間に微妙の關係あるは勿論なれど、文藝の作家は文藝上の眞を其第一義とすべく、場合によりては此文藝上の眞に達し得ん

が爲に甘んじて科學上の眞を犧牲とするも不可なきにちかし。文藝上の眞にして科學上の眞に背くもの一にして足らず。左に一二を擧げて例證とす。

(1)誇大法。 *Iliad* の卷の五に曰く、"Next Diomedes of the loud war-cry attacked with spear of bronze; and Pallas Athene drave it home against Ares' nethermost belly, where his taslets were girt about him. There smote he him and wounded him, rending through his fair skin, and plucked forth the spear again. Then brazen Ares bellowed loud as nine thousand warriors or ten thousand cry in battle as they join in strife and fray. Thereat trembling gat hold of Achaians and Trojans for fear, so mightily bellowed Ares insatiate of battle."—A. Lang, W. Leaf & E. Myers, *The Iliad of Homer*, p. 108.

既に神の戰なり。神なれば九千人前の大音聲も一萬人分の怒號もたゞ想像し得るの便宜多き敍方を眞とする外はあるべからず。Homer が此點に於て成功したりや否は問題外とするも、想像を眞ならしめんが爲めに事實を誇大にし、誇大にしたるが爲め描寫に生命を賦し得たりとせば、かゝる場合に科學上の眞に拘泥するものは徒らに文藝を科學的知識につなぎつけて、活潑々地の作用を妨ぐるものと云ふべし。

(2)省略、選擇法。上來述べ來りし如く、凡そ吾人の意識內容は嚴正の意味に於て殘りなく言葉、文字に改め得るものにあらず。されば文學者は物の一面一部を選み、これによりて其傳へんとするところを完全に發揮すること屢なり。これ文學者が科學上の眞を等閑視する第二なり。所論は前編を參照すれば自から明瞭なるを以て深く云はず。例を擧ぐれば比々皆是なるを以て略す。

(3)組み合せ。詩人畫家等の想像的創作物を云ふ。卽ち彼等は現實の世より蒐め得たる材料を綜合して此世に存在せざるものを描出する手際を有したるなり。Milton の Satan, Swift の Yahoo 或は沙翁の *A Midsummer Night's Dream* 中の Oberon, Titania, *Tempest* の Caliban 等、凡て是等は此世に於て求めて得べきものにあらざれば科學的立脚地より檢して不合理なるは無論のことなれど、吾人の是等より受くる感情、感覺は生命を有し僞りなきを以て、是等は完全なる文藝上の眞を具有するものなるを知る。由來文藝の要素は感じを以て最とするものなるが故に、此感じを讀者に傳へんとして傳へ得たるとき吾人はこれに文藝上の眞を附與するを躊躇せず。かの Turner の晩年の作を見よ。彼が畫きし海は燦爛として繪具箱を覆したる海の如し。彼の雨中を進行する汽車を描くや溟濛として色彩ある水上を行く汽車の如し。此海、此陸は共に自然界にありて見出だす能はざる底のものにして、しかも充分に文藝上の眞を具有し、自然に對する要求以上の要求を充たし得るが故に、換言すれば吾人はこゝに確乎たる生命を認むるが故に、彼の畫は科學上眞ならざれども文藝上に醇乎として眞なるものと云ふを得るなり。

されど此所謂文藝上の眞は時と共に推移するものなるを忘るべからず。文學の作品にして今日は眞なりと賞せられ、明日は急に眞ならずと非難を受くるもの多きは吾人の日常目撃するところにあらずや。これ凡て「眞」なるものの標準刻々に變じつゝあるに據るものとす。

數年前の雜誌 *Academy and Literature* に下の如き投書をなせるものあり。

「卿等は近頃頻りに高級文學に對する一般社會の冷淡を憂ふれど、余は此現象の理由を近年長足の進歩をとげたる科學思想及び其研究に求めんとするものなり。而して此解釋は高級藝術にも同樣に適應し得べきものと信ず。碩學 Spencer が其大著に於て科學を目するに至高至大の力なりとし、これを吾人精神界の女王に擬し、世の藝術文學はすべて其賞讃を目的としてこれに隷屬する侍女なりと說きしより、余が意見は勿論、世間大方の意向もこれによりて著しく根本的變化を受けたるに似たり。余も嘗ては "Quoit-thrower"（「鐵輪抛げ」）を褒めたる一人なれども、Spencer に其重力の誤謬を指示せられてよりは、それに對し甚しき不快の念を禁ずる能はず、又 "Messiah" の曲に聞き惚れたることありしも、不合理なる一種の神學の後援の意志を含みしものと聞きては最早昔日の興を以てこれに對する能はず、又 "Madonna di San Sisto" を觀て賞歎措く能はざりし余も、哺乳動物の肩に翼を附することの如何にも非科學的なるを解してよりは、これに對する態度一變したるを自白す、又余とても一時は沙翁を世界の大詩人なりと信ぜし

ことあれど、Bohemia に海ありとし、或は妖婆をかりて舞臺の上に活動せしむる等の手際を見ては何を以てかその作家の能力を認め得べき、又 Othello と Desdemona の結婚は綜合哲學の生物說に逆行するものなるを以て、吾人は到底其結果なる悲劇に何等の同情を傾くること能はず、又余は年來 *Lycidas* を世界文學の珍なりと信ぜしも、亡びたる世の神々に耳を包まれ、生なき花に來れ來れと呼びかくるが如き、誠に「第一原因」の理を無視するの甚しきものなれば、余は遂に其價値を疑ふに至れり。……余は信ず、世の幾多の讀者も同樣の理により高級文學に對する興味を失ひしものなることを。」（一九〇四年三月五日）

吾人の眼を以てすれば此文中非難として擧げたるものの多くは殆ど非難たるの價なきものなれど、此寄書家にとりては眞面目にかく感じたるものなること疑なし、卽ち吾人が文藝上の眞なりとして許容するところのものを彼は眞ならずとして斥けしなり。後年世の趣味一變して、公衆の大部分が擧げて皆此種の意向を有するに至らば、今の世の文藝上の眞は全く其趣を改め沙翁は永く世に忘らるゝに至るべきか。

第四編　文學的内容の相互關係

余は前編の所論により文學者の覺悟を稍分明ならしめ得たりと信ず。約言すれば科學者が理性に訴へて黒白を爭はんとするに引きかへて、文學者は生命の源泉たる感情の死命を制して之を擒にせんとす。科學者は法廷の裁判を司どるが如く、冷靜なる宣告を與ふ。文學者は慈母の取計ひの如く理否の境を脫却して、知らぬ間に吾人の心を動かし來る。其方法は表向きならず、公沙汰ならずして、其取捌は裏面の消息と内部の生活なり。

これ等内部の機密は種々特別の手段によりて表出せらるゝものにして、此等の手段を善用して其目的を達したる時、吾人は一種の幻惑を喚起してそこに文藝上の眞を發揮し得たりと稱す。

既に文藝上の眞を論じたる余は勢此眞を傳ふる手段を說かざる可からず。由來此手段を講ずるに所謂修辭學なるものあり。されども坊間に行はるゝ通俗の修辭學は徒らに專斷的の分類に力を用ゐ、其根本の主意を等閑視する傾向あれば其效著しからず。

余の說を以てすれば、凡そ文藝上の眞を發揮する幾多の手段の大部分は一種の「觀念の聯想」を利用したるものに過ぎず。以下說くところ（第一、二、三、四、五、六章）の如き全く此主張を本として組み立てたる結果に外ならず。

第一章　投出語法

「文藝上の眞」なるものの效力は作物が讀者の情緒を動かすにあることは既に說けるが如し。果して然らば文學者が勉めて動情的の語法を用ゐんと試むるは必然の事にして、毫も怪しむに足らず。然るに言語に於て最も情に富むものは尤も情を有せる吾人人類に附着するものなるべく、かの笑ふと云ひ怒ると云ふが如き悉く情的活動物の本質を表する資格あるものなれば、是等の言語をもて寫し出されしものは躍如たる情緒を生ずること明らかにして、自然活氣ある狀態を呼び來ることも疑ひなかるべし。加之宇宙の萬象を解釋するに當り其標準となるべきは自己即ち人類にして、己が周圍に紛飛する事態は凡て此中心に引き寄せられ、自己の情緒により處決せらるゝものなり、即ち吾人は動ともすれば自己の情緒を移して他を理會せんとする傾きあり。余は今これを假りに投出語法（Projective language）と名づく。即ち自己を投出（project）して外界を說

明する手段を意味するものにして、所謂擬人法又は Prosopopoeia 等は此内に含まるべきものなり。

吾人が日常何の氣もなく用ゐ慣れたる言語中此語法の適例たるべきもの意外に數多し。「雲足早し」「木の葉の私語」「引出しの手」の如き、西洋にても「縫針の目」「鐘の舌」等いづれも紛れなき投出語法の例なるべし。

今少し際立ちたるものにして簡單なるを擧ぐれば、左の如し。

"Grim-*visaged* war."—*Richard III*, Act I. sc. i. l. 9.

"Loud-*throated* war."—Wordsworth, *Address to Kilchurn Castle*.

"Make all our trumpets speak; give them all breath,
Those clamorous harbingers of blood and death."
—*Macbeth*, Act V. sc. vi. ll. 9–10.

"Scylla wept,

And chid her barking waves into attention."—Milton, *Comus*, ll. 257–8.

其他込み入りし例は無盡藏なれど、こゝには只其三四心附きしを述ぶるのみ。Hardy の傑作 *Tess of the D'Urbervilles* の女主人公が Clare に其身の罪を懺悔する節に、無生の器物迄に情なく見ゆる氣色を寫せる邊は全く此語法を適用して、しかも成功せるものなるべし。

"But the complexion even of external things seemed to suffer transmutation as her announcement progressed. The fire in the grate looked impish—demoniacally funny, as if it did not care in the least about her strait. The fender grinned idly, as if it too did not care. The light from the water-bottle was merely engaged in a chromatic problem. All material objects around announced their irresponsibility with terrible iteration."—Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles*, chap. xxxv.

或は新婚の樂しさを花に移して歌へるものを引けば、

"*Godiva*. This is the month of roses: I find them everywhere since my blessed marriage. They, and all other sweet herbs, I know not why, seem to greet me wherever I look at them, as though they knew and expected me."

—Landor, *Imaginary Conversations* (Leofric and Godiva).

或は一たび染みし身の汚れを素馨の花に寄せて歎く乙女もあり、

"If through the garden's flowery tribes I stray,
Where bloom the jasmines that could once allure,
'Hope not to find delight in us,' they say,
'For we are spotless, Jessy; we are pure.'" —Shenstone, *Elegy*, xxvi.

然れども以上の如き投出的解釋は何れも解する當事者の其刻下の心持と相待つて始めて價値を生ずるものにして、獨立してこれに對する時は頗る無意義なるを覺ゆべし。永久の獨立せる「文藝上の眞」は物自身の永久的特性をとらへ是が解釋をなして始めて望み得べきなり。例へば、

"The God of War is drunk with blood;
The earth doth faint and fail;
The stench of blood makes sick the heav'ns;
Ghosts glut the throat of hell!" —Blake, *Gwin, King of Norway*, ll. 93-6.

の如し。この詩句を味はふ爲には先づ「戰」なる特別の觀念を要すべきも、こゝに用ゐる「戰」の特性は殆ど普遍的のもののみなれば、從つて此投出語は其獨立性、前諸例に比し稍大なり。更に左に擧ぐるものの如きに至りては、其妙と妙ならざるとは暫く措き、花の永久的特性を描出し

て、異常の心理態度に毫も關係なきを以て、其效果は獨立にして他のものと相待つの要なく、從つて其價値の變ずること少なし。

"......daffodils,
That come before the swallow dares, and take
The winds of March with beauty; violets dim,
But sweeter than the lids of Juno's eyes
Or Cytherea's breath; pale primroses,
That die unmarried, ere they can behold
Bright Phebus in his strength, ..."
—*The Winter's Tale*, Act IV. sc. iv. ll. 118–24.

"The musk-rose, and the well-attired woodbine,
With cowslips wan that hang the pensive head,
And every flower that sad embroidery wears." —Milton, *Lycidas*, ll. 146-8.

以上の例に於て投出的解釋を受けしものは皆具體的の物體に限られしが、更にこれを推して抽

象的事物に及ぼす時、果して如何程の効果を收め得べきかは、多少の研究に値するところなるべし。元來余は所謂抽象的事物の擬人法に接する度每に、其多くの場合が態とらしく氣取りたるに頗る不快を感じ、延いては此語法を總じて厭ふべきものと斷定するに至れり。然れども飜つて此語法の存在を理論の上より考ふるときは決して怪しむべきことにあらずして、却て文學者が是非共接觸すべき重要なる傾向と認めざるべからず。何故に此法の使用を厭ひ又此方の存在を認識するか、以下數言を費やして此兩面の要旨を述べんとす。

凡そ此種の擬人的投出法の價値は抽象的事物を具體化するにあるも、一方には折角具體的物體より抽出の方法を以て作り出されたる無形の質或は觀念を無理に再び元に捩ぢ戻す傾きなきにあらず。されば此點に於て到底人工的たるの譏りを免れざるべし。これ恰も多年の修養を都會に積みし田舍漢を再び昔の山出しに引き直して、暫らく十年前の氣分に歸れと強ふるが如し、不自然もまた甚しと云ふべし。若し田舍漢を要すとあらば、何故其儘の田舍漢を採用せざるや、何故に田臭を脱却せるものに強ひて昔に歸れと求むるや。香水に薔薇の花より造られしものあり、されども液と化せし香水には最早花の形のあるべき理なし。形なき香水をとり、それに赤き瓣あり、黃なる蕊ありと信ぜしむるは容易の業にあらず。凡そ吾人の觀念は始め具體的物體に起り、漸々人文の發達と共に抽象的概念を得るに至りしものなれば、具體的物體を要する場合には具體的物

體を用ゐれば足る、何ぞ殊更に一旦抽象せられしものの撚りを戻すの要あらんや。加之抽象的言語は、たとへ、これに擬人法を施すとも、其具體の度遂に本來の具體的言語を擬人せる場合に及ばざること明らかなり。「天泣く」と云はば、人は雨降るを見て首肯すべく、「花憂ふ」と云はば、人は先づ風雨になやむ花の風情に思ひを馳すべし。されども "Pity cries" と云はば如何に。憐の情に形なし、色なし、只吾人心裡に一種の觀念あるのみ。故に吾人は此觀念と結ぶに「哭す」なる、具體的物體に屬する動作を以てせざるべからず、其連結の不充分なるや說明を待たず。其證據には未だ頭腦の發達せざる年少者に此種の語法を指示せよ、彼等の多くはこれを了解し得ざるを見るべし。要するに彼等の知力の程度が、如此き不自然なる連絡を敢てするに達せざるが爲めのみ。元來投出語法は物を釋して自己に歸せしむる技にして、其徑路は抽象物より具體物を經て自己に進むものなるを、殊更に此中間の連鎖を缺きて其兩極を結ばんと試みるが如き如何にしても無理なりと云はざるべからず。

然れども抽象的物體に此語法を適用して、左のみ厭味を生ぜざる場合なきにあらず。

(一)他に好方便なき場合、(二)其解釋如何にも適切に感じ得る場合、例へば下の數行の如き、一讀毫も厭味を喚起することなく、遠く小刀細工の域を脱して、其聯想必然的にして、「靜」なるものを形容するに、これ以上の手段なきを讀者に信ぜしむる手際、只成功と賞するの外なし。故に充

分の效果あり。

"The clouds were pure and white as flocks new shorn,
And fresh from the clear brook; sweetly they slept
On the blue fields of heaven, and then there crept
A little noiseless noise among the leaves,
Born of the very sigh that silence heaves."

—Keats, *I stood tip-toe upon a little hill*, ll. 8–12.

"O welcome, pure-eyed Faith, white-handed Hope." —Milton, *Comus*, l. 213.

左に所謂氣取りたる投出法の數例を擧げて此章を閉づべし。凡そ抽象的觀念を好み理窟を愛せしこと、十八世紀文學者の如く甚しきはあらざるべし。彼等は其愛する思想が抽象的にして、文學的材料として頗る不利のものたるを知りながら、徇これを見棄て難く、遂に抽象的言語を具體化する一手段として、これ等に常に大文字を冠し、一見固有名詞の如く見せかくることを案出せり。然れども其技巧は恰も錬金師が鐵を化して金となさんと力めしに似て、豫定の成功は思ひもよらず。小文字を花文字に書き直すは單に手先のこと、花文字になりたればとて無形の言葉は永

久に無形抽象なり。猿が冠を被りて大名に成濟ます事の六づかしげなるに似たり。

"In these deep solitudes and awful cells,
Where heavenly-pensive Contemplation dwells,
And ever-musing Melancholy reigns;
What means this tumult in a Vestal's veins?" —Pope, *Eloisa to Abelard*, ll. 1–4.

"But o'er the twilight groves and dusky caves,
Long-sounding aisles, and intermingled graves,
Black Melancholy sits, and round her throws
A death-like silence, and a dread repose." —*Ibid.*, ll. 163–6.

以上の二例に就いて見るに、第二は其文學的價値に於て、第一に優るところあるが如し。第一の「沈める冥想」「沈思の愁」等は寧ろ疣贅の感なくんばあらず。もと此等の形容詞は其抽象的なる度合殆ど其形容する名詞のそれと異なるところなければなり。反之第二の如く「黑き愁」と云へば、「黑」は名詞よりも一層具體的の性質を傳へ、「愁」を活かしむる點に於て前者に優ること數倍なるべく、殊に"twilight"或は"dusky"等の文字と相呼應して、結局吾人は左程無理なら

ぬ感興を受くるものなり。

"Stillness, with Silence at her back, entered the solitary parlour, and drew their gauzy mantle over my Uncle Toby's head; and Listlessness, with her lax fibre and undirected eye, sat quietly down beside him in his arm-chair."

—L. Sterne, *Tristram Shandy*, Vol. VI. chap. xxxv.

の如きに至りては、Pope の例よりも更に一層口實なきものにして、室が靜かにて Toby が居睡り始めたりと書けば足るものを、徒らに無用の工夫を凝らし、しかも其印象に何等の貢獻するところなきは全くの徒勞なり。兎に角成功と不成功とに論なく、十八世紀の文士が此種の技工に耽りしは下の例にても知り得べし。

"Gigantic Pride, pale Terror, gloomy Care,
And mad Ambition, shall attend her there:
There purple Vengeance bathed in gore retires,
Her weapons blunted, and extinct her fires:
There hateful Envy her own snakes shall feel,
And Persecution mourn her broken wheel:

There Faction roar, Rebellion bite her chain,
And grasping Furies thirst for blood in vain."—Pope, *Windsor Forest*, ll. 415–22.

よくも同一轍の文句をかく迄に厭にもならずに羅列し得たるものなり。勿論「復讐」に"purple"(血の色)は決して不調和にあらず、されども厭味は却て此至極尤も過ぎる邊に存するなるべく、例へば鍍金の如し、親切げにして其實爲にするところあればなり。

凡て投出語法の第一要義は、物體と自己との間に適切なる類似を指示するにあり、其類似は永久的にして常に一見瞭然たるものなるべきなり。左に擧ぐる具體物の擬人法文例を比較すべし。

"The pale stars are gone!
For the sun, their swift shepherd,
To their folds them compelling,
In the depths of the dawn,"—Shelley, *Prometheus Unbound*, Act IV. ll. 1–4.

"And multitudes of dense white fleecy clouds
Were wandering in thick flocks along the mountains
Shepherded by the slow, unwilling wind."—*Ibid*, Act II. sc. i. ll. 145–7.

共に同人の同一の劇より抜き出だせるものなれども、前者は單に一種平凡なる平行的比較を用ゐたるに過ぎず。成程と合點は行けども、到底趣味ある感興を喚起する妙味なし。然るに後者に至りては、雲の重疊せる様、其色合、一々適切なる類似を發揮し得たるものなれば、所謂「文藝上の眞」より見て頗る價値あるものと賞し得べし。

一九〇四年四月發行 *The Quarterly Review* 第三九八號所載の Vernon Lee 氏の『最近美學』と題する論文中「自己の投出」に關して左の記述あり。參考の爲め之を左に譯出す。

「吾人の内的經驗を投出して日常目撃する實在物體に適用する作用を云々するに至りしは、全く近世美學の發見に係るものにして、勿論古來幾多の心理學者、詩人の、時に觸れ、多少意をここに注ぎしもの無きにはあらざりしも、此方面に確然たる議論を試み、適當の命題を樹立し得たるは Lotze を以て嚆矢となす。彼は約五十年前其名著 *Mikrokosmos* 中に述べて曰く、「凡て世の中に、在りと在らゆるものは、吾人の想像力により、皆悉く吾人と多少の接觸を保ち得るものにして、吾人はかくして其等物體の本質を窺ひ識ることを得るなり。而して他物に自己を入り込ましむる可能力の範圍は、必ずしも吾人に類似の生活狀態を營むものに限らるゝものに非ず、軟體動物の如きにも同様の現象を生ずることを得。或時は木に枝の生ひ出づる様を自己に引き直し、或時は建物の部分を人體の部分に當て嵌む、これ卽ち自己を樹木に投出し、建物に投出する實例なり。」（第五巻第二章）」

知るべし吾人が外界に臨むに此態度を以てするは全く吾人の深重なる性癖に出づる事を。從つて其範圍を窮め其由來を探ぐれば遂に一條の哲理に歸着せざるを得ず。たま〳〵此傾向を文學の上に認めて、如上の議論を此傾向の上に建立したるは文學以外に應用しがたきが故にあらずして文學にも亦此趨勢の一端を認め得べしと云ふに過ぎず。卑見を以てすれば Comte が神に對する吾人觀念の發展を敍せるも亦遂に同型の論法に落つ。彼れ思へらく自然界の法則明かならざる時吾人は吾人の意志を外部の活力に附着して其源因を窮め得たりとすと。意志とは自己の一部分にして、之を外界に附與すとは自己の一部分を投出するの義と異なるなし。たゞ彼は神の觀念を打破せんとして同時に其觀念の自然なるを說明せんと試みたるが故に、云ふ所は單に意志の一面に過ぎず。然れども意志について云ひ得べき事は情に於ても云ひ得べく、情に於て云ひ得べき事は、幾分か知に於ても云ひ得べきは當然なり。世の修辭學を說くもの徒らに擬人法の目を設くるにとどまりて、その如何に深く吾人の心理的習癖に本づくを論ぜず。故に一言を附記す。

第二章　投入語法

此章に於て述べんとするは、所謂投出語法と全く其徑路を異にして、自己を解くに物を以てする種類の聯想なり。かく正反對する兩者を等しく文學的手段として併置するは人をして一種の疑問を懷かしむるやも計るべからず。余は投出語法を文學的なりと信ぜしが如く、余亦此投入語法を目して文學的なりと主張せんとするが故に、此兩者が右と左に背馳するにも拘はらず、其目的に於て一致する所以を述べて先づ讀者の疑を解かんとす。

投出法とは自己を投出して他に附着するの意なるは既に述べたるが如し。自己を投出すとせば自己の何物を投出するかの質問に接せざる可からず。情か意か知かの質問に接せざる可からず。之を前章に擧げたる諸例に徵し、又汎く古今の文例に見るに「天哭す」と云ふの類尤も多きに似たり。「星まばたきす」と云ふの類之に次ぐが如し。哭すと云ふはわが情にちかき語なり。まばたきすと云ふはわが動作に似たるの語なり。前編に論述せる文學的材料の言語を以て翻譯すれば、哭すとは人事的材料なり。またゝきすとはわが動作を動作として目する點より見て感覺的材料なり。從つて投出語法とは人事的もしくは感覺的材料を以て他の材料を說明するの義となる。猶狹義に云へば同じく人事的感覺的なるにも關せず同類の材料にて、より多く人を動かすに足るものを求めて前者を說明するの意となる。一層狹義に云へばわれに固有にして又尤も我を動かす事多き情卽ち人事的材料を以てあらゆる他の材料を說明するものを投出語法と稱するも大過なきにちかきが如し。故に正確なる形式を得たるものを標本として論ずれば投出語法とは人事的材料對第一、第三、第四材料の聯想法と認め得べく、之を利用して第四種の如く比較的薄弱なるものに文學的勢力を添ふるの具なり。然るに感覺的材料の優勢なるは前編に述べたるが如し。ある場合に於ては實に人事的材料を凌駕す。今人事的材料すらも他の材料と連結して之を文學的ならしむるに有力なりとすれば感覺的材料のうちにて同樣の用をなすもの多きは論を待たず。從つて吾人は人事的材料對他材料より生ずる聯想中のあるものを選んで之を文學的なりとし之に投出語法の名を與ふると同時に、感覺的材料を本位として之に配するに他を以てし前者をして後者を說明せしむるの便宜を許さゞるを得ず。之を許して一種の形式のもとに纏めたるが卽ち投入語法なり。此故に此兩者は其歸趣に於て相背馳して容れざるが如くなるにも關せず、等しく文學的にして同程度に存在の價値を認めらるべきものとす。而して兩者孰れを擇ぶべきかは時、所の便宜にて決すべしと云ふの外何等の商量を費やすの餘地なきに似たり。たゞし作家性情の癖する所に耽つて一を捨てゝ他を取るを快とするものなきにあらず。こは問題外なり。要するに優勢なる材料を以て微弱なる他を救援するを以て根本義とするが故に隨處に兩者を適用する事猶戰の如くするを可とすべきか。戰ふもの或は騎兵を以て砲兵を掩護し、或は砲兵を以て騎兵を掩護し一に拘泥するなきを上とす。たゞ第四種知的材料の如きに至つては其性質上輜重部兵站部に比すべきものなれば

常に掩護せらるべくして他を掩護する事なし。もし余が說を疑はゞ次の一節を讀まん事を要す。

"God is present by His essence; which, because it is infinite, cannot be contained within the limits of any place; and because He is of an essential purity and spiritual nature, He cannot be undervalued by being supposed present in the places of unnatural uncleanness."—Jeremy Taylor, *Holy Living*, chap. i.

此節を目して超自然的材料と做すも知的材料となすも妨げず。要するに猛烈なる宗教心を有するものゝ外は諷誦一過して之を感得すること極めて稀薄なるべし。然るに讀んで次節に至つて、

"God is everywhere present by His power. He rolls the orbs of heaven with His hand; He fixes the earth with His foot; He guides all the creatures with His eye, and refreshes them with His influence; He makes the powers of hell to shake with His terrors, and binds the devils with His word, and throws them out with His command; and sends the angels on embassies with His decrees."—*Ibid.*

の數行に至つて始めて一樣の材料が投出語法の掩護により著しく優勢となりしを知る。(私かに思ふ。耶蘇教徒が神に人格を附し、Christ を以て神を代表し一見吾人と類似の生物に對するが如き口調を以て祈禱の禮を執行するが如き皆「詩的眞」を發揮せんがためのみ。余は固より其教義の

理否を云々するにあらず、唯其手段が偶然と故意とに論なくよく詩の目的に合致せるを說くのみ。もし此意義を本位として彼を目するとき宗教も亦一つの詩に過ぎず。基督教は宗教改革により其詩的光彩の幾分を失へり。故に宗教改革は開化の趨勢上詩が科學に白旗を揭げたる第一段落と見るを得べく、今後宗教が更に哲學と結び、科學に近づくに從ひ、所謂「文藝上の眞」は「科學上の眞」に接し來りて、遂には詩の滅亡に終ることあるやも計るべからず。)

知的材料は無論、超自然的材料すら他の蔽護によりて始めて活動する事斯の如し。而して其蔽護の任にあたる投出語法は既に述べたるが故に之を反覆せず、投出語法と倂立して存在するべき投入語法を說くが此章の目的なりとす。こゝに余が投入語法と稱するものは、畢竟人類の行爲、狀態の印象を明晰ならしむるため、外物を投入し來るの意味にして、外物を解するに人事的材料を用ゐる投出法と共に其優劣を爭ふ程の重要なる手段なるは以上の所說にてほゞ明かなりと信ず。因つて左に投入語法の數例を擧ぐべし。

"They that stand high have many blasts to shake them."

—*Richard III*, Act I. sc. iii. l. 259.

人が苦悶する樣を喬木風に惱むと解せしものにして、單にこれを人事的材料にて表はさんとすれば到底如此感興を生ぜず、且又如此簡潔なるを得ざるべし。

"And as a willow keeps
A patient watch over the stream that creeps
Windingly by it, so the quiet maid
Held her in peace."—Keats, *Endymion*, Bk. I. ll. 446–9.

心の平らかなるを描くに形なく色なければ、かくの如く感覺的材料をかり來りて始めて如此き印象を生ず。

殊に婦人の容貌を寫す時の如き、敍述長ければ纏まらず、強ひて纏めんとすれば所要の印象を生ずること難し、故に詩人は美人を解釋するに恰好なる感覺的材料を用ゐて、或は花に或は月に、凡て美しき外物に比す、これ卽ち投入法なり。

"Parting they seem'd to tread upon the air,
Twin roses by the zephyr blown apart
Only to meet again more close, and share
The inward fragrance of each other's heart."—Keats, *Isabella*, st. x.

"There was a Woman, *beautiful as morning*."

—Shelley, *Laon and Cythna*, Can. I. st. xvi.

"Be she *fairer than the Day*
Or the flowery meads in May;
If she be not so to me,
What care I how fair she be!"—George Wither, *Fair Virtue*, Sonnet iv.

"Morning" と云ひ "Day" と云ふは極めて漠然たる文字にして、明瞭、精緻、纖細の點に於て、Keats の作例に及ばざること遠し。然れども美人の全體を一字に形容するの點に於て雄大なる投入法たるを失はず。單純にして委曲を悉さゞるの恨なきにあらずと雖ども詳說して散漫に流れ縷述して支離に陷るに比すれば優る事遙かなり。況んや "Day" と云ひ "Morning" と云ふの陳腐なるが如くにして實はよく明眸皓齒の嬋姸たる感をよく言ひ了せたるをや。(單純なる敍方と複雜なる筆致との長短は前編に於ける文學者と科學者との態度を論ずる際に解說したれば煩はしく玆に述べず。)

"He was a lovely Youth! I guess
The panther in the wilderness

Was not so fair as he;
And, when he chose to sport and play,
No *dolphin* ever was so gay
Upon the tropic sea." —Wordsworth, *Ruth*.

青年と豹、海豚との聯想は餘りに妥當のものにもあらざるべし。東洋にて武人を貔貅と名づくるは、其美はしき外形にあらずして、只其勇猛の氣性を象りしものなれば、これと日を同じくして論ずべきにあらず。西洋人はいざ知らず、吾人は此投入法を以て成功せるものとは認めがたかるべし。

"Why, thou *globe of sinful continents*, what a life dost thou lead!"
—2 *Henry IV*, Act II. sc. iv. ll. 309–10.

これは皇太子 Harry が Falstaff に對する言葉なるが、其奇抜にして Falstaff の腹の便々と丸きを形容し得て妙ならずとせず。左の句の如きも其誇大の聯想に思はず笑を催さしむ。

"A highly respectable man as a German,
Who smoked *like a chimney*, and drank like a Merman."
—*Ingoldsby Legends*, *The Lay of St. Odille*.

最後に多少長きに失するの嫌あれども、持續的投入語法の好例を擧げて、此章を終るべし。

"A man is a bubble (said the Greek proverb), which Lucian represents with advantages and its proper circumstances, to this purpose, saying: All the world is a storm, and men rise up in their several generations like bubbles descending from God and the dew of heaven, from a tear and a drop of man, from nature and Providence; and some of these instantly sink into the deluge of their first parent, and are hidden in a sheet of water, having had no other business in the world but to be born, that they might be able to die; others float up and down two or three turns, and suddenly disappear and give their place to others: and they that live longest upon the face of the waters are in perpetual motion, restless and uneasy, and, being crushed with the great drop of a cloud, sink into flatness and a froth; the change not being great, it being hardly possible it should be more a nothing than it was before. (以下省略)"

—Jeremy Taylor, *Holy Dying*, chap. i.

第三章　自己と隔離せる聯想

此章に於て說くところは、己を以て物を解するを主腦とする投出語法にあらず、物を以て己に適應するを眼目とする投入語法にもあらず、全く自己なるものを離れたる外物間の聯想なりとす。この聯想を一團として特に別章を與へて論說するは其效力のしかく顯著なるが爲めにして前二者と全く緣故を絕せる獨立の活動なるが爲にあらず。この聯想を例によりて文學の四種材料によりて說明すれば、感覺的材料を用ゐて感覺的材料を解釋するものを正式の形樣とす。從つて同種の材料中にて彼我の類似を發見するの工夫に過ぎざる故其聯想の比較的容易なるだけ其效果も亦前兩者の如く際立たず。此點より見れば多少不利の點あるが如きも適當なるものに至りては便宜なる文學的手段として遂に作家の閑却する能はざるものなりとす。單に作家に有利なるのみならず吾人が日常交通の際亦大に活用の效を奏しつゝあるを忘るべからず。例へば柿のなき國に生れたる西洋人に實物によらずして柿を說明せんとするとき徒らに植物學上の煩雜なる記述を與ふる代りに寧ろ色形の酷似する「トマトー」を指名して兩者を聯想の圏内に持ち來さば說明の目的は容易に達せらるゝが如し。日常の會話ならぬ古今の詩文に至つては、此方面の聯想意外に豐富にし

て且つ適切なるもの多きに驚ろかざるを得ず。外界の一物を說明するに外界の一物を以てする此手段を用ゐ得て巧ならんが爲めには周圍に紛飛する幾多の現象を拈定して深く其同異を觀察せざるべからず。觀察し了せる多くの材料を山積し分類して秩序正しく腦裏の一簞笥に收めざる可からず。自然の現象を見る事深からざるものは遂に其異同を辨ずる能はず。宇宙の森羅に接する事多からざるものは比較の材料に窮す。文を作るもの往々にして小齋に孤坐し漫然陳籍を涉獵し古人の成句を綴り得て學者の能事了れりとなすものあるが如し。かくては只前人の聯想を踏襲するに止まりて、一字の新機軸すら、それ以上に現はし得ざるべし。漢學者流の氣餤を借りて云へば山川河岳は地の文にして、日月星辰は天の文なり。吾人の文章は此大自然の裡に活躍せん事を要す。從つて文章の素養とは字を識り句を拾ひ章を記するの謂にあらず、此自然の倉庫より巧みに材料を採り來つて之を自家藥籠中のものと鎔化するの手腕を稱するに過ぎず。Tennyson の郊外に出づるや、常に小帖子を携へて朝に夕に目に觸るゝ自然の變化を寫し以て他日の用に資せりと云ふ。R. L. Stevenson は外出の際必ず紙片に、一句二句の斷片的寫生を記るすの習慣ありしと云ふ。かくの如くにして得たる彼等の文字は黴臭き陳句にあらずして生ける自然の面影なり。かく周密なる注意と人知れぬ苦心とより集め獲たる豐富の材料は、やがて彼等の作物を飾り、時に此種の聯想法の形式をとりて現はれたるが故 Tennyson の詩は人の知る如く聯想の美を以て名

高く、Stevenson の文は巧みに讀者を動かす警句に富めり、共に理由なきにあらず。

此種の聯想語法に於て最も注意すべきは、(第一)說明材料が被說明材料よりも具體的に明瞭なるべきこと、(第二)兩者の結合に毫も不自然の痕迹を止むべからざることなり。節を分かちて左に之を例證すべし。

(1) "Was I deceived, or did a sable cloud
Turn forth her silver lining on the night?" —Milton, *Comus*, ll. 221–2.

此聯想は自然の直接研究に出でしものに非ず、只知識的に得手勝手の比較を立てたるに過ぎず。先づ黑雲を一領の衣に見立てるが自然ならぬ一種の約束なり。表は黑色、裏は銀色なりと云ふは此約束に同意したる上にて納得すべき第二の約束なり。而して其銀色を以て月光を現はさんとするは、表はす積り故左樣心得よと云ふ第三の約束なり。約束より出た約束故に讀者は此聯想法に由り、如何にも月が暗き中よりひらりと閃めき出づる光景を此比喩の爲めに一層適切に感ずべき理由なし。此種の結合は四角四面の論法に基づくものにて、單に智慧ある技巧と稱するの外何等の賛辭を呈する能はず。由來我國の和歌、月並の俳諧に在つては如此き聯想法を尊ぶこと頗る甚しく、世人も亦これを以て詩人の本領と考ふること多きが如し。試みに前例をとつて左の一節と比較せば妍醜自から分明ならん。

"And so the tempest scowled away, — and soon
Timidly shining through its skirts of jet,
We saw the rim of the pacific moon,
Like a bright fish entangled in a net,
Flashing its silver sides."

此節は Hood の *A Storm at Hastings* より引用したるものなり。比較の體を得たる點より云へば文學的價値に於て前者に數倍すと云ふも不可なきに似たり。「烏羽玉の裳」は「銀色の裏」と同じく衣服に聯想を求めたるに近けれど、主眼にあらざれば取り出でゝ論ぜず。timidly にとは投出語法にて、蓼太の「五月雨や或夜ひそかに松の月」位の格なれば是亦是非の辯を費やすに及ばず。只余が前例と比較して優劣を定めんとするは橫線を附したる二行にありとす。即ち雲間を洩るゝ月影を、潑剌たる銀鱗が網にかゝりて、閃めくに喩へたるを前例に見るべからざる手際と稱へんとするなり。漁夫の手に引く網の今や水際を離れんとする刹那、鮮魚一躍して其細鱗に銀彩を浴する樣は、まことに皓月が雲の端を滑べり出でゝ、下界に冷やかなる光を洩らすに酷似する所あり。換言すれば網の魚なる感覺材料は、月の光なる同じく感覺的なる材料を助けて其印象を一層明らかに客觀化し得たるものにして、其切實なる固よりかの理窟的假設的聯想の比にあ

らずと云ふべし。

(2)文學的論評の下には殆ど價値なけれども、作者の學問を示す方便として或一派に勢力を有するもの、例へば

"Except they meant to bathe in reeking wounds,
Or memorize another Golgotha,
I cannot tell."—*Macbeth*, Act I. sc. ii. ll. 39–41.

の如し。Golgotha と云へば西洋人が金科玉條と見做す聖書中の故事なれば、其點に於て讀者は之を歡迎すべく、作者も之を使用して懷しく感ぜしならん。然しながら此聯想により誰人の眼底にも「屍の山」を積む樣が果して躍然と映ずべきかの問に至つては容易に即答し能はざるところなるべし。如此きは尙恕するも可なり。只何事にも古典故事を尊重するの結果、其聯想の適否を顧みず只管に自家の博學を示すを目的とする引用(卽ち一種の聯想法)に至つては斷じて之を卻けざるべからず。世間に是等語法の續出する文字を見て流石は文學者なり、才筆なりと稱する者あり。是鰻屋の店先に米俵を積み重ねたるを見て流石に名代の鰻屋なりと嘆賞すると一般にして、褒むる人の目利きにもあらず、褒めらるゝ人の手柄にもあらず。我國に在りて西洋文學に通ずるもの、往々適切ならざる西洋の故事を文中に鏤ばめこれを以て潤飾の具と心得るものあり。潤飾には相違なかるべし。たゞ學者としての潤飾に過ぎず、詩人文士は之が爲めに何等の光彩をも放たず。金製の時計は持主の豐かなるを示し得べしと雖ども、其針の正確を證するに足らざると同理なり。

(3)文學上の價値を有し適當の形容なれども、複雜なるが爲力弱きもの。

"And as a spray of honeysuckle flowers
Brushes across a tired traveller's face
Who shuffles through the deep dew-moistened dust,
On a May evening, in the darkened lanes,
And starts him, that he thinks a ghost went by—
So Hoder brushed by Hermod's side."—Matthew Arnold, *Balder Dead*, I. ll. 230–5.

人が摺れ違ふ樣を忍冬の花云々なる感覺材料にて說明したるものなり。聯想の啻に適切なるのみならず、材料亦頗る詩味に富むが故に大體の上に於て上乘の成功と云はざるべからず。只だ缺點を云へば說明すべき材料が說明さるべきものに比して長きに過ぐるにあり。少なくとも日本人、否日本人の一人なる余に取りては主客を顚倒せるが如き趣なきにあらず。如此き例は評し方の如何によりて頭大尾小、聊か落ち付かぬとも斷案を下すに難からず。然れども西洋の詩家はかゝる

不都合の感を抱かざるものと見え、此種の語法は常に其作品に散見するが如し。惟ふにこは古代希臘の文格より傳統せるものにして、所謂「ホメリツク、シミリ」(Homeric simile) の遺物として今代に生存するにあらざるか。*Iliad* より一例を擧ぐれば、

"As when on the echoing beach the sea-wave lifteth up itself in close array before the driving of the west wind; out on the deep doth it first raise its head, and then breaketh upon the land and belloweth aloud and goeth with arching crest about the promontories, and speweth the foaming brine afar; even so in close array moved the battalions of the Danaans without pause to battle."

—A. Lang, W. Leaf & E. Myers, *The Iliad of Homer*, p. 77.

の如し。元來感覺的材料を用ゐて各種の材料を説明する主意は文學の原理たる事物の具體化に外ならず。故に説明材料の詳密は一見被説明材料の印象を明瞭ならしむるが如きも、或度を過ぐれば到底一目の下に綜合し能はざるに至る。のみならず、よし綜合し得るとするも、綜合し得たる印象は説明材料の印象にして此印象の明かなるにつれて主腦たるべき被説明的材料の印象は壓倒せられて消滅するに至るべし。M. Arnold は殊に此種の語法を嗜みしと見え、*Balder Dead* 第二の下界廻り中に Hermod が Odin の名馬 Sleipner に跨がり九日九夜谷間を廻り、地獄の Giall

河と云ふに來かゝりし時、其橋上に女人立ち塞がりて行く手を遮ぎる節には下の如き複雜なる感覺的材料を説明の具に用ゐたり。

"But, as when cowherds in October drive
Their kine across a snowy mountain pass
To winter pasture on the southern side,
And on the ridge a waggon chokes the way,
Wedged in the snow; then painfully the hinds
With goad and shouting urge their cattle past,
Plunging through deep untrodden banks of snow
To right and left, and warm steam fills the air —
So on the bridge that damsel block'd the way,
And question'd Hermod as he came, and said:"—*Balder Dead*, II. ll. 91–100.

本文は僅かに二行なるを比喩は八行の長きに渉れり。從つて人をしてこは比喩の爲めの比喩にして、本文を説明する爲めの比喩にあらざるかを疑はしむ。説明の材料と見做さず單に獨立せる敍述として牛飼の有樣を想見せば面白き節は無論あるべし。去れども本文に附隨して之を讀めば

徒らに冗漫なりと云はざるべからず。冗漫とは本文に不用の材料を比喩中に濫用するを謂ふ。女の橋上に立ち塞がるを雪道に埋まる車の行手を遮ぎるに比したるはよし。牛飼の鞭を振ひ咽喉を涸らして、牛を追ふは本文の何を説明するや計り知るべからず。説明の材料は多く且つ詳にして被説明の材料は單純にして之に副はざるが故に遂に兩者を對立して比較する讀者の腦裏には却つて混雜を生ずるの恐あり。同人の *Sohrab and Rustum* 中にも亦同様の例あり。

"As when some hunter in the spring hath found
A breeding eagle sitting on her nest,
Upon the craggy isle of a hill-lake,
And pierced her with an arrow as she rose,
And follow'd her to find her where she fell
Far off; — anon her mate comes winging back
From hunting, and a great way off descries
His huddling young left sole; at that, he checks
His pinion, and with short uneasy sweeps
Circles above his eyry, with loud screams
Chiding his mate back to her nest; but she
Lies dying, with the arrow in her side,
In some far stony gorge out of his ken,
A heap of fluttering feathers: never more
Shall the lake glass her, flying over it;
Never the black and dripping precipices
Echo her stormy scream as she sails by: —
As that poor bird flies home, nor knows his loss, —
So Rustum knew not his own loss, but stood
Over his dying son, and knew him not."—ll. 556–75.

Rustum は Sohrab の父なり。單身劍を舞はして吾子を斃して而して其吾子なるを知らず。鷙鳥云々の十八行は無意識に吾子を殺したる Rustum の形容なり。(從つて感覺的材料を用ゐて人事を説明する投入法と見るも差支なし。) 聯想は固より適切なり。去れども前例に就て述べたる非難は一樣に此場合にも應用し得べきは勿論、かく事件の切迫して此感情の高潮に達せる際、急に岐路に入りて悠々たる大比喩に優遊するが如き大國民の襟度は決して吾等日本人の有する所に

あらざるを知る。よし一歩を讓つて此比喩の全部が必要なりとするも其複雜なる遂に日本在來の文學者の企て及ぶ所にあらず。謠曲『攝待』に佐藤の母吾子の死して歸らぬを嘆き、

「舊里を出でし鶴の子の松に歸らぬ淋しさよ」

と云ふ。吾等に取つて鶴の喩の方簡にして却て印象深きを覺ゆ。詮議すれば Rustum と鷲との比較の如き、愛着の目的物を失ふと云ふ共通の點において兩者僅かに接觸するに過ぎず。然るに接觸せざる諸點をとり、しかも非常に精密の筆致を以て之を形容するに至りては、多少閑事業の感なき能はず。讀者もし余が言を疑はゞ下の一例を見て前に擧げたる複雜なるものと比較すべし。

"A rascal bragging slave! the rogue fled from me *like quicksilver*."

—2 *Henry IV*, Act II. sc. iv. ll. 247-8.

語數は至つて少なく單簡の極なるに關はらず、如何にも圓滑にして其捕へ難き樣を目前に見、躍如たらしむるの功恰も一滴の薄荷を舌頭に點ずるが如し。序に云ふ。これは Falstaff が居酒屋にて Pistol と喧嘩する折の臺詞なり。

(4)最後に前段に述べたる自然界に於ての實地研究を經たりと覺ゆるもの一二を擧げて其の與ふる興味の際立ちて鮮明なるを示す。

"He and his brother are like plum-trees that grow crooked over standing-pools; they are rich and o'er-laden with fruit, but none but crows, pies, and caterpillars feed on them."—Webster, *The Duchess of Malfi*, Act I. sc. i.

これは惡黨 Bosola が Ferdinand と Cardinal とに對する評語なり。彼は如何にもして此兄弟の少なからぬ財產を我がものにせんと企つれども、一向に名案なく、さりとて此儘に放置せば他の愚物共に先を越さるゝの患あり。との有樣を池上にさし出でゝ實を結べる梅樹に聯想して形容せるものなり。讀者をして一讀直ちに語るものの位置境遇、兄弟の立脚地等を歷然想ひ起さしむる手際は全く自然直傳の賜物なるが故のみ。

"As a green brand, that is burning at one end, at the other drops,
and hisses with the wind which is escaping:
so from that broken splint, words and blood came forth together:
whereat I let fall the top, and stood like one who is afraid."

—Dante, *Divine Comedy, Inferno*, Can. xiii. ll. 40-5.

の如きは飛び離れたる例にも關せず流石に切實なる聯想法と稱すべし。單に木の幹より聲が出るぞと云へば中々に信ずるものもあらざるべきに、其幹の話し振りは斯の如しと手近の感覺的材料

をとりて之に結合せるを以て、思はず成程と首肯するに至るものなり。生木を燃やす時其一端より涎の如きもの吹き出でゝ一種悲しげなる音を發するは何人も日常目撃するところなれば、此近似の材料を以て木幹より人聲が出ると云ふ殆んど髣髴しがたき所作を形容すればそれだけ效果も著るしと云はざるべからず。

凡そ以上述べ來りし各種聯想語法は文學的技巧の一部に過ぎざること勿論なれども、もし之を委却すれば文學は決して存在し得べからず。凡そ文學的材料は之を使用して更に印象の力を鋭くし、具體の度を增進するに至つて效果愈顯著なりとす。一例を擧ぐれば「曇りたる目」「濕ひたる眼」は共に文學的資格を有せざるにあらず、されども如何に曇り又如何に濕へるかを簡單に然も明瞭に說明せんには、勢ひ聯想法の手段に由るの外なかるべし。

"You cannot see his eyes, — they are two wells
Of liquid love."—Shelley, *Rosalind and Helen*, ll. 1268–9.

"These eyes, like lamps whose wasting oil is spent,
Wax dim, as drawing to their exigent."—1 *Henry VI*, Act II. sc. v. ll. 8–9.

等皆然りとす。或は

"Yet nought but *single darkness* do I find."—Milton, *Comus*, l. 204.

と云へば、面白きは「暗黑」と云ふ漠然たるものに、"single" なる具體的形容詞を附したるにありとせざるべからず。*Richard III* の Anne が Richard の后たるを悲しむ語に曰く、

"I would to God that the inclusive verge
Of golden metal that must round my brow
Were red-hot steel, to sear me to the brain!
Anointed let me be with deadly venom,
And die, ere men can say, God save the queen!"—Act IV. sc. i. ll. 59 63.

これ黃金の王冠と熱火の鐵とを聯想し、即位の聖油と猛烈なる毒藥とを連結したるに過ぎざれども、其說明的材料の具體の度被說明的材料に勝るを以て、その印象を一段と强むるを得。或は Bolingbroke が Flint 城の Richard II に使を馳せて、若し我に對する宣告を取り消し玉はずば、

"I'll use the advantage of my power
And lay the summer's dust with showers of blood."
—*Rich. II*, Act III. sc. iii. ll. 42–3.

と脅せるは兵亂、殺傷の如く漠然たる鈍刀に代ゆるに "lay the summer's dust ……" 云々の具體的髮剃を以てしたるなり。或は靜かなる日、靜かなる晝と云つて事足るべきを下の如く云ひ代ふれば如何。

"It was so calm, that scarce the feathery weed
Sown by some eagle on the topmost stone
Swayed in the air." —Shelley, *Laon and Cythna*, Can. II. st. xvi.

"Not so much life as on a summer's day
Robs not one light seed from the feather'd grass,
But where the dead leaf fell, there did it rest."

—Keats, *Hyperion*, Bk. I. ll. 8–10.

或は小人國の參議員(Lilliputian Committee)が Gulliver の懷中を檢閲する際其手巾を形容して "one great piece of coarse cloth, large enough to be a foot-cloth for your Majesty's chief room of state" と云ひ、更に彼の財布を評して "a net, almost large enough for a fisherman, containing several massy pieces of yellow metal, which, if they be real gold,

must be of immense value" と述べしが如き、皆適宜の聯想を利用して明瞭ならざるものを著しく明瞭化し得たるものなり。

聯想には時に頗る常識を離れたる種類のものなきにあらず、極端に走れば殆ど狂人の囈語と相選ぶなきに至る。昔某あり、時の碩學某科學者に戯れて、Bunsen の近著 *Malleability of Light* を知れりやと問ひしに、其人恥づかしげに未だと答へしと傳ふ。Light とは日光なるべく Malleability とは金屬を打つて延金にする意なり。故に此兩者の間に何等の合理的連結のあり得べき理なし。したがつて Bunsen のかゝる著述をなすべき筈なし。しかれども人間の聯想は頗る放逸なる性質を有するを以て、かゝる大膽なる綜合も倘斯道の大家を瞞着し得たるなり。心理學者 Prof. James 曰く「同一の國語より成立し、文法上の誤りなき時は、全然無意味の文字の集合も咎められずに受け取らるゝこと屢なり」と。誠に聯想の範圍は如此く漠然たるなり。近時出版の *Literary Guillotine* と名くる書物の中に近代の作家を召喚して、法廷の吟味に擬したる滑稽的漫評あり。Hall Caine, Marie Corelli 等皆其弱點に就て法官の判決を受けざるなし。就中かの Henry James (Prof. J. の弟) の其專賣たる "Sententia obscura" (晦澁句法) の特權侵害に對し訴訟を提起したるが、其辯論の一節に "My aim shall be to achieve the centrum of perspicuity with the missile of speech, propelled, as in the case of truth's greatest

protagonists, by the dynamic force of exegetical insistence, e. entuating in unobfuscated concepts"など云ふ理解し難き文字の陳列あり。其聯想の突飛なること驚くべきのみ。嚴密に云へばこゝに此例を引くは妥當にあらずと雖ども唯聯想は時ありて意外の境に其對象を求め、且所謂晦澁と稱せらるゝ文體を詮議すれば其要素の一は必ず聯想法の常規を脱したるに基づくものなることを附言したるに過ぎず。

第四章　滑稽的聯想

此章に於て論ぜんとする聯想法は主に滑稽の趣味となつて文學に現はるゝものにして、其材料の範圍は前三者と毫も異なるところなきも、上述の如く二個の材料を聯結して兩者の間に豫期し得べき共通性を道破したる時文學的價値を生ずるに非ず。意外の共通性により突飛なる綜合を生じたる時始めて其特性を發揚するものなりとす。されば前三章の諸聯想法は共通性を相互に結合する作用を以て其主眼とし、こゝに說く聯想は多少の共通性を利用するの結果、之を通じて思ひも寄らぬ兩者を首尾よく、繫ぎ合せたる手際を目的となすものなり。故に此種の聯想が往々其共通性の適否を深く究めずして、只其非共通性にのみ注意を與ふる事多きは自然の結果と云ふべきのみ。故に前三者にありては、兩者の類似、つとめて深遠にして且永久なるを要したれども、此種にありては、僅かに皮相淺薄なる類似にて事足るのみならず、時には單に文字上の連鎖のみにて尙且多少の興味を喚起し得るものなり。試みに投入語法と此種の語法とを作例により比較すれば、一見して余が說の僞りならぬを知るべし。

"I was about to tell thee:—when my heart,
As wedged with a sigh, would rive in twain,
Lest Hector or my father should perceive me,
I have, *as when the sun doth light a storm,*
Buried this sigh in wrinkle of a smile:
But sorrow that is couch'd in seeming gladness,
Is like that mirth fate turns to sudden sadness."

—*Troilus and Cressida*, Act I. sc. i. ll. 34–40.

の如きは其妙味全く類似性の巧妙なる聯想により成立するものなること分明なれど、

"*Gaunt* am I for the *grave*, *gaunt* as a *grave*,
Whose hollow womb inherits nought but bones."

— *Richard II*, Act II. sc. i. ll. 82–3.

に至りては其聯想全く前者と趣を異にするを見るべし。Gaunt は人の名なり。Gaunt は憔悴の意なり。Gaunt なる姓氏と憔悴とは發音以外に何等の類似性を有せず。今此薄弱なる連鎖を利用して Gaunt なる人物を墳墓と結合せんとす。人は只其意表なるに驚かずんばあらず。意表なる結合に不意を打たれたる後、意表にも關はらず多少の因緣の兩者の間に存在して、其關係の遂に否定しがたきを知るや、驚異の念は俄然として滑稽趣味に變化せざるを得ず。(序に云ふ引用の句は John of Gaunt が臨終の語なれば沙翁は決して之を滑稽的に使用せるにあらず。之を滑稽に解說せるは余の意見に過ぎず。余が此句を以て滑稽的臭味を帶びたりと云ふは眞面目の句として失敗せりと云ふにひとし。)

第一節　口合

この種の聯想中最も簡單なるものは普通に駄洒落と稱し、英語にて "pun" と名づく。其性質上比較的常人の手に乘り易きを以て、少しく滑稽趣味を喜ぶ徒は日常座談の際に之を振り廻して得意なるは吾人の屢々目擊するところなり。Percy 逸話集に見ゆる Hogarth の小話の如きは此種の上乘なるものなり。小話に曰く。

「Hogarth は面白き戲談に至つて興味を有せし人にして、其癖は日常の瑣事に迄現はるゝを

常とせり、或時彼が其友人に送れる晩餐の招待狀の如き其好證と云ふべし。紙面に圓を畫き、其圓の支柱に肉叉と小刀とを使用し、其圓內に招待の文句を認め、其中心に「パイ」(肉饅頭)の畫を描きたり。而して其文句の終りには "η, β, π" の三字を記るしたり。是は希臘の三文字を口合の材料に使用したるものにて "ēta, bēta, pi" 即ち "Eat a bit of pie!" の意なり」

此種の聯想を以て文學的價値なしとするものあり。余と雖ども之を目して最高なる技巧と云はず。然れども一言にして文學的に價値なしと評するは用ゐ易きに馴れて實價以下に之を侮蔑せるものゝ語なりと思ふ。凡そあらゆる聯想は一方に甲あり他方に乙ありて中間に丙なる連鎖なかるべからず。今口合を以て下劣なりとするものゝ說を聽くに多く其非難を中間の丙に置くに似たり。即ち共通性をあらはす要素の皮想的にして兒戲に似たるを物足らずとするもの比々皆是なり。去れども余を以て之を見るに滑稽的聯想に於て重要なるは中間の丙にあらずして反つて兩端に橫はる甲と乙に存す。これ其前章に論じたる聯想法と大に其趣を異にする所以なり。彼等にあつて尤も大切なるは說明材料よりも被說明材料よりも兩者の一路に合してぴたりと動かざる點にあり、比較の切實にして何人も之を拒み能はざるにあり。換言すればうまく說明が出來たか出來ぬかにあり。共通性を示す丙なる要素の堅固にして能く落ち付くが爲なり。滑稽的聯想は然らず。甲を說明するが爲めに乙を使用するにあらず。甲を代表せんが爲めに感じ易き乙を持ち來るにあらず。

従つて其生命は說明せらるべき甲と說明の役に當る乙とが一致せる丙の狀態の如何によつて左右せらるゝ事少なく、寧ろ甲と乙の性質如何によつて其價値を定むるものなり。卽ち甲と乙が殆んど思議しがたき程飛び離れたるが興味にて、此二者をつなぐ丙の性質の如何は左程に重要ならず。從つて丙の性質頗る薄弱なる口合も亦單に丙が薄弱なりとの故を以て輕んずべきにあらず。沙翁は口合の驍將なり。適當の時は無論不適當の際にも之を濫用して憚からず。前に擧げたる Gaunt の例の如きは其一例なり。*Punch* は高尙なる滑稽雜誌として一般の歡迎を受く。しかも逐號に之を檢すれば一の口合なきは稀なるべし。只永久に恐れ入谷の鬼子母神を反覆せざる以上は此種の滑稽も亦優に一利器たるを失はず。例として左に二三を擧ぐ。

"I like your chocolate, good Mistress Fry!
I like your cookery in every way;
I like your Shrove-tide service and supply;
I like to hear your sweet Pandeans play;
I like the pity in your full-brimmed eye;
I like your carriage, and your silken grey,
Your dove-like habits, and your silent preaching;

But I don't like *your Newgatory teaching!*" —Hood, *To Mrs. Fry*, st. xiii.

此例の結句は純然たる洒落にして正式に此種の聯想に屬すべきものなり。首に之を揭げたるは其價値以外に有名なる歷史的緣故を有するが故なり。左に其大略を述ぶべし。一八二五年倫敦にて出版したる書卷のうち無名子の詩集一卷あり。收むるところは十五篇、題して *Odes and Addresses to Great People* と云ふ。題號の示す如く時の大家を咏へるものなり。勿論大家中には當時流行の風船乘或は講談師等ありと知るべし。然るに此無名子の詩を忝うしたる一人に名を Mrs. Fry と呼ぶ「クエーカー」宗の慈善家あり。此女 London の Newgate (古き牢屋) に學校を設けて一般の敎育の利益を受くる能はざる不幸兒に文字を授けつゝありしが故に無名子は此詩を寄せて其事業の無益なるを訓したるなり。(但しこゝに引用せるは其一節に過ぎず。) 時の文豪 Coleridge 集を得て此詩を讀み "Newgatory teaching" の二字に至つて案を拍つて嘆じて思へらく、かくの如く巧みに滑稽の工夫を凝し得るものは其友 C. Lamb を措きて他に一人のあるべき理なしと、卽ち無名子を以て Lamb なりとし直ちに書を裁して彼に送つて曰く。

"*Thursday night*, 10 *o'clock* — No! Charles, it is *you*! I have read them over again, and I understand why you have *anoned* the book. The puns are nine in ten good — many excellent, — the *Newgatory*, transcendent! And then the *exemplum sine exemplo*

of a volume of personalities and contemporaneities without a single line that could inflict the infinitesimal of an unpleasance on any man in his senses — saving and except, perhaps, in the envy addled brain of the despiser of your *Lays*. If not a triumph over him, it is, at least, an *Ovation*. Then moreover and besides (to speak with becoming modesty), excepting my own self, who is there but you who could write the musical lines and stanzas that are intermixed?"

Lamb の返翰に曰く。

"The Odes are, four-fifths, done by Hood — a silentish young man you met at Islington one day, an invalid. The rest are Reynolds's, whose sister Hood has lately married. I have not had a broken finger in them ...... Hood will be gratified, as much as I am, by your mistake."

かく歴史的に著名なる洒落の洒落たる所以を尋ぬれば單にNewgateの1字に歸着す。Newgateの形容詞はNewgatoryにして此形容詞より同音のnugatory（無益の意）を聯想せしめたるが作略なり。從つて兩者の共通物は一定せる字音にして、これにより聯結せられたるは似るべくもあらぬ「牢獄」と「無效」の二つなるが故に一種の興味を感ずるなり。

C. Lamb はこゝに引用せる詩の作者と見誤まらるゝ丈に此點に於ては普通以上の趣味を有したりと覺しく其文中時々此種の聯想を弄ぶ事あり。*Essays of Elia*（？）中に兎（hare）を提げて通り過ぐる人を呼び留めて、"Prithee, friend, is that thy own hair or a wig?" と云へる句ありしやに記憶す。これも共通音にてhareとhairを聯想せしめたること説明を待たずして明かなり。

Falstaff と Prince Henry の問答に曰く

"*Falstaff.* And, I prithee, sweet wag, when thou art king, as, God save thy *grace*, —
majesty I should say, for *grace* thou wilt have none, —
Prince. What! none?
Falstaff. No, by my troth, not so much as will serve to be prologue to an egg and butter." — 1 *Henry IV*, Act I. sc. ii. ll. 17 23.

尊稱に your grace と云ひ、神惠にも grace と云ひ食前の禱詞にも grace と云ふ。此三 grace を字音の媒介によりて結合したるが此會話の妙致ある所なり。只其前者と異なる所は洒落そのものゝ性質もしくは優劣にあらず、之を口にするものゝ性格なり。普通此種の聯想に耽るものは皆其洒落なる事を自覺して好んで才を使ふに過ぎず。吾人が之を聞いて滑稽と感ずるは之を口にす

る人物を滑稽と視るが爲めにあらずして洒落其物を鑑賞するに過ぎず。從つて吾人の洒落に對する感じと洒落を口にする人に對する感じとは全く獨立して相犯さゞるを常とす。然るに今一人ありて或る源因の爲め（無識又は誤解等）洒落を洒落と心付かずして眞面目に放つ事あれば、吾人の洒落に對する滑稽感は直ちに其人物の上に落ち來るが故に單に言語のあやのみにて得る感じよりは數等活躍せざるを得ず。如何となれば此際に於ける滑稽感の目的物は死したる一句にあらずして血あり肉ある具體的の活物なればなり。彼の口にせる滑稽は彼の人格に附着して離るべからざるが故に、彼の滑稽は彼の人格の一部分なりと斷定し得るが故に、此格段なる滑稽の小窓を通して其奥に潜む活躍せる大滑稽を豫想し得るが故に、一句の滑稽は單に一句の滑稽として線香花火の如くに消滅するものにあらず。忽然として人工を脫して天籟の妙音となり、畫龍水を得て一躍天に登るに至る。Falstaff の滑稽の如きは多少之に近し。

又 *Measure for Measure* 中に Abhorson と呼ぶ獄吏 Clown（道化役）と共に囚人 Barnardine を訪ふて彼に最後の覺悟を促す邊に左の如き滑稽問答あり。

“*Barnardine.* [*Within*] A pox o' your throats! Who makes that noise there? What are you?

Clown. Your friends, sir; the hangman. You must be so good, sir, to rise and be put to death.

Barnar. [*Within*] Away, you rogue, away! I am sleepy.

Abhor. Tell him he must awake, and that quickly too.

Clown. Pray, Master Barnardine, *awake till you are executed, and sleep afterwards.*

……………………………………………

Barnar. You rogue, I have been drinking all night; I am not fitted for 't.

Clown. *O, the better, sir; for he that drinks all night and is hanged betimes in the morning may sleep the sounder all the next day.*” —Act IV. sc. iii. ll. 26–50.

こは固より尋常の口合にあらず。單に字音の共通性よりして意義を異にする二個の Sleep を結合せるが主眼の興味にあらず。一般に通ずべき眞理を、通じがたき特別の場合に應用して顧みざる所が此滑稽の眞髓なり。「寐るのは御隨意だが、どうせ寐るなら用事を濟まして寐たら樂でよからう」是は何人にも應用して誤りなき眞理なり。只此場合に於ける用事は普通の用事にあらず。刑壇に上つて首を斬らるゝ用事なり。他の用事ならば氣懸り故まづ片付けてゆるりと寢に就くといふ理もあるべし。首を斬らるゝ用事を濟まして眠れと注文するものは首を斬らるゝ大事件を普通の用事と同一視して顧みざるものなり。故に此滑稽は普通の用事と斬首の用事を單に用事なる

共有性のもとに一括したる無邪氣もしくは無鐵砲なる邊に存す。而して此連鎖は勿論單純なる文字上の技巧にあらず、一種の知的要素と見做し得るが故にこゝに此例をあぐるは當然此類別の下に配すべきが故にあらずして寧ろ前例に附帶して意識的及び無意識的洒落の間に生ずる趣味の差異を示さんが爲なり。Falstaff の場合に於て述べたるが如く此滑稽の價値は Clown 其人の性格如何によつて大に變化あるを見る。之を意識的と解すれば感興は單に言語の上にとゞまるに過ぎず。反之 Clown の頭腦幼稚なるが爲め眞面目に此言を爲して合理と思へるならば吾人の滑稽感は單に文字の上に落つるのみならず彼其物に對して油然として起るの結果彼は滑稽的に趣味ある一人物と化し來るなり。

Sheridan が描ける Mrs. Malaprop の如きは、所謂「無學の識者」として著名なるものなれば、常に此種の口合を無意識に繰り返して、讀者の頤を解く。彼女は他が其言語に誤字多きを指示せるを怒りて曰く、

"There, sir, an attack upon my language! what do you think of that?—an aspersion upon my parts of speech! was ever such a brute! Sure, if I *reprehend* anything in this world it is the use of my oracular tongue, and a nice *derangement* of *epitaphs*!"

—Sheridan, *The Rivals*, Act III. sc. iii.

"Reprehend" は represent, "derangement" は arrangement, "epitaph" は epithet の意なるべし。しかも此誤謬は全く無意識に出づ。從つて興味饒かなり。只本人の無意識なるに關せずかゝる六づかしき言語を操り得るものが、かゝる誤謬を敢てする事ありやとの疑を讀者の心に生ずる位不自然の誤謬なるを以て一方に於て得たる滑稽感は一方に於て打ち消さるゝが如し。吾人[原]もし無教育なる人間の集會する床屋抔にて眞面目に且つ自然なる此種の滑稽を聽く事多し。

口合は聯想の形式に於て必ずしも一定せず。

"*Chief Justice.* Well, God send *the prince a better companion!*

Falstaff. God send *the companion a better prince!*"—2 *Henry IV*, Act I. sc. ii. ll. 223–5.

の如きは稍複雜なるものなり。例は Falstaff の法廷辯論の一節にして、其趣味と稱すべきは一見同一の構造を有する二行が意味に於て全く正反對するにあり。即ち同材料の順序を變じたる丈にて意外に異なれる思想を含ませ得たるを手柄とす。此際に於る連鎖は句の構造竝びに其内容たる文字なるが故に普通の口合よりも複雜なり。かく複雜の度を追ふて此種の聯想を擴張すれば吾人はやがて一種の parody に達するを得べし。

口合 (pun) につきて一言すべきことあり。上述の如く此語法は常に些少の共通性により異種の材料を綜合するものなれば、此些少の共通性を主として、これにより趣味を湧かしめんとすれ

ば全く失敗に終ること屢なり。我國在來の懸け言葉の如きは此に外ならず。懸け言葉は此聯想の本領たる滑稽趣味を利用せず、却て其尤も不得意なる性質を苦役して前三種の諸聯想に代らしめたるものなり。カミなる共通の字音を通じて紙と神を連結したるとき其興味は兩者の相似にあらずして、反つて其差別にあり。然るに「懸け言葉」の作例を閲するに此脆弱なる共通性を利用して却て眞面目に神と紙の類似を説かんとするに似たり。其の不自然にして嫌味多きは無論のみ。「誰が脱ぎすてし藤袴」と云ふ。藤袴と稱する草花と吾人の穿つ袴とは其間に一個の音の似通ふのみ。然るにこれを種に藤袴の草はぬぎ棄てし袴の如しと强ふるは甚だ不自然にして且つ沒趣味なる業にあらずや。針程の言ひ懸りを作つて大金をゆするに似たり。

第二節　頓　才

こゝに説かんとする滑稽聯想は、前節の口合と稍趣を異にして、其連結物は單に字音の助を借らず、內容の意義により、論理的知力の作用を待つて滑稽的興味を喚起するものなり。例へば山頂を深林と心得て登りしに、來て見れば平凡なる麥畠なるに一驚を喫するが如し。全然文學的價値を非認し能はざれども、知的分子の多量なるは、やがて其興味の幾分を殺ぐものと知るべし。吾人は其聯想の器用にして切り拔け方の巧みなるを嘆賞す。英語にこれを Wit と名づく。

"I do love thee so,

That I will shortly send thy soul to heaven." —*Richard III*, Act I. sc. i. ll. 118–9.

と云ふが如きはその好例なり。卽ち「愛」なる內容を樞として思想を一轉すると共に文意は必然の論理に導かれ「故にわれ汝の魂を天國に送らん」との斷案に歸す。其徑路は全く知的にして、所謂三段法に由るものなり。「吾人は愛するものの幸福を欲す」「魂魄天に行くものは幸福なり」「故に余は愛する汝の魂を天に行かしめんとす」然るに「天に行くものは死せざるべからず、故に余汝を殺さざるべからず。」

"*North.* Have you forgot the Duke of Hereford, boy?

Percy. No, my good lord, for that is not forgot

Which ne'er I did remember: to my knowledge,

I never in my life did look on him." —*Richard II*, Act II. sc. iii. ll. 36–9.

興味は忘るゝ、忘れぬと云ふ文字の意義に變化あるを利用して之を聯想するが爲めに生ず。之を說明すれば左の如し。

"not forgot" に二義あり。(1) Remembering=not forgetting=(2) never remembering 是なり。普通は第一を用ゐ、第二は用ゐず。啻に用ゐざるのみならず、かゝる意義のあるべしとさへ思ひつかず。然るに此場合には普通人が期待する(1)をすて、天外より(2)を傭ひ來つて突然として人を

驚ろかしたるなり。驚ろきたる人は同時に其有理なるに服して成程と案を拍つ。従つて此種の趣味を成程趣味といふ。知力に訴へて成程と思ふとき始めて面白味を生ずるが故なり。

"*Anne.* Villain, thou know'st no law of God nor man:
No beast so fierce but knows some touch of pity.
Glos. But I know none, and therefore am no beast."

—*Richard III*, Act I. sc. ii. ll. 70–2.

之を方式化すれば"Every beast knows some touch of pity"なる連結物より

(1) ∴ Those that are without pity are no beasts.

(2) ∴ Man ought to have pity.

の二個の意を生ずること明らかなり。Gloster は第一を取つて他の膽を奪へるに過ぎず。何の故に他の膽を奪へるかは前例に於て說く所と異なるなきを以て略す。

以上諸例は悉く所謂滑稽趣味を第一の目的としたるものとは云ひ難きも、其聯想の突飛なる、或は意外の論理に據り思はざる結論に到達するが如き、皆これ滑稽的特色にして、用方によりて充分其滑稽的本質を發し得るものなり。左に擧ぐる二例を味はふべし。

"The reigning bore at one time in Edinburgh was——: his favourite subject, the

North Pole. It mattered not how far south you began, you found yourself transported to the north pole before you could take breath; no one escaped him. Sydney Smith declared he should invent a slipbutton. Jeffrey fled from him as from the plague, when possible; but one day his arch-tormentor met him in a narrow lane, and began instantly on the north pole. Jeffrey in despair and out of all patience darted past him exclaiming 'D— the north pole!' Sydney Smith met him shortly after, boiling with indignation at Jeffrey's contempt of the north pole. 'Oh, my dear fellow,' said he, 'never mind; no one minds what Jeffrey says, you know; he is a privileged person; he respects nothing, absolutely nothing. Why, you will scarcely believe it, but it is not more than a week ago that *I heard him speak disrespectfully of the equator!*'"

北極は人の知る所、赤道も人の知る所、兩者の關係も亦人の知る所なり。Sydney Smith は此關係を利用して、其一方に附着せる偶然の一時性を容赦なく他方に應用したるが故之を聞くものは其突然なるを驚ろくと同時に其無理ならぬ緣故を首肯せざるを得ず。人のわれを誹謗せる由を聞きて、夏目なる男が憤然たる時ある友之を慰めて、「あの男には誰彼の容赦なく惡口を云ふ癖がある。つい此間、林檎を痛く罵つた。林檎でさへけなす男だから夏目の惡口位は云ふだらう」と

云ふが如し。

"We were all assembled to look at a turtle that had been sent to the house of a friend, when a child of the party stooped down and began eagerly stroking the shell of the turtle. 'Why are you doing that, B—?' said Sydney Smith. 'Oh, to please the turtle.' 'Why, child, you might as well stroke the dome of St. Paul's, to please the Dean and Chapter.'"

物と物との聯想にあらず。二物間に存在する關係と他の二物間に存在する關係の聯想なり。故に之を形式に示せば Shell : turtle :: dome : Dean or Chapter となる。從つて少しく知的に過ぐるの嫌なきにあらざるも聯想されたる關係の類似適切なるが故に頭腦を惱ます事なし。

"Mrs. Jackson called the other day, and spoke of the oppressive heat of last week. 'Heat, Ma'am!' I said; 'it was so dreadful here, that I found there was nothing left for it but *to take off my flesh and sit in my bones*.'"

肉と衣服と共に骨を纏ふ點に於て相似たり、此共通性を楯にとつて、衣服にのみ適應し得る文字を却て肉に迄押し廣げるが興味のある所なり。左したる知的推理を强ふることなきは、聯想の單簡なるが爲めなり。

頓才の知的要素過重の極に達する時は、或は謎となり或は所謂 Conundrum に近きものとなる。之と共に其文學的價値は著しく減退すること論を待たず。一般社會が小智に富み小才を弄し、區區たる眼前の些事に役々して、人事自然に對する熱烈の同情を失ひ、世間を冷評し、何事をも諧謔化せんと欲する時、人事材料にあれ感覺材料にあれ深く探り厚く求めて文學の眞髓を發揮するに途なく、又偉大崇高なる知的分子を認識する事なし。況や宗教的材料に於てをや。かゝる時代に最も稱せらるゝは頓才即ち Wit にして、人は只氣が利きたりと云はるゝを無上の名譽と心得、間拔、野暮等の文字を厭ふ事惡疫よりも甚しきに至る。遂には小指にて人をくすぐる底の文章を作爲して得々たるものを輩出する事あり。かゝる文學は常に都會の產物にして、隣人と一錢の利を爭ひ、人の揚足をとるを以て人生の目的と心得る徒輩の間に發生するものなるを忘るべからず。江戶時代の町人文學の如き其適例なり。かくの如き文學には頓才は一大勢力として珍重せらるゝ事なきにあらざるも、これを外にしては大なる價値なしと云ふも可なり。

第五章　調和法

上述の聯想語法四種のうち前三者は類似をあらはす爲に二個の分子を結合し、第四は類似の連

鎖を通じて非類似のものを聯想するものなり。今此前者を擴張すればこゝに說く調和法となり、後者を布衍すれば次章に論ずべき對置法となる。前述の聯想法のaを說明する爲にbを使用するに反して、此調和法はaの文學的效力を强大ならしむる爲に單にbを配置するものとす。一例を擧ぐれば美人の憂ふる樣を形容して梨花一枝帶雨と云へば梨花を以て美人を解するが故に、投入語法なり。梨花を以て美人を形容するのみならず、梨花を以て美人の代用とせるなり。反之先づ阿嬌の暗愁を敍し次に細雨に惱む梨花を配すれば調和法となる。此場合には一材料が類似の功德によりて他の材料に引き直さるゝにあらずして、賓主の區別あるにも拘はらず兩者竝立の姿を保つものなり。故に前諸聯想法に於ては兩者の一に代ふるに他を以てし、調和法にありては同等或は主賓の關係を以て一に配するに他を以てす。故に調和法を强めて極端に至れば投入投出の諸法に近づくのみか遂には合して一となる事あり。唯、注意すべきは調和に於ては兩者間の類似左迄に精密なるを要せざるにあり。例へば謠本の傍に般若の面を描けば、調和として成立すべきも、其一つを以て他を說明すること能はざるは明らかなり。(前段の諸聯想法及び調和法は讀者の觀察點によりて一より他に移る事あるは勿論也。「花笑ふ」と云ふ一句を擧して念ずれば純然たる投出法なるも、もし長閑なる春の景色の敍景中に點出せられたる一句と觀ずれば一種の調和法に外ならず。)

凡そ文學的材料中最も力弱きは知的、超自然的の二者なれば、これ等を使用する際には勢ひ更に有力なる感覺的、及び人事的の內容を配し全體の興味を大ならしむべきは云ふを待たず。たとひ人事的感覺的材料の骨子たるべき場合といへども、各他種の材料にしてよく相調和するものを加味するは、文學上缺くべからざる一技術と云ふべし。卽ち人事的材料に感覺的材料を配し、感覺的材料に人事的材料を偶すれば、變中に自ら一致を具へ、單調を轉じて多趣ならしむるのみならず、彼等の獨立せる場合よりも遙かに優勢なる情緖を喚起す。此呼吸を辨ずる事なくして徒らに詩興を高めんが爲めに同種の材料を疊積すれば着色濃厚に過ぎて反つて嫌厭の情を釀すに過ぎず。調和法は此呼吸を敎ふるの技なり。かの漢學者の詩文評に情景兼至などあるも、畢竟人事的材料對感覺的材料の調和上に成功せるを賞するに過ぎず。由來我邦人は先天的に自然を愛する傾あるがごとく、古より詩歌美文にして未だ嘗て此調和を度外視したることあるなし。人事の背景には必ず自然あり、自然の前景には必ず人事あるを常とす。泰西の人烟霞の癖に耽る事意外に少なく從つて彼等の作物中此種の調和を必然の要求と認めざるが如き觀あるは、東洋人にとつて注目すべき現象と云はざるべからず。例へば下に引用せる Leonato の述懷を見よ。

"I pray thee, cease thy counsel,
Which falls into mine ears as profitless

As water in a sieve: give not me counsel;
Nor let no comforter delight mine ear
But such a one whose wrongs do suit with mine.
Bring me a father that so loved his child,
Whose joy of her is overwhelm'd like mine,
And bid him speak of *patience*;
Measure his woe the length and breadth of mine
And let it answer every strain for strain,
As thus for thus and such a grief for such,
In every lineament, branch, shape, and form:
If such a one will smile and stroke his beard,
Bid sorrow wag, cry 'hem!' when he should groan,
Patch grief with proverbs, make misfortune drunk
With candle-wasters; bring him yet to me,
And I of him will gather *patience*.

But there is no such man: for, brother, men
Can counsel and speak comfort to that grief
Which they themselves not feel; but, tasting it,
Their counsel turns to passion, which before
Would give preceptial medicine to rage,
Fetter strong madness in a silken thread,
Charm ache with air and agony with words:
No, no; 'tis all men's office to speak *patience*
To those that wring under the load of sorrow,
But no man's virtue nor sufficiency
To be so moral when he shall endure
The like himself. Therefore give me no counsel:
My griefs cry louder than advertisement."

—*Much Ado About Nothing*, Act V. sc. i. ll. 3–32.

これは Hero を不品行なりと誤聞して甚しく憂に沈める Leonato が、其兄 Antonio の忠告に

對する挨拶なり。此一節を讀んで吾人が最も著しき特長と認むるは知的要素の過重なる點にあり。彼の論理的筆法は成程と人を服せしむる力なきにあらず。然れども切實にわが心を動かし、至情のわが感を惹くものなし。要するに述說の詩的ならざるに由る。吾人の嗜好より云へば、旣に詩を以て文を行る以上は、嚴めしき無韻詩にわが容儀を正して讀者に見ゆる以上は、其內容に於ても亦少しく感情的に詩的なるべきを期待せざるを得ず。例へば寺僧の如し。一旦緋衣を纏ひ、法壇に登る時は、時と所に相應なる一種特別の口調を以て時と所に相應なる崇高なる法話を口にするを體を得たりとせざるべからず。大根の話、庄屋の噂ならば、ことさらに緋衣を着け、ことさらに法壇に立つの要なきを見る。詩形は緋衣法壇なり。詩形を以てあらはすは詩想ならざるべからず。徒らに非文學的成分を主として、有力なる第一、二種の材料を配することを怠るは法壇に道を說かずして雜用を談ずると一般なり。これを我が文學に徵するに、古人は固より今人と雖も、如此き場合に際して、人事對自然の配合を閑却することとなし。其極遂に寫實の目的を害して憚からざる事往々にして然り。謠曲文學の如きは非難すべき箇處多きに關せず、此點に於て常に吾人の所期に一致するを見る。例へばかの『藤戶』の仕手が吾子を失へるを悲しむ條りには、「海士のかる藻に住む蟲の我からと。音をこそなかめ世をば實に。何か恨みんもとよりも。因果のめぐる小車の。やたけの人の罪科は。皆報いぞと云ひながら。我子ながらも餘りげに。科もためしも浪

の底に。沈め給ひし御情なさ。申すにつけて便なけれども。御前に參りて候ふなり。」とあり。俊寬が獨り鬼界が島に取り殘されて吾悲運を口說くあたりには「此程は三人一所に有りつるだに。さも怖ろしく。すさまじき。荒磯島にたゞひとり。離れて海士のすて草の浪のもくづのよるべもなくてあられんものか淺ましや。歎くにかひも渚の衡。泣くばかりなる有樣かな云々。」とあり。兩者とも多數の緣語を重ねたる上、意味不明の箇所さへ少からず。然れどもよく人事に配するに感覺的材料を以てし、極めて切實なる自然の風景を點綴して數奇の運命を詩化する點に於て、一種特有の調和を保てるは頗る吾人の興味を惹くに足るものあり。余を以て之を觀るに沙翁の例は知を滿足するの點に於て謠曲の例に優り、謠曲の例は情を動かすの點に於て沙翁に勝るが如し。情を以て人を動かすは不完全ながらも人事感覺の兩材料を借りて幾分の調和を試みたるが慥かに其一源因なるを疑はず。

　思ふに感覺的材料中にあつて自然界の景物が巧みに吾人の情を動かすの事實は洋の東西を問はず等しく是認する所なるべく、英文學に於ても天地の有象に歸依して其美を謳へるものを探れば Chaucer 旣に然り。更に溯れば Beowulf 又然りとす。(Moorman, *The Interpretation of Nature in English Poetry from Beowulf to Shakespeare.* Biese, *The feeling for Nature* を參照せよ)此故にかの自然詩の發達を以て全然近世の現象と解するは決して當を得たるものにあらず。され

ども彼等英人の自然觀は到底我國に於るが如く熱情的にあらず。詩歌は必ず風露鳥虫を材として咏出すべしと逼らるゝにあらず。否多數の人は殆んど自然に對して何等の趣味をも認めざるが如し。嘗て彼地にありし頃雪見に人を誘ひて笑を招きし事あり。月は憐れ深きものと說いて驚ろかれたる折もあり。或時は知人に何故庭中に石を据ゑざるやと問ふて「据ゑてくるる人があるとも、直ちに庭外に運び棄てる覺悟なり」との返答を承はつたる事あり。或時は路傍の松樹を指さして同行者に時價若干と尋ねたるに其男五磅位と答へたりし故日本にては王侯の邸宅を飾るに足るを安きものかなと感じたり。あとにて聞けば五磅とは庭樹としての價ならず、材木としての價なりし由。蘇國に招待を受けて逗留せるは宏壯なる屋敷なり。ある日主人と果園を散步して、樹間の徑路悉く苔蒸せるを看て、よき具合に時代が着きて結構なりと賞めたるに、主人は近きうちに園丁に申し付けて此苔を悉く搔き拂ふ積なりと答へたるを記憶す。是等は固より文學趣味なき人に就いての例なれば之を以て一般を評するは過てりと雖ども、かゝる種類の人が比較的に吾邦より多きは爭ふべからざる事實なるべし。從つて彼國の文學にあらはれたる自然は吾人にとりて多少物足らぬ心地なきにあらず。之に反して吾人は上代よりの習慣性に支配せられて、天地風月を以て文學の八分を構成せらるゝものと信じ、いざ咏歌作文となれば自己に趣味あるとなきとを問はず草露、虫聲、白雲、明月を排列して顧みず。其狀恰も腥坊主が卽座に蛸の足を捨てゝ、法壇に

殊勝氣なる念佛を唱ふるが如し。彼等は只器械的に文學はかくせざる可からざるものと飲み込むが故に、他の方法より生ずる效果を悉く犧牲に供しても徹頭徹尾詩語——衜と云ひ、海士の刈藻と云ひ、配所の月と云ひ——を口にせざれば已む能はざるなり。是東洋人の弊所なり。而して其弊の出づる所を云へば自然を過重したるに由る。從つて自然の色彩を以て調和の配とせざるものは殆んど美文としての價値なきが如くに思惟するは當然なり。此調和なき泰西の文字に對するとき物足らぬ感を生ずるも亦當然なり。

自然を調和の一要素と見傚して東西を比較すれば余の所論は大體に於て誤謬なきを信ず。但し調和の材は斯の如く狹きにあらず。其應用の範圍も亦一句一節に限るにあらず。もし之を布衍すれば各章を通じて一篇の長冊子を貫くに至るべし。例へば小說の作家其作物の興味を高めんが爲め、調和の法を解せずして、同樣の境地を妄りに疊積して顧みざるが如きは明かに此法を破るものなり。卑見によれば Richardson の *Clarissa Harlowe* もしくは *Pamela* の如きは現に此弊に陷るものなり。徒らに情緒の强烈なるを欲して同種の材料（但し此所に云ふ材料は前に擧げたるそれ等より少しく意味を廣くせるものと知るべし）を一卷のうちに集中して無理矢理に同情の淚を讀者より請求せんとするは策の得たるものにあらざるのみか、趣味あるものをして不快の眉をひそめしむるにちかし。人事交涉の際にあつて既に然り、獨り作品の上に於て然らざるを得んや。

而して其根底を探ぐれば遂に調和法を得ざるに因す。Anthony Trollope 其自敍傳中に云へる事あり。

「如何に數多く恐ろしき事件を重ねたればとて、其恐ろし味が只恐ろしと云ふのみにて、作中に活動する人物に直接觸るゝ事なければ、決して悲壯と稱すべからず、且須臾にして人を怖れしむるの力を失するに至る。如此き似而非悲劇的材料を一篇中に蒐集するは毫も困難にあらず。例へば玆に殺害されし婦人ありとせよ、しかも其殺されしは君と同衡しかも君が隣家の出來事なりとせよ、又更に其加害者は其婦人の夫にして、彼等の結婚せしは僅かに一週間前なりとせよ、これに加ふるに彼は其妻を生きながら燒き殺したりとせよ。かくの如くして進まば遂に其材料に窮する事なかるべし。曰く、先妻も同樣の待遇を受けて死せり、曰く、罪人の刑場へ赴くや、彼の唯一の心殘りは第三の妻に同樣の苛責を加へ得ざるにありと叫びたりと。若し此種の材料を羅列して以て小說の能事畢るとせば、天下にこれにまさる愚はあらざるべし。」

Trollope の說く所は固より調和の辯にあらず。然れども、其精神を考ふれば調和を眼中に置かざる弊害を巧みに指摘したるものと云ふも妨なきに似たり。牡丹餅に汁粉をかけ砂糖にて賁詰めたる上金トンにて包みたるが如きを傑作と心得る人あり。故に一言を贅す。

再び一句一節に卽して調和の辯に歸る。詩歌文章の期するところは讀者の感興を喚起するに在り。是前編に述べたる根本義なり。今若し一材料に伴なふ感興不充分ならんか、勢ひ他の材料を附加して其缺を補はざるべからず。然るに同種の材料（一句一節の際と雖ども理論は異なる所なし）の反復に弊多きこと前述の如きを以て、結局感覺的材料（日本人にありては殊に天地間の景物、花鳥、風月）を用ゐて人事的材料を援け、人事を以て感覺的材料に配するの二法は、これを調和法の祕訣とせざるべからず。既に二個以上の材料が綜合して完全なる感興を生じ得るとせば、此處に頗る不思議にして、しかも趣味ある結論に達せざるべからず。完全なりと云へば、$(F+f)+(F'+f')$の$(f+f')$を組織するfとf'とは性質上決して矛盾すべからざるのみならず、互に相救はざるべからず、否或場合に於ては $f+f'=2f$ 或は $=2f'$ の式を得る事あるべし。卽ち調和の目的上、FとF'とは寧ろ其性質の異なるを欲し、fとf'とは出來得る限り類似せん事を要するの義となる。$(f+f')$の調和近似を必要とするに關はらず、$(F+F')$の關係及び接立の理由に至つては左のみ重きを置かざるの義となる。感情の論理（もし云ひ得べくんば）により感情の一致を求むるは大切なれど、認識材料の性質の一致は度外視して可なりとの義となる。換言すれば知的論理は調和の必然的要求にあらずとの命題に逢着するに至る。かの文學中往々意味不明にして而も趣味津々たる作品に遭遇するは全く此理に本づく。其最も著しき例は俳文學に於てこれを見るべし。俳句（は）僅十七字のうちに出來得る限りの文學的內容を壓搾したるが多き故に到底充分に接續の辭を使用

して文字の關係を示す餘裕なく、知的解釋を以てすれば筋の通ぜざるもの頗る多し。されど俳句家が之を誦するのみならず、自から之を作つて怪しまざるは無意識に感情の論理を誤らざるによる。几董の句に「名月や朱雀の鬼神たえて出ず」とあり、これも其一例なるべし。學者往々かくの如き句に對して無理理窟の解釋を試み、もし釋し得ざれば已が學識の輕重を問はるゝが如く恐るゝは笑ふべし。饅頭の眞價は美味なるにあり、其化學的成分の如きは饅頭を味ふものゝ問ふを要せざる所なり。英文學にも時に此種の作例なきにあらず、されども大體に於て理窟の勝ちし國柄なれば多少の知的要素を含むこと論をまたず。今適當の例を擧ぐる能はざるも、

"the King with gathered brow, and lips
Wreathed by long scorn, did inly sneer and frown
With hue like that when some great painter *dips*
His pencil in the gloom of earthquake and eclipse."
—Shelley, *Laon and Cythna*, Can. V. st. xxiii.

の如きは決して理を以て推すべからざる調和の一例となすことを得んか。

"Buried bars in the breakwater
And bubble of the brimming weir.
Body's blood in the breakwater
And a buried body's bier.
Buried bones in the breakwater
And bubble of the brawling weir.
Bitter tears in the breakwater
And a breaking heart to bear."—Rossetti, *Chimes*, st. vi.

に至つては果して調和法によるや否や疑はしきに似たりと雖ども形式に關係を示すべき接續の語なくして好い加減に各詞を連ねたること日本の俳句に似て而も一種の趣を具したるは文字の內容が情緒に於て相戾らざるが爲めなり。調和に關する辯論は略大體をつくしたり。是より作例に移る。

"and Gareth loosed the stone
From off his neck, then in the mere beside
Tumbled it; oilily bubbled up the mere."—Tennyson, *Gareth and Lynette*, ll. 814–6.

此句にて、線を附せし部分が如何によく前後の「青白き波」「半ば死せし日輪」等の文字と調和して相互の價値を高むるかを見よ。

"'Tis thought the king is dead; we will not stay.
The bay-trees in our country are all wither'd
And meteors fright the fixed stars of heaven;
The pale-faced moon looks bloody on the earth."

—*Richard II*, Act II. sc. iv. ll. 7–10

とは人事に景物を配合せるものにして、日本人の尤も喜ぶ所なり。

"Gather ye Rose-buds while ye may,
Old Time is still a flying:
And this same flower that smiles to day,
To morrow will be dying.
……………………
Then be not coy, but use your time;
And while ye may, goe marry:
For having lost but once your prime,
You may for ever tarry."—Herrick, *To the Virgins, to Make Much of Time.*

此調和は其兩分子たる小女と薔薇に對する情緒の一致を得たるのみならず、兩者の性質も亦頗る近似するを以て殆ど投入語法と稱して不可なきものなり。

"The wan moon is setting behind the white wave,
And time is setting with me, Oh!"—Burns, *Open the Door to Me, Oh!*

"Aft hae I rov'd by bonie Doon,
To see the wood-bine twine,
And ilka bird sang o' its love,
And sae did I o' mine."—*Id., The Banks o' Doon.*

此二例の如きも自然を配したる調和として吾人の尤も喜ぶものと云ふを得べし。且其投入法に接近せる點に於て前例に似たり。

"At Aershot, up *leaped* of a sudden the sun,
And against him the cattle stood black every one,
To stare thro' the mist at us galloping past,"

—Browning, *How They Brought the Good News etc.*

のうち "leaped" の一字は、よく三人の騎馬武者が懸命に疾驅する樣に調和し得て巧みなり。

或は

"In the afternoon they came unto a land
In which it seemed always *afternoon*.
All round the coast *the languid air did swoon*,
Breathing like one that hath *a weary dream*.
Full-faced above the valley stood the moon;
And like *a downward smoke*, the slender stream
Along the cliff to *fall and pause and fall* did seem.
A land of streams! some, like a downward smoke,
Slow dropping veils of *thinnest lawn*, did go;
And some thro' wavering lights and shadows broke,
Rolling *a slumbrous sheet of foam* below.
They saw the *gleaming river seaward flow*."—Tennyson, *The Lotos-Eaters*.

と歌ふとき、萬事を忘れて醉生夢死の境に入りし人と此景物とは離るべからざる迄よく調和せる

を覺ゆ。

上述の如く調和法は文學上特殊の動功を有するものなれども、一たび誤つて其配合の自然を失ふ時は、忽ち厭味を生じ、其價値頓に減退すること尚滑稽法の場合と異なるなし。凡そ人の最も詩的なるは思索により、商量により結果を考定するの時にあらずして、眞摯の情に任せて言動する咄嗟の際ならざるべからず。結婚を背景に控へたる見合、登用を目的とせる會談の如きは情を撓め眞を僞るの點に於て詩的ムードを去る事遠きものなり。然れども詩的ムードは必ずしも詩的表現を含まず。所謂意識的工夫を經たるが故に天眞を失つて斧鑿の痕多しと非難するは、讀者(卽ち作者以外のもの)より客觀視してしか思はるゝと云ふ迄にして、深く作家の心に溯りて主觀的糺明を遂ぐべしとの意にあらず。例へば如何に自然に逆らうて用ゐたる言語動作と雖ども聞く人、見るものをして其僞りなきを疑ふの餘地だに生ぜしめざれば彼等は其心裡に立ち入るの必要を認めざるが如く、文學者の技も、技として神に入り自然と合致するときはこれを以て果して不用意に出でたりや、或は苦心經營の結果、こゝに達し得たりやと疑議するは無益の詮索に過ぎず。硯石を愛するものは「眼」によつて之を評價す。眼に自然なると人工なるとあり。一代の名工往往にして眼を摸して自然を凌ぐ。鑑賞家之を品して天成の逸品と上下する所なし。是よく硯を知るものなり。よく文を知るもの亦同一轍に出づ。左に一例を擧げて之を證す。

"The Danube to the Severn gave
The darken'd heart that beat no more;
They laid him by the pleasant shore,
And in the hearing of the wave.

There twice a day the Severn fills;
The salt sea-water passes by,
And hushes half the babbling Wye,
And makes a silence in the hills.

The Wye is hush'd nor moved along,
And hush'd my deepest grief of all,
When fill'd with tears that cannot fall,
I brim with sorrow drowning song.

The tide flows down, the wave again
Is vocal in its wooded walls;
My deeper anguish also falls,
And I can speak a little then."—Tennyson, *In Memoriam.*

余甚だ此數節の風韻を愛す。只其調和法の渾然として些の痕迹なきや否やに至つては少しく疑なき能はず。詩人の心事に至つては固より之を知らず。又之を忖度するの要なし。こゝに痕迹ありや否やと疑ふは此數節の文字にあらはれたる上に就ての議論に過ぎず。詩人は第二及び第三の兩節にて潮兩岸に滿ちて水聲やむの狀を敍して之を自己の胸中に漲る暗愁の口にしがたきに配し、第四に至つて潮漸く退き兩岸水まさに鳴る、すなはち詩人の憂亦收つて少しく語るに堪へたりとなす。余が痕迹なきやと云ふは此一對の配合のいかにも注文通りなるを態とらしく感ずるが爲めなり。(1)"The Wye is hush'd"の hushed を受けてわが憂も亦靜まれりと、景物心情兩者の相似を示せるは、上例中 Burns の"The wan moon ……"中 setting をわれと月とに兼用せるに似たるが如しと雖ども、かれには內的調和あり、これには然らず。即ち潮水云々と憂云々とは一般に同樣の感を生ずるものにあらず、たゞ hush'd なる一字を以て表面上僅かに結合し得たるに過ぎず。(2)一歩を讓つて此兩者の配合其當を得たりとするも、特更に hush'd の一字を撰んで、

此一字を緣に兩者を繫ぐ必要と效力とを認むる能はず。(3)更に進みて後節に所謂潮落ち憂も亦退く云々の聯想的調和に至りては前段に反映して却つて其細工の痕を留めて人をして思はず詩人の摯實なるや否やを疑はしむ。潮上ると云ひ潮退くと云ふ。是自然の結果なり。憂ひて語らず、憂收つて語ると云ふ。亦他奇なきに似たり。然れども前兩者を持ち來つて後兩者に配し雙々對峙せしめて、しかも其自然なるを裝ふとき吾人は其巧みなるを厭ふ。吾人は前一對の配合よりして後一對の配合が必然の結果の如く生れ出でたるが如く欺かるゝを不快に感ずるなり。「潮上る時、吾に憂ある時、岸に聲なく吾に語なし」との偶然なる配合が成立するが故に「潮退く時、憂落つる時、岸に聲ありて、吾に語あり」との配合が必然的結果の如く吾人の知識を無視して詩人より强ひらるゝを淺ましと感ずるなり。

例へば雷大に鳴り、余が不平も亦鳴ると云へば夫迄なり。雷收つて余が不平も亦收まると附くるとき、兩者の間に詩人の作爲せる人工的因果の含まるゝを見る。詩人は此因果を捏造して讀者の詩感を强ふるの權能なきものなり。權能なきのみならず、不用意の際に吾人を欺く程の技術なくして而も吾人を欺かんとするの拙を暴露す。Tennyson の例は多少之に近し。

もし此種の配合を敢てして而も出來得る限り不自然の感を和げんとせば人工的因果を讀者に强ひざるを要す。人工的因果の觀念を去らんとせば「故に」「從つて」等凡て因果に關する接續詞を

廢せざる可からず。單に字面に於て廢するのみならず、意義に於て廢せざる可からず。「故に」「從つて」の觀念が讀者の腦裏に二對の連鎖となつて起らざるを力めざる可からず。雜然として之を陳列し其因果の如きに至つては毫も關知せざる如くせざる可からず。例へば「潮上つて岸に聲あり、吾憂あり寂として語らず。潮落ちて浪に音あり、われ哀歌を唱へんとす」とせば多少理窟の壓制を免かれて讀者に取捨の自由を與ふるが如し。更に之を普通の聯想法に譯して「吾憂は潮の如し、滿つれば音なく、退けば鳴る」とせば、かゝる性質の憂あるを假定して、此特別の性質を帶べる憂を形容するに恰好なる潮を持ち來りたるに過ぎざるを以て毫も不自然を認めず。

要するに調和法に於て重んずべきは道理の脈絡にあらずして情理の脈絡なり。「我樂し飼鳥鳴く。我病む飼鳥なかず」と云はんに、もし中間に一接續詞を下して「故に」と道理の脈絡を附するとき詩家は詩の用を失し、讀者は詩の功を沒す。等しく中間に一接續詞を下して「故に」と情理の脈絡を附するとき、我と鳥とは不可思議なる同情に支配せられて、說明しがたき乾坤の外に相憐むの景狀をつくすに堪へたり。只 Tennyson の前例に至つて詩人に配するものはわれに近き禽鳥にあらずして、吾に遠き潮流なり。理を以て解すれば荒唐なり。情を以て解すれば――余は情を以て解する能はざるが故に之を辯難せるのみ。Shelley の *Sensitive Plant* を讀んで其成功せる點の那邊に存するかを檢し、しかる後余が Tennyson に對する非難を讀まば余の意のある所は

自から分明ならん。

左の一例を論じて此章を終る。

"The sea is calm to-night,
The tide is full, the moon lies fair
Upon the Straits; — on the French coast, the light
Gleams, and is gone; the cliffs of England stand,
Glimmering and vast, out in the tranquil bay.
Come to the window, sweet is the night air!
Only, from the long line of spray
Where the ebb meets the moon-blanch'd sand,
Listen! you hear the *grating roar*
Of pebbles which the waves draw back, and fling,
At their return, up the high strand,
Begin, and cease, and then again begin,
With tremulous cadence slow, and bring

The eternal note of sadness in." —M. Arnold, *Dover Beach*, ll. 1-14.

靜かなる海、滿ち來る潮、明かなる月、穩やかなる入江のうちに獨り磯の小石を嚙む浪の音を聽く。寄せては返し、返しては寄する響を Arnold は永劫にわたる哀痛の音と云ふ。此哀痛の音が四邊の光景に配して調和を保つの意ならば彼が此音を形容して grating roar と云へるは當を失せるに似たり。grating roar とは騷がしき字面なり。落ち付かぬ字面なり。あら／＼しく活動せる字面なり。所謂永劫にわたる哀痛の音を形容して恰好なるや否やは論ぜず。かく殺伐なる音響を蕭寥とも沖融とも平靜とも云ふべき光景中に點出して調和せりと思はゞ余は彼の配合に有する趣味を疑はざるを得ず。然れども所謂永劫の哀音に著るしき讀者の注意を集めて、一意に此音のみに憧憬せしめんが爲めに、ことさらに四圍を穩かにしたりと云はゞ――靜かなる夜のうちに只一つ動くものゝ感じのみを極度に高からしめんが爲めに、烈しき grating roar の文字を用ゐたりと云はゞ、周圍の狀況に調和なき此二字は其調和なき點に於て大いなる效力を有するものとす。讀者は此二字が全節の横はる平地より高く釣り上げられて半空に懸るを見る。余は Arnold の意を知らざるが故に、此二字を如何に處理すべきやを解せず。然れども論じて玆に至れば吾人の要するは常に尋常の調和法のみにあらずして、時には萬綠叢中紅一點的の配合を有利と認めざる可からざるを知る。是に於てか調和法は流れて對置法に入る。

第六章　對置法

同種もしくは類似のｆを偶する技巧を調和法と名づけたり、異種殊に反對のｆを配合する場合を對置法と云ふべし。調和法は第一、二、三種聯想法の變體にして、對置法は第四種聯想法を擴大せるものなるは前に述べたるが如し。第四種聯想法とは、ある共通性の功に由り意外の二物を連結して、其差異を對照するを主眼とするが如く、對置法も亦同様の方法によりて一種の興味を喚起するを以て能事とす。猶數者相互の關係を辯ずれば左の如し。

調和法の對置法に於るは第一、二、三種聯想法の第四聯想法に於けるに似たり。第一、二、三が第四と共に兩素間の共通性を待つて成立するが如く、調和法と對置法も亦極めて接近せるところなきにあらず、否或る意義より云へば後者を以て前者の一局面と見做すさへ不容易にあらず。假りに調和に階段を設くれば、其一端は全然同じき二物の配合にして、他端は全然異なれる二物の連結ならざるべからず。對置は即ち此一端を意味するものにして、云はゞ消極の調和なり。兩者の關係は死と生の如し。一面より論ずれば生と死は隔離せる別物にあらずして、死は生の一變形たるに過ぎず。憂苦も生なり、憤怒も生なり、同様に意識の内容空虚なる時も亦生ならざるべ

からず。恰も $x=a$, $x=b$, etc. の場合に於て、$x=0$ も x の一價格なること疑なきが如し。對置の場合亦同じ、a a は重複の配合にして、a b は最も密接せる配合なり。下つて a c, a d, a e 等より終に a z に至つて皆一種の調和ならざるなし。而して對置法は此極端の調和に過ぎず。此故に對置法と調和法とは其間に顯著なる境界あるにもかゝはらず、根本に溯れば其區分頗る曖昧たるものあるを免れず。

かくして對置法は其形式に於て調和法の一變體と見做すを妨げずと雖ども其性質より論ずれば積消兩極の配合を本旨とするが故に自然の結果として所謂調和を破ること勿論なり。前章に於て調和の必要を説きたる余が今こゝに此調和を破るべき對置法を提げ來りて、文學上必須の具なりと論ずるは、恰も朝に活人を主張し、夕に殺人を呼號するに似て一見矛盾の觀なきにあらず。去れども下に詳述する論旨を通讀せば此兩者が結果に於て互に相排擠すべきものにあらざるを知るに足らん。凡そ對置法に三種あり。第一種は a のｆを和ぐるに b のｆを以てするもの、第二種は對置の結果(即ち感興)自から調和の結果と一致するもの、第三種は前述第四聯想法に似て、多少の滑稽趣味を帶ぶるもの、是なり。かりに第一を緩勢法、第二を強勢法、第三を不對法と名く。

第一節　緩勢法

人事天然兩界に通じて緩勢の必要は何人も疑ふ能はざるところなり。例へば醒覺に對する睡眠

の如し。意識の活動劇しき醒覺の狀態は二六時中にわたつて堪へ難きを以て、自然はこれに睡眠を配して外界の刺激を緩くす。例へば蒲燒に對する漬物の如し。鰻魚は最も脂肪に富む濃厚なる食物なるを以て之を和ぐるに清新なる漬物を用ゆ。鰻店の漬物程工夫を凝らせるは稀に見る所、以て此邊の消息を知るべし。西洋料理を常食とする洋人は食後の果物を缺くべからざる副食物と心得る如し。是亦自然の命ずる緩勢法に從ふに過ぎず。文學に於る緩勢法も亦此自然の要求に應じて成立す。長へに泣き、長へに怒るは吾人の堪ふる能はざる所、わが能力を緊張して適宜の度を超え、苦痛漸く意識の頂點に達せんとする時、作家時に一服の清涼劑を投じて人をして苦悶裏に蘇生せしむ。昧者は徒らに屋上屋を架し跼蹐して吾人の泣かん事を要し、吾人の怒らん事を要し、些の餘裕あるなし。單に缺々として自から忙殺せらるゝのみならず、死に至つて遂に自然を解せず。往々失敗の劣策を奉じて、人の服せざるを怪しむ。是世に迂なるものにして、兼て文に迂なるものなり。かの小說の主趣に伴つて幾多の閑話を插むは此自然の目的に達せんが爲めなり。或は話頭を二三にして甲乙五に操るも亦此大法に基づく。釣者糸を引く事急且直なれば糸切れ魚逃る。世相亦然り、文章亦然り。

緩和法は多少の面積中に在つて始めて必要を生ずるが故に、其適例を一語一句の短文に求むる事難し。故に例を長篇にとる。Scott の作れる *Bride of Lammermoor* は男女の相思を敍す。戀愛の不成立を敍す。無慘の最後を敍す。大體に於て極めて酸鼻の悲劇なり。是に於てか作者は一個の滑稽人物を拉し來つて所々に之を點出す。此一人物を得て全篇の緩和的分子は成る。緩和的分子成つて讀者の興味に窘窮切迫の不安なし。更に一例を加ふ。沙翁の *Macbeth* は、特に此法を利用して滿幅の凄氣を一髮の危きに救へり。沙翁は冒頭より一群の妖魔を雇ひ來つて首に全篇の定音（キーノート）を拈出したる後、腥風に繼ぐに暗雨を以てし、鬼氣に加ふるに燐火を以てし、しきりに魑魅の影を紙上に躍らして讀者の膽を奪ふ事一再ならず。遂に彼等をして送迎に動心し、去來に驚魄し畏怖の念一歩を超ゆる能はざるに至らしめて爾時俄然として片碧の淨空を天の一方に現出し、一脈の和氣を忙中に投入せり。讀者の神是に於てか漸く下りて、始めて瞬時の安きを得。讀者左の一節の如何に和怡の氣に充つるかを思へ。而して前節の如何に暗澹たるかを思へ。更に後段の如何に怪光陸離たるかを思へ、鬱血淋漓たるを思へ。もし此一節をかゝば吾人はまさに其毒氣の漲るに堪へず半途にして卷を掩ふて他を語らんとす。

"*Duncan.* This castle hath a pleasant seat; the air
Nimbly and sweetly recommends itself
Unto our gentle senses.
Banquo. This guest of summer,

The temple-haunting martlet, does approve,
By his loved mansionry, that the heaven's breath
Smells wooingly here: no jutty, frieze,
Buttress, nor coign of vantage, but this bird
Hath made his pendent bed and procreant cradle:
Where they most breed and haunt, I have observed,
The air is delicate."—*Macbeth*, Act I. sc. vi. ll. 1–11.

第二節　强勢法

强勢法とはaを緩和せしむるにbを以てするものにあらず、新たにbなる材料を加へて、aの效果を大ならしむるものなり。卽ち其對置法の一種なるは前節に說明せる緩和法と異なるところなけれども、着眼點の差異により如此く分類の必要を生ず。着眼點の差とは如何、先づbがaに及ぼす影響（卽ちaのfよりbのf'を差引ける結果）として對置を目する時緩和法となり、更にa、bの有するf、f'を獨立せるものとして對置を目する時强勢法となる。如何となれば此場合に於てaは文學的に發展して2fとなり、bも同樣2f'と變化すればなり。卽ち(f−f')に非ずして、fがf'あるが故に2fとなり、f'にfあるが故に2f'となるものなり。而して其結果に於て期せずして調

和法に酷似するに至る。之を食物に喩ふ。菜蔬は食の粗なるものなり。然れども之を或時或所に置くとき粗なるもの突然として大牢と價を等ふす。終日田にあり、鋤を肩にして苦勞す。家に歸りて膳につく。或時或所とは之を謂ふのみ。對置の强勢法はaの前にbを配してbをして或時或所の用をつくさしむるを謂ふ。普通のaは遂にaにして之を如何ともする能はず、一朝之にbを對置するときaの價は咄嗟のうちに騰上す。是强勢法の對置なるにも關せず、調和法と其歸を同じくする所以なり。魚は食の美なるものなり。熊掌も食の美なるものなり。魚に加ふるに熊掌を以てして、兩者の相乘より來る快味を貪る。是調和法に似たり。强勢法の變價は配合物の加算を待つて始めて其目的を達するにあらず。前者の性質を後者の上に反映せしめて後者の素質を貫からしむ。方法の異なるは云ふを須ひず、結果の優劣も論ずる所にあらず、只其目的とする所は兩者其向背を一にす。畫を解するものは知らん。一點の白に著るしく視線を集めんが爲めには白其ものを改むるか、白の周圍を改むるかの二法あるのみ。而して二法共に其結果に於て揆を一にするは人の知る所なり。白上に白を加へて益其色を淸くせんとするの方法は調和法に類す。周圍に暗色を重ねて在來の白を元の如く放棄するにも關はらず、暗中に的皪と異彩を放たしむるは强勢法に似たり。

或は强勢法となり、或は緩和法となるは只着眼の差にありと說けるも亦例を以て容易に辯明す

べし。こゝに百金ありて之を貧人に給與するとせよ。此百金は緩和の目的を達すると同時に强勢の主意に適へり。貧者此百金を以て其窮乏を救ひ、其苦痛を慰め得たるの點より見れば緩和に外ならず。貧者飢渇に瀕して此百金を視る事常人の萬金を視るが如くなる點より察すれば百金の價は刻下に萬金と化したるが故强勢に外ならず。かくの如く兩者の差違は單に觀察點の差違より起るに過ぎざる事あるにも關はらず、一旦觀察點を異にしたる以上は其喚起する情緒は度に於て類に於て各顯著の特色あるを以てこゝに此節を分つ。以下例に移る。

"Go thou to Richmond, and good fortune guide thee! [*to Dorset*]
Go thou to Richard, and good angels guard thee! [*to Anne*]
Go thou to sanctuary, and good thoughts possess thee! [*to Q. Elisabeth*]
I to my grave, where peace and rest lie with me!
Eighty odd years of sorrow have I seen,
And each hour's joy wreck'd with a week of teen."

—*Richard III*, Act IV. sc. i. ll. 92–7.

是自然の對置なり。三四の傍人を傭ふて殊更に自己の境遇を反襯せしめたるにあらず。傍人に語るの語次われに及んで始めて映帶の妙を生じ最後の一句を振はしむ。Dickens の Little Nell

を描くや又同樣の筆致による。

"But all that night, waking or in my sleep, the same thoughts recurred, and the same images retained possession of my brain. I had, ever before me, the old dark murky rooms—the gaunt suits of mail with their ghostly silent air—the faces all awry, grinning from wood and stone—the dust, and rust, and worm that lives in wood—and alone in the midst of all this lumber and decay and ugly age, the beautiful child in her gentle slumber, smiling through her light and sunny dreams."

—Dickens, *The Old Curiosity Shop*, chap. i.

古き室と、古き器と、塵と、虫と、五彩剝落の暗き中に美くしき Nell と美くしき Nell の夢とを置く。地上に金を點ずるが如し。Eliot が Tina を寫すに用ゐたる對置に至つては天下の名文なり。曰く。

"In this way Tina wore out the long hours of the windy moonlight, till at last, with weary aching limbs, she lay down in bed again, and slept from mere exhaustion.

While this poor little heart was being bruised with a weight too heavy for it, Nature was holding on her calm inexorable way, in unmoved and terrible beauty. The stars

were rushing in their eternal courses; the tides swelled to the level of the last expectant weed; the sun was making brilliant day to busy nations on the other side of the swift earth. The stream of human thought and deed was hurrying and broadening onward. The astronomer was at his telescope; the great ships were labouring over the waves; the toiling eagerness of commerce, the fierce spirit of revolution, were only ebbing in brief rest; and sleepless statesmen were dreading the possible crisis of the morrow. What were our little Tina and her trouble in this mighty torrent, rushing from one awful unknown to another? Lighter than the smallest centre of quivering life in the water-drop, hidden and uncared for as the pulse of anguish in the breast of the tiniest bird that has fluttered down to its nest with the long-sought food, and has found the nest torn and empty."—Eliot, *Scenes of Clerical Life, Mr. Gilfil's Love-Story*, chap. v.

Shelley の *Stanzas written in Dejection, near Naples* 或は Wordsworth の *The Leech-Gatherer* の如きは全く此法を用ゐて一篇を構成するものと云ふも不可なきが如し。只其巧拙に至つては同じからず。Wordsworth は

"The birds are singing in the distant woods;

Over his own sweet voice the Stock-dove broods;
The Jay makes answer as the Magpie chatters;
And all the air is filled with pleasant noise of waters."

—*The Leech-Gatherer*, ll. 4-7.

と首に樂しき自然を叙し後半に至つて始めて "I saw a Man before me unawares: The oldest man he seemed that ever wore grey hairs." (ll. 55-6) と孤客を點綴して兩者の對置を試みたり。されども中間種々の主觀的感慨或は理窟的教訓等を挿入するが故對置の功を沒せるに近し。蓋し彼は突飛なる對置を避けんとせるものの如く、對置の兩材料間を繋ぐに一種の感想を以てして暗に甲より乙に移るの地歩を作る。これ彼の用意の深き所にして實は彼の失敗せる點なりとす。對置は突然なるを要す。突然にして始めて強勢の用をなす。徐々に歩を移して極より極に行くとき、兩極の差は一時に眼を射らざるを以て吾人は遂に其反照を看過するに至る。左の數行の如きは對置法より論ずれば啻に無效なるのみならず却つて有害なりとす。

"But, as it sometimes chanceth, from the might
Of joy in minds that can no further go,
As high as we have mounted in delight

In our dejection do we sink as low."—*Ibid.*, ll. 22–5.

Shelley に至りては、全くこれに反す。兩材の間に些の連鎖を用ゐず。甲より乙に移ること恰も光明の大空より落下して急に暗窖中に入るが如し。從つて其對置より生ずる感興亦極めて顯著なりとす。

"The sun is warm, the sky is clear,
  The waves are dancing fast and bright,
Blue isles and snowy mountains wear
  The purple noon's transparent might,
  The breath of the moist earth is light,
Around its unexpanded buds;
  Like many a voice of one delight,
The winds, the birds, the ocean floods,
The City's voice itself is soft like Solitude's."

—*Stanzas written in Dejection, near Naples*, st. i.

優麗溫潤の景を敍してこゝに至るや突然 "did any heart now share in my emotion" なる

一轉語を下して直ちにわが失意の抒情に入るが故に

"Alas! I have nor hope nor health,
  Nor peace within nor calm around,
Nor that content surpassing wealth
  The sage in meditation found,
  And walked with inward glory crowned—
Nor fame, nor power, nor love, nor leisure.
  Others I see whom these surround—
Smiling they live, and call life pleasure;—
To me that cup has been dealt in another measure."—*Ibid.*, st. iii.

の一節は倏ち平地を拔いて百尺の高きに崛起するが如き感を生ず。有名なる Burns の

"Ye banks and braes o' bonnie Doon,
  How can ye bloom sae fair!
How can ye chant, ye little birds,
  And I sae fu' o' care!

Thou'll break my heart, thou bonnie bird,
  That sings upon the bough;
Thou minds me o' the happy days
  When my fause Luve was true."

の如きまた同種の對置法を用ゐて天籟の妙音を成すに似たり。更に最後の一例を見よ。

"He goes through shrubby walks these friends among,
Love in their looks and honour on the tongue;
Nay, there's a charm beyond what nature shows,
The bloom is softer and more sweetly glows;—
Pierced by no crime, and urged by no desire
For more than true and honest hearts require,
They feel the calm delight, and thus proceed
Through the green lane—then linger in the mead—
Stray o'er the heath in all its purple bloom—

And pluck the blossom where the wild bees hum;
Then through the broomy bound with ease they pass,
And press the sandy sheep-walk's slender grass,
Where dwarfish flowers among the gorse are spread,
And the lamb browses by the linnet's bed;
Then 'cross the bounding brook they make their way
O'er its rough bridge—and there behold the bay!—
The ocean smiling to the fervid sun—
The waves that faintly fall and slowly run—
The ships at distance and the boats at hand;
And now they walk upon the sea side sand,
Counting the number and what kind they be,
Ships softly sinking in the sleepy sea;
Now arm in arm, now parted, they behold
The glitt'ring waters on the shingles roll'd;

The timid girls, half dreading their design,
Dip the small foot in the retarded brine,
And search for crimson weeds, which spreading flow,
Or lie like pictures on the sand below;
With all those bright red pebbles that the sun
Through the small waves so softly shines upon;
And those live lucid jellies which the eye
Delights to trace as they swim glitt'ring by:
Pearl-shells and rubied star-fish they admire,
And will arrange above the parlour-fire,—
Tokens of bliss!—'Oh! horrible! a wave
Roars as it rises—save me, Edward! save!'
She cries—Alas! the watchman on his way
Calls and lets in—truth, terror, and the day!"

—Crabbe, *The Borough*, Letter xxiii.

此對置の主材は最後の二行に過ぎずして他の三四十行は此主材が自己の價値を高めんが爲め頭上に戴くと見て可なり。過去の順境を以て現時の窮態に配するが故に、過去の行樂を說く事愈詳にして、目前の憂愁を刻畫する事愈深し。山に遊んで興限りなきが故に野に遊ぶ。野に遊んで歡極まらず遂に水に遊ぶ。砂暖かに、波淸き所、佳人と手を携へて貝を品し、藻を評す。忽ち高浪の至るあり。佳人叫んで郎君われを救へと云ふに驚ろいて眼を開けば、佳人と思へるは獄吏の警護の聲にして、身は囚房の裡に坐して徒らに一日の命を長くせるのみ。結句僅かに二行に過ぎずと雖ども截然と明暗の二境を劃して、筋斗を打して一より他に墜下するが故に人を動かす事特に深きを覺ゆ。

附　假對法

世間此法を以て尋常一様の對置と認むるもの多し。之を檢するに其實然らず。形似を以てすれば前諸節と略其步趨を同うすと雖ども少しく心理的に解剖すれば$(f-f')$なる緩和法にもあらず、また$2f$或は$2f'$なる强勢法にもあらず、畢竟其喚起する結果は調和法の場合に於けると異なるなく、公式を以て之を示せば$(f+f')$と見做すを得べし。對置にして、しかも對置の實を有せざるが故に名づけて假對法と稱す。かの *Macbeth* の門衞の場の如きは其適例とするに足らんか。門衞の語は固より滑稽を帶ぶ。而して弑逆の血未だ乾かざる時に登場し來る。故に其性質より見るも配合よ

り見るも對置なり。對置なるに拘はらず其結果を解剖するに固より緩和法にあらず、又純然たる强勢法にあらず。之を論じ得て釋然たる時假對法は自から分明なり。之を論ずるに先つて先づ門衛の語を引用す。

"Here's a knocking indeed! If a man were porter of hell-gate, he should have old turning the key. [*Knocking within.*] Knock, knock, knock! Who's there, i' the name of Beelzebub? Here's a farmer, that hanged himself on the expectation of plenty: come in time; have napkins enow about you; here you'll sweat for 't. [*Knocking within.*] Knock, knock! Who's there, in the other devil's name? Faith, here's an equivocator, that could swear in both the scales against either scale; who committed treason enough for God's sake, yet could not equivocate to heaven: O, come in, equivocator. [*Knocking within.*] Knock, knock, knock! Who's there? Faith, here's an English tailor come hither, for stealing out of a French hose: come in, tailor; here you may roast your goose. [*Knocking within.*] Knock, knock; never at quiet! What are you? But this place is too cold for hell. I'll devil-porter it no further: I had thought to have let in some of all professions that go the primrose way to the everlasting bonfire. [*Knocking within.*] Anon, anon! I pray you, remember the porter." —Act II. sc. iii. ll. 1–25.

諸家の此節を評する事區々にして一ならず。或は之を以て全然後人の僞作にして沙翁の關知せざる所とす。(Coleridge の說) 若し此說を眞なりとすれば評家遂に一言を其間に插むの餘地なし。番卒の冗語を目して依然沙翁の筆になると主張するものゝうちにてわが意を得たりと思ふは Hales と Clarke の意見なり。Clarke 云ふ。門衛の獨白は對置にして調和せるものなりと。簡にして要を得たりと云ふべし。彼の所謂對置と調和とは果して余が玆に用ゐる如き意義なるや否やを審にせずと雖ども普通の見解よりして余が見地を去る遠からざるを知る。殺人の腥血に次ぐに醉漢の囈語を以てするは明かに對置にして、しかも此囈語が前段の鬼氣を融和し得ざるが故に緩和法にあらず。或は前段の鬼氣を映帶して此囈語が囈語としての滑稽的價値を高めざるが故に强勢法にもあらず。要するに此一段の狂語は前を顧み後へを望んで四邊の光景に痛切なる色彩を添ふるの功あるが故に調和の用を爲すに過ぎず。四邊の光景とは暗澹として陰鬱なる空氣を云ふ。此空氣中に點綴せられたる數行の諧謔は、諧謔の容姿を具へたるにも關はらず、其風神より云へば暗澹に趣を添へ陰鬱に味を附する一種の調和劑に外ならず。余は此事實を證左として出立す。もし此事實を否定するものあらば根底に於て余と感受的能力を異にするが故に別に論辯を要せず。

現象は視聽に訴ふるを以て終局の目的とするものにあらず。吾人の頭腦は視聽を經て認識せる

諸現象に一種の解釋を附せずんば已まざるものなり。解釋とは視覺聽覺以外にある意義を此現象に認めたるの謂にして、此現象が吾人の腦裏にもたらし來る內部の消息に過ぎず。此消息を得たるものは單に世相を觀察したるのみならず、又實に實相を看破したるものなり。實相とは宗教家の所謂絕對（もし絕對あらば）のみにあらず。老若男女各其分に應じて横解し、竪解し、以て其眞を得たりとなす。而して其解釋のしかく個々なるは同一現象の個々に彼等を動かすが爲めにあらずして此同一現象を視る着眼點の人によりて個々なるにあり。此着眼點の個々なるを更に溯れば經驗の個々なるに歸着す。甲の經驗は乙と同じからずして、aなる現象をかく着眼し、かく解釋せよと命じ、乙の經驗は甲と異にして、aなる現象をかく着眼し、かく解釋せよと命ずるが故に、吾人の現象に對する解釋は遂に吾人が經驗より得たる惰性によつて支配せらるゝと云ふも不可なし。文章を讀むは猶世相を觀ずるが如し。一字一劃の表面に浮き上がる字義を會得して已むにとどまらず、時に惰性の要求に逼られて、自然と馴致せる着眼より此一字一劃を透徹して、其內面の意義を發現せんと欲す。或は之に內面の別生涯を附與せんと欲す。番卒の狂語の諧謔に陷れるは先に屢述べたるが如し。去れども諧謔は字面に露臥せる尋常の意義に過ぎず。吾人は此劇を讀んで此獨白に至るの間に於て冥々の裡既に牢たる着眼點を養へり。此着眼點を得たる吾人はかく馴致されたる惰性により劇中の事件を大小一樣に解釋し去らんとす。而して此場合に於る惰性と

は悽愴の氣、畏怖の念に外ならず。悽愴の氣に居り、畏怖の念に住するものが此諧謔に接したる時、此諧謔の表面に露出せる字義を見て、字義の儘に解釋すべきか、又は惰性の命ずる所に從つて內部の消息を求むべきか。もし內部の消息を求むるとせば滑稽の裏に何物を點ずべきか。點じ得たる物は悽愴の氣畏怖の念ならざる可きか。

着眼點によりて生ずる解釋の差違のうちにて尤も普通なるは正意反意の兩面なり。正意に解するものは烏を以て烏とし、反意に解するものは烏を以て鷺とす。兩者の色に於てしかく表裏するにも關せず、一を擧すれば他は既に暗示となつて指頭に粘し來るは、彼等の性質が二極に偏在して彼是相反撥するの力强きによる。此故に市井の俗兒常に此法を用ゐて他を揶揄するの具とす。揶揄するとは他をして其着眼點の一ならざるに想到せしめて、其解釋の兩途に彷徨せしむるの謂に過ぎず。かくの如きは會以て流俗の言語にこの兩面解釋を容るゝの餘地あるを示すと共に彼等の解釋は多く此方向に傾瀉し來るを證して餘りあり。番卒の科白は正意よりすれば明かに滑稽なり。然れども反意に其義を酌めば滑稽の對極に潛む一團の情緒に過ぎず。此情緒のうちに鬼氣のそれを含むは云ふを待たず。而して其鬼氣は全劇を貫いて讀者を包圍する精神に外ならざるを以て、突如として番卒の科白を點ずる時、彼等は正意に之を解釋せざるのみか、其反意を探らんとする暇さへなきに、全局の精神は彼等を驅りて此滑稽を凄きもの、腥きもの、怖しきものと感ぜ

しむるに至る。

正反兩解の辯を以て此論を行るに際して、吾人は狂人の言語に於て尤も有力なる證左を認めずんばあらず。大抵狂人の口にする所は理路なく、秩序なく、不規、突梯にして要領を得ざるもの多し。之を正意に解せんか滑稽に墮ちざるもの蓋し稀ならん。之を反意に釋かんか暗涙消魂の趣を帶びざるはあらず。曾て英京の小劇場にて俳優の Ophelia を演ずるを觀る。場中の看客書を讀まず字を知らざるもの狂女の科白を聽いて笑を洩す事一再に止まらず。是 Ophelia の言語を正意に解釋して、滑稽の趣を其うちに發見したるものなり。

"How should I your true love know
From another one?
By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon."—*Hamlet*, Act IV. sc. v. ll. 23–6.

卒然として王妣の前に出でゝ此歌を唱ふるものを正面より解釋すれば固より滑稽の感なきを得ず。"How do you, pretty lady?" の問に答へて

"Well, God 'ild you! They say the owl was a baker's daughter. Lord, we know what we are, but know not what we may be. God be at your table!"

—*Ibid.*, Act IV. sc. v. ll. 41–4.

と云ふものゝ語を其儘に觀ずれば、同じく滑稽の門牆に向つて裳をかゝげて走るが如し。夫に棄てられたる Ruth を敍する Wordsworth は云ふ。

"I, too, have passed her on the hills
Setting her little water-mills
By spouts and fountains wild—
Such small machinery as she turned
Ere she had wept, ere she had mourned,
A young and happy Child!"

大人にして此兒戯を演ずるものを正面に見たる時、吾人の感は依然として滑稽を免かれざらん。是によつて之を見れば Ophelia を笑ひ Ruth を笑ふを以て常情に遠かれりとなすは狂人の言動は正解するを許さずと命ずるが如し。もし理を以て論ずれば正解は常なり、反解は權なり。權を以て常に更ふるは只前後の事情のしかく吾人を促がすが爲めのみ。此事情の勸誘を受けざるものが Ophelia の狂態を滑稽化するは化し得て妥當なりと云ふを憚からず。もし夫れ裏面に一點の酸味を點じて悲慘の氣を狂言綺語の間に漲らしむるに至つては字を知り文を解し劇の發展より得來り

たる惰性に吾を放棄して始めて之を能くす。此時に至つて反解は周圍の狀況と映じて渾然として漸く自然の域に入る。故にOpheliaの科白は本來よりすれば滑稽ならざるべからずして、しかも普通の教育あるものが視て以て悲慘なりとなすは彼等が沙翁を知るが爲めなり。沙翁を知つて彼の作爲せる空氣中に生息するが爲なり。此空氣のうちに生息するものは何人も此着眼點より彼女の科白を解すべく自然の要求に促がさるゝは、彼等が此科白中に滑稽分子あるを想像し得ざる程に反解しつゝあるを以て知るべし。かくOpheliaを解するの自然にして、しかも、かく解するの正意にあらずして反意なるを知らば番卒の科白を物凄く解するの反意なるにも關はらず極めて自然にして且つ穩當なるを見るべし。此意見を穩當とする時、彼の一節は對置の形式を具へて却つて調和の用をなすに過ぎざるを覺るべし。

文學史中此種の作例を古人に求むれば指を屈するに遑あらず。左の一節は通讀の際とくに余の興味を惹けるを以て玆に引用す。讀者もし獄卒のしきりに斧を磨ぐの狀を想見し、又其高聲俗謠を放歌して憚からざる態を連結して、兩者の對置が如何に調和の功を奏するかを驗せば或は余の所論の事實なるを首肯せん。

"'Take care of yourselves, masters,' observed Mauger. 'I must attend to business.'

'Never mind us,' laughed Wolfytt, observing the executioner take up an axe and

after examining its edge, begin to sharpen it. 'Grind away.'

'This is for Lord Guilford Dudley,' remarked Mauger, as he turned the wheel with his foot. 'I shall need two axes to-morrow.'

'Sharp work,' observed Wolfytt, with a detestable grin.

'You would think so were I to try one on you,' retorted Mauger. 'Ay, now it will do,' he added, laying aside the implement and taking up another. 'This is my favourite axe. I can make sure work with it. I always keep it for queens or dames of high degree—ho! ho! This notch, which I can never grind away, was made by the old Countess of Salisbury, that I told you about. It was a terrible sight to see her white hair dabbled with blood. Poor Lady Jane won't give me so much trouble, I'll be sworn. She'll die like a lamb.'

'Ay, ay,' muttered Sorrocold. 'God send her a speedy death!'

'She's sure of it with me,' returned Mauger, 'so you may rest easy on that score.'

And as he turned the grindstone quickly round, drawing sparks from the steel, he chanted, as hoarsely as a raven, the following ditty:—